
フライングソーサー 2 1 4

東樹 九林

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フライングソーサー214

【Nコード】

N8538C

【作者名】

東樹 九林

【あらすじ】

2月14日。バレンタイン。宮瀬直樹はその日、これまでの生涯バレンタインチョコ数を遥かに上回る本命チョコを渡される。驚き、テレつつも悪い気はしない宮瀬に、黒い悪魔が叫んだ。「コラーこのエロメガネ！！にやついてんじゃねーぞお！！」147センチの小さな女バス部長、相羽美夏は、廊下の端からソレを投げつけた。宮瀬と相羽、数ヶ月前の”伝説”の当事者同士のケンカから、物語は始まる。

プロローグ（前書き）

高鳥中学校にてUFO（未確認飛行物体）の一種、フライングソーサー（飛行円盤）が多数の生徒に目撃される。

うち、生徒一名がフライングソーサーと接触。

それが、少年と少女の運命を変える事件へと発展する。

以下は、その事件の詳細である。

嘘だけだな。

ブローグ

福岡県福岡市

高鳥中学校にてUFO（未確認飛行物体）の一種、フライングソーサー（飛行円盤）が多数の生徒に目撃される。

うち、生徒一名がフライングソーサーと接触。

それが、少年と少女の運命を変える事件へと発展する。

以下は、その事件の詳細である。

（こんなこと………生まれて初めてだ）

高鳥中学校2年1組、宮瀬直樹は人生初の感動を味わっていた。

「宮瀬君、お願い、これ……もらってほしいの」

「あ、ありがとうございます。先輩」

「私、すぐ卒業しちゃうから、返事は早くしてね。ホワイトデーまで、待てないから」

「は、はい。先輩」

わざわざ二年生の廊下まで降りてきてくれたタカチューナンバーワンの美人と名高い宝城先輩は、衆人環視の中、好奇の視線も意に介さず、大胆に可愛くラッピングされた小箱を押し付けて、色っぽい流し目と、色気のある微笑を印象づけて悠然と去っていった。

「おいおいナーオキー、モテモテじゃねーか」

「これでいったい何個めだー」

廊下に立ち尽くす直樹に、下校するクラスメイト達がはやしたてる。

嫉妬と羨望の混じった声色で。

少しズレた眼鏡を直しつつ、直樹は素直に問いに答えた。

「ええっと……………これで8個目」

「マジかよ！すげーなー！」

「俺なんて、俺なんて……………義理ですら1個ももらってねーのに……………」

クラスメイト達が驚愕の声を上げ、よよとすすり泣く中、実際、一番驚いているのは、直樹自身だった。

宮瀬直樹はあまり目立つタイプの人間ではない。

積極的に話の輪に加わることはせず、クラスのはじっこで、ばーっとしてゐる事が多い。

成績は平均点スレスレ。

交友関係は、狭い。それほど友達と呼べる人数は多くなく、その大半とも、付き合いは薄い。

178センチと幾分長身ではあるが、学年全体ではせいぜい5番目に高い程度でしかない。そもそもいつも猫背にしているせいで、いつもはもう少し小さく見える。

かなり視力が悪いために分厚いメガネをかけ、乏しい表情の変化がそのメガネのせいで更に分かりづらくなっている。長くぼさぼさの髪が顔にかかり、陰気さに拍車がかかっている。

眼鏡で、地味で、根暗。

それが一年前までの直樹への評価・イメージ。

空気のような、居ても居なくても変わらない存在に過ぎなかった。

だが、その評価は数ヶ月前の”伝説”によって急変していた。

「宮瀬くん、私もチョコ作ってきたんだけど」

「もらってくれないかなー？ 私達二人で作った自信作なんだけどー」

更に他クラスの二人の女子が、直樹の下校を待ち伏せしていた。
左右同時にチョコを渡される。

「あ、ありがとう」

多少面食らいながら、直樹が戦果が二桁にかかるそのチョコを受け取るうとした……その時！

「コラーこのエロメガネ！！にやついてんじゃねーぞお！！」

響き渡る怒声が、校舎を震撼させた。

直樹にチョコを渡しにきた女生徒、直樹を取り巻くクラスメイトだけでなく、驚いた下校途中の生徒達までもが足を止め、声の主を探す。

教室一つ分の距離を隔てた廊下の端。声の主はそこにいた。
150センチに満たない小さな体の、まるで少年のような少女だった。

「相羽？」

「あいばさん？」

「なにやってんの、みか？」

相羽美夏。読みは『あいば みか』

髪を男の子のように短くしたボーイッシュな女の子。小さいながらも、女子バスケ部期待のエースにしてキャプテン。

チヨコレート・ブラウンの健康的に焼けた肌は、たゆまぬ日々の走りこみの証。生命の輝きを発散する細身の体。

小さな顔立ちに大きな瞳、野良の黒猫のような印象の少女。

見た目だけでなく、性格も言動も男っぽい少女の突然の乱入に、観衆はどよめく。

「チヨ、チヨコもらったくらいでニヤケてんじゃねーぞ、このス、スケベメガネー！」

「な、なに怒ってるのさ、相羽さん」

「べ、べえつに怒ってなんかいいー！！」

声を荒げる相羽と、しどろもどろになる直樹を、多くの生徒達が見守っている。

数ヶ月前の”伝説”の当事者同士のケンカ(?)は生徒達のいい見物になっていた。

「お前みたいな甘党メガネには！」

美夏が突然投球フォームを取る。

大きく振り上げた足。 ひらめくスカート。 男子が色めきたった。

「こいつをくれてやらーーーーー!!!」

右手に掴んでいた物体をサイドスローで放り投げる!

「な!?!」

意味不明の行動に、直樹は呻き、そして目撃する。

空を切って飛び、風に乗って走る、謎の飛行円盤を。

廊下に立ち止まるクラスメイトの頭上を越えて、一クラス分数十メートルの距離を越えて自分目掛けて飛んでくるフライングソーサーに直樹の目は釘付けになり……

激しい横回転でカーブの掛かったフライングソーサーは、自由を求めて開いた窓から外へと進路を変える。

「あ、外にでるぞ!!!」

誰かの言葉で、直樹は反射的に動いた。

フライングソーサーの進路を予測し、最短距離を突っ走る。真横を駆け抜けられた女子が小さく悲鳴を上げる。

だが間に合わない、飛行円盤はその全体を狭い教室から大空へと移して

ドン!という鈍い音。一切減速せず、廊下の壁に腰をぶちあてながら、伸ばした右手は

「おお!?取りやがった!」

「宮瀬!超ファインプレー!!!」

窓から体を半ば投げ出して、間一髪でソレを掴んだ。

「イタタタ……こ、腰いたい………」

少しだけ涙目になった直樹が腰をさすりながら体を戻す。勢いを殺しきれず転落しそうになったのは秘密だ。

「……………あ……………」

廊下の端で、美夏が何かを呟いたけれど、間が開きすぎて、そのつぶやきは直樹の耳までは届かない。

直樹は痛めながら手にしたものに視線を落とす。
それは

「……………せんべい？」

顔より大きな巨大せんべい。

ひつついた海苔も、これでもか！ええいこれでもかあ！！といわんばかりに大きい。

そっけない透明ビニールのラッピングが、なんとなく座布団を思わせる。

バレンタインデイに、でかいせんべい。

わけがわからない。宮瀬が首を捻った。

今年から、自分の知らない間にバレンタインのルールが何か変わったのだろうか？

「なんで、せんべい？」

不思議で仕方ない、という表情を顔に張り付かせて直樹は美夏に問いかける。

そしてその質問は、この場にいる何十人というクラスメイト達も同じ思いであった。

なんで？

バレンタインにせんべいを？

「甘いもんばつか食ってたら飽きるだろーが」

腕を組んで横を向いて踏ん反りかえって、ツーンとした表情で、美夏は言い放った。

「……………まあ、そうだね」

そんだけの理由で？という言葉は飲み込みつつ、納得できないまま取り合えず答える。

美夏の瞳の強い眼差しを受ける。苛立ちと、それ以外の何か強い感情に瞳を潤ませて。

「急にモテるようになったからって、イ、イイ気になってるんじゃないぞ！」

あっかんべー、と舌をだして、小学校低学年児童みたいな真似をして美夏は去っていった。脱兎のごとく。

「あっ、逃げた」

きょとん、としたみんなを残して。

「……………いったいなんだったんだ？」

がやがやとあたりが騒がしくなる。憶測が飛び交う。

「おう、宮瀬。お前相羽とケンカでもしたとや？」

ふとつちよの折田が問う。

「いや……………最近は話すらしてないんだけどさ」

「ああ、学校から禁じられとうもんなあ、クラスで話すこともできんからケンカなんかできるハズも無かし」

掴んだせんべいを、宮瀬はシゲシゲと眺めてみた。

「わざわざバレンタインの日にせんべいを贈るということは……………」

……………」

どういうことだろうか？ こういうことだろうか？

『バレンタイン チョコレート（甘い） 好き』

これがバレンタインの公式。

でも今回は、

『バレンタイン せんべい（塩辛い） 嫌い（？）』

「俺って、よっぽど相羽さんに嫌われてるのかなあ……………？」

ぼりぼりと左手で頭をかきながら直樹は苦笑する。

直樹の耳を多種多様な声が耳打つ。

「なにあの子ー、感じ悪いー」

理解不能な美夏の行動をなじる声。

「あつはつは、よっぽど嫌われたんだな、宮瀬。お前なんか嫌われることしたか？」

「いや、これといって何も覚えはないけど」
居心地悪げにせんべいに目を落とす直樹。

理解不能・意味不明。どう反応するべきかも解らない。そんな困惑が直樹の心を支配していた。

本人に尋ねたくとも、それは禁じられている。
どうしたものか、どうしようもないのか。

投げた本人の意図が確かめられないまま、この珍事は学校全体に瞬く間に伝わることになる。

> i 6 5 5 — 1 7 5 <

バレンタイン・イブ（前書き）

フライングソーサー事件の前日。

バレンタイン・イブ。

相羽美夏は悩んでいた。

バレンタイン・イブ

「あっちゃー……」

アタシはジーザス！なんてこつたいと心の中で叫びながら天を仰いだ……室内だけだ。

深夜2時、家族に隠れてのチョコ作り。

14歳にして初めての手作りバレンタインチョコは……

「湯煎って……お湯に溶かすことじゃないのかよう……」

実に、初歩的なミスで終わった。

おかしいおかしいなんか変だと思いながら突っ走った結果、見事に大失敗アツチャー！。

お鍋にチョコレート。

ドロドロに溶けて、お湯で薄められたチョコレート。

ココアよりも薄くなった、元チョコレート汁。

何時間か煮込み続けて水分を飛ばせば、またチョコレートに戻るかもしれないけど……

「あー！もうやーめたー！」

鍋のチョコのなれの果てをキッチンに流す。甘い匂いが鼻につく。おこづかいをはたいて買った、チョコレートの99%がお湯と共に流れていく。

それが、アタシの恋心も一緒に流れていくようで、気分が悪い。

「寝よ寝よ、どうせこんなの作っても勝てっこないんだし」

後片付けもせずにアタシは台所を出て、部屋に戻り、布団にダイブ！枕に顔を埋める。

深いため息。

勝てっこない。

そう、勝てっこない。

6人。

それが、宮瀬にチョコをあげる事を宣言してる人数。同学年だけじゃなくって、先輩・後輩にも上げるつもりの人がいるらしい。

6人！すごい、バスケのチームが作れるやん！控えまでついて！

当日になれば、もっと多くの人が宮瀬にチョコを渡すかもしれない。もしかしたら、2桁にまで達するかもしれない。

その中には、きっと、アタシなんかより、綺麗で、可愛くて、女の子もいるのだろう。

（あのエロメガネ……誰かと付き合っのかな）

事前情報で一番綺麗なのは宝城先輩だ。

背も高くて、すごく女らしい。

アタシには無い”色気”がある。

胸もおっきい。

てゆーか、同じ中学生であのケバさはどうかとアタシには思っんですけど！？

（でも、男の子としては……………そーゆーのが、好き……………なの、かな？）

対抗に上がるのは、山口さんか。

天然のおばかさんだけど、見た目だけなら本当に可愛い。ロリコンに好かれるタイプよね。

女のアタシからすると、うざいだけなんだけど、あーゆー底抜けの明るさ（てんしんらんまん、とかいうんだっけ？）は男に魅力的に写るものなのだろう。

声もアニメっぽいし。

そして……………檜山さん。

身長173センチの檜山さんと、178センチの、宮瀬。

この二人が並んでいると、なんというか……………すごく、『絵になる』。

モデルみたいに綺麗で、頭が良くて、運動も出来て……………二人ともメガネかけてるし。

小五の頃から足掛け四年、二人は連続で同じクラス、学年が変わってもずっと『一組』同士だった二人には……………なんというか、『絆』みたいなものを感じる。

それが、男女間の『友情』に過ぎないのか……………それとも、もっと深いものなのか……………

対して、アタシの方は？

チビで。

色黒で。

ぺったんで。

口が悪くて。

女らしさでは敵わない。

可愛らしさでは太刀打ちできない。

セクシーさでは、勝負にもならない。

家事もへたくそで、チヨコレート一つ満足に作る事ができやしない。

こんなアタシが、宮瀬に告ったところで、他の女の子達に勝てる筈がない。

チヨコ作りが失敗したのも正解なんだ。

アタシに恋愛なんて似合わない。

少女マンガみたいな女々しい恋物語よりも、少年漫画みたいな友情！努力！勝利！な方がアタシの性にはあってるし。

(…………アタシは、宮瀬との関係を、壊したくないし…………)

ぎゅっと、枕を抱きしめる。

(そもそも、アタシは何でアイツなんか好きになったんだっけ？)

宮瀬直樹。

メガネで、地味で、根暗。

背が高い癖に影が薄く、いつもクラスに居るのか居ないのか良く分からない奴。

小4の時以来、久しぶりに同じクラスになった時も身長以外は、イメージに変わりは無かった。

「相変わらず変わってないなー、へばメガネ。変わったのは身長くらいか？」

「そーゆー相羽さんもイメージ変わってないね。身長もあんまり変わってないし」

「うつせー！ー！これから伸びるんだよー！！」

「可哀想に……なまじ人より早く二次性徴が来た分、成長が止まるのも早いなんて……どんだみんなに抜かれていくなんて……かわいそうに」

「二回も！！二回も可哀想になんて言うんじゃないやねえー！！」

久々同じクラスになった時の初めての会話はアタシのチョップが炸裂した。

成績は並以下。

髪はぼさぼさ、オシャレになんかてんで無頓着。

背が高い事だけが、唯一の取得。

「おいコラ、デカメガネ！その身長もつたいないからアタシに20センチくらいよこせ！」

「うーん、ほんとにあげられるものなら、あげたいもんだけどねえ」

ほとんどクラスメイトと会話をしない宮瀬だけど、アタシは結構宮瀬に話かけた。

アタシと宮瀬の話題は常に共通していた。

「ねえ、あの試合見た！？やっぱT・MACすっごいよね！」

「ああ、まさか残り35秒で12点差を一人で逆転するとは思わなかったよ」

私達の会話は90%以上がバスケ。

BSでやってるNBAの感想とか、どの選手がすごいとか、ほと

んどがそんな感じ。

アタシはバスケマニアで。

宮瀬のほうはマニアを通り越して、完全にNBAオタクだった。NBAの30球団、選手総勢300人超のデータまでほぼ完璧に暗記しているほどである。

往年の名選手、名試合、各選手の笑える・泣けるエピソードなんぞも取り揃えていて、バスケ好きにとっては、相当面白い話をする。

が、バスケを知らない人や興味ない人には、全くつまらない事の上ない。

アタシは、宮瀬のバスケ話は結構好きだ。

特に『空飛ぶ冷蔵庫』の話には大爆笑だった。

ほかの人間は「オタクキモイ」って感じであんまり相手にしてなかったけど。

「てゆか、メガネさ？アンタその暗記力勉強に活かしたら、相当点とれね？」

「興味ないことに、無駄な能力を使いたくない」

アタシにとって宮瀬はバスケ話が出来る友達。

それ以上でも、それ以下でもなく。

ただの、友達。

単なる、友達。

他にもたくさん友達がいて、その中の一人。

それだけ。

それだけ、
だった。

あの日までは。

あの時まで。

それだけ、
だった

はず、
なのに。

『伝説』の試合（前書き）

数ヶ月前に思いを馳せる。

アタシが宮瀬をただの友達と思えなくなった日の事を。

学校中が、宮瀬をただのNBAMANIAだと思わなくなった日の事を。

『伝説』になったクラスマッチの事を。

『伝説』の試合

「だ？」

「ん？」

「じ？」

「よ？」

「『……………《混合》チームウ！？』」
体育館にええーっという悲鳴が上がる。

「しゃーねーだろ、人数足らねーんだからよ」
アタシ達の抗議は、サル面中年体育教師猿渡に見事にスルーされた。

アタシ達、タカチユー（高島中学校）のクラスマッチは生徒の選択式になっている。

男子は野球・サッカー・バスケのうちのどれか。

女子はソフトボール・バレー・バスケの内から一つ。

当然、バスケ部のアタシはバスケを選んだ。バスケ以外は考えられなかった。

でもクラスマッチは体育祭ほど盛り上がるわけでもなく、みんな熱心なわけでもない。

まあ、学校行事では微妙なもんではある。

好きな競技を選択できるといっても好きなように、というより消去法で選ぶ人が多い。

曰く、外でソフトボールは日焼けするからイヤ！とか。
曰く、バレーボールはレシーブすると痛いから、とか。

曰く、サッカーは痛いしキツイから嫌だ、とか。

その中で、今年は、バスケの参加者は輪を掛けて極端に少なかった。なぜならそれは……………

「おりゃー！！！」

バカっぽい気合と共に、バスケのリングが金属製の悲鳴を上げる。おおーっという歓声。

「すっげー！ Dankだ」

「私、見たの初めてー」

騒ぎの中心人物は空に浮いていた……………リングを掴んで。

「あのバカのせいか……………」

アタシははあつと溜息をつく。

日本じゃあ珍しい『生』 Dankを見せる男、8組の鬼頭に対して、中学生離れた、日本人離れた194センチの巨体。

部活でのバスケの練習に留まらず、実家が柔道をやっているとかで、実家でも鍛え上げた体が異常にごつごつとして、まさに『鬼』のような大男だ。

万年一回戦止まりだったうちの弱小男子バスケット部を県大会ベスト4まで伸ばした奴だ。

今年は全国を間違いないと狙えるとまで言われている。なんかバスケット雑誌の取材まで来てた程だし。

アイツが去年大暴れしたせいで、クラスマッチ・男子バスケットはケガ人が続出。

その所為で、今年のクラスマッチ・バスケットに男子がほとんど参加しなくなった、というわけだ。

「今年もアイツらが優勝かなあ」

「勝てるわけないわよねー、あんなのと」

諦めモードが周りの生徒の口について出てくる。

更に悪いことに、8組には鬼頭だけでなく男バスの中心メンバーが揃ってやがる。

ポイントガードの後田。

確実なボール運びと、ミスの少ないプレイが出来る。素人では止められない。

フォワードに、前橋。

テクニク抜群のシューターで、シュートレンジが広く、素人には太刀打ちできない。

更に、センターに鬼頭。

194センチの巨体がゴール下にあるだけで、素人には勝ち目がない。

勝てる要素がない。

そんなわけで、少しでも体育にイイ点が欲しい男子はサッカーと野球に移ったというわけだ。

見るとほとんどのクラスで、バスケットに参加してる男子は5人以下。確かにチームすら作れない。これじゃあクラスマッチが成り立たない。

（なんだよ男子、なっさけないなあ……………鬼頭程度のデカいだけの奴にびびっちゃってさ）

声には出さないけど、胸の奥でちょっと運動場側にいる男子どもを非難する。

「だからって、さわやかにやろうとした女子を巻き込むなよな」
アタシは腕を組んで抗議をするが、サル面体育教師は取り合わない。

「そっぴや、相羽さんってさ」

「あん？」

いきなり声を掛けられて振り返る。

珍しい、宮瀬の方から話しかけてきた。

ぼさぼさの頭を左手でかきながら、アタシに質問してくる。

「スラムダンクが出来る男以外はつきあわねー！とか小学生の頃言ってたよね」

「ああ、言ってたけど？ソレが何か？」

何が言いたいのか、やたらと

「じゃあ……さ、っ……付き合っちゃうの？あの、鬼頭君と」
「は？」

言ってる意味が分からず、硬直するアタシ。

一拍置いて、息を飲み込んで、やっとこさ意味を理解して、叫ぶ。

「あ、ありえねー……！！！」

アタシはカイツパイ否定する。

なにを言い出すかこのへボメガネは！？

「なんでアタシがあんなキリンと！？」

いい、このヘンテコメガネ！」

たじろぐ宮瀬にアタシはビシイー！と指を突きつけた。

「あんなちよつと背が高いからってダンクできるような奴と、アタシが理想とする『スラムダンク・アーティスト』とは全然別物なのよ！」

アタシが惚れるのはエア・ジョーダンみたいなたてつもないスラムダンクが出来る人で、だ・ん・じて・あんな芋ダンクのヘナチヨコとは違うの！分かった！？」

日頃NBAを見てるバスケットAKUとは思えない的外れな発言にアタシは断固として抗議する。

お前はビッグ・ジョージの『身長231センチだから手を伸ばせば出来るよダンク』と、エア・ジョーダンの『130センチ飛べるから、目の高さにリングがあるよダンク』を同列に並べるとは何たる侮辱か。

「はあ、分かったけど……でもそれじゃあ、日本人の99・999%ぐらいは恋愛対象外になるねえ」

宮瀬は苦笑する。

アタシは胸を張って宣言する。

「アタシは！

カッコイイダンクが出来る奴以外！

興味なし！！」

言い切る。宣言する。

結局、男女混合は撤回されず、各組チームが作られることになった。

「身長だけなら、うちもそんなに悪くないわねー」

アタシ	()	1 4 7
折田	()	1 6 5
きーちゃん	()	1 6 6
檜山さん	()	1 7 3

宮瀬 () 178

平均身長165・8はなかなか高いと思う。

最高平均身長、8組の

後田	()	159
前橋	()	172
鬼頭	()	194
遠藤さん	()	151
山口さん	()	155

平均身長166・2の次に高い。

「あまり、私に期待はしないで。球技は苦手なの」

メガネを直しながら、学年女子で2番目に背が高い檜山さんが話しかけてくる。

「またまたー、県大会2位取ったんだから運動神経は高いでしょう」

「それは水泳の話よ。今回は関係ないし、本当に球技は苦手なの」

「でもゴール下に檜山さんがいてくれると心強いわー。はつきりいって、運動オンチで、バスケットは見るだけ専門な宮瀬よりも期待してるから!」

「はいはい、どうせ僕は見る専ですよ」

「ばやく宮瀬は無視して、親指をビシッと立ててウィンクするアタシに檜山さんは溜息をつき、

「……………まあ、やれるだけやるわ」

「とだけ言って準備の柔軟を始めた。

() むむ

ジャージの上からでも主張する檜山さんのナイスボディにチヨイ

と心を奪われそうになる。

「羨ましいかい？ 檜山さんの……………か・ら・だ……………」

「な、なんば言いよつとね、きーちゃん」

別に羨ましくなんかないやい。胸なんて、なくっても……………なくっても！！

と、思いつつも脳裏に閃くのは、檜山さんの写真がデカデカと掲載された県大会の時の新聞。

ああ、あれはデカかった。同じ中学生とは思えねーくらいに！！

> i 6 6 2 — 1 7 5 <

時間が来て、各地でそれぞれのクラスマッチが開始された。

運動場ではソフトボール、野球、サッカーが始まったようだ。

カキイイイイイン、なーんて打球音とか、ゴールした時の大興奮の歓声なんか聞こえてくる。

体育館のもう一つのコートでは女だらけのバレー大会が始まって、黄色いにぎやかな声が体育館中に反響する。

バスケのクラスマッチも開始されて、いきなり第一試合から登場することになったアタシ達のチームがコートに出陣する。

ルールは一試合6分間。

七点先取したほうが勝利。

または6分経過時点で点数の多いほうが勝利。

同点の場合は2分延長オーバータイム。

各クラスマッチは全てトーナメント制。
初戦で負ければ、後は一日ボケっと思っているだけになる。

「さつさと負けよーぜ」

そんな発言もチラホラと聞こえてくる。

どうせ8組には勝てないから。

どうせ鬼頭には勝てないから。

さつさと負けてサボりたい。

やる気の無い奴が、このバスケの会場には大勢いる。

やる気の無い顔、やる気の無い目。

アタシの一番嫌いなものが、溢れてる。

なんか、凄くイライラする。

だからアタシは宣言した。

「いい！みんな、や・る・か・ら・に・は………目指すぞ！優勝！……」

「おおー！……」

相棒のきーちゃんがノリノリで返事をして、

「おー………」

男二人は適当に答え、

「はぁ………」

檜山さんはため息だけをついた。

うん！連帯感皆無だ！！不安感最高潮！！

実際試合をしてみると、アタシ達のチームは予想以上にまとまっていた。

試合時間、3分25秒。

7 - 2であっさり2組を倒した。

アタシが5得点、きーちゃんが2得点で7点先取。

試合時間半分近くを残しての大・勝・利！

宮瀬、檜山さんのメガネツインタワーが、迫力はないけど、堅実にしっかりとゴール下で縁の下の力持ちをやってくれるお陰で、アウトサイドでアタシときーちゃんのびのびとプレイできる。

女バス仲間のきーちゃんも

「檜山さん、ほんとに女バスに入ってくれると嬉しいんだけどー」
熱心に勧誘するほど檜山さんの影響は大きかった。

「私は、水泳部の方が大切だから。それに、身長だけで期待されても、そんなに嬉しくない」

「もー、檜山さんそんなこと言わずにー」

やっぱり背が高いのはバスケットでは有利だ。

それに足も速いし、基礎体力と運動神経の高さが経験の無さを補ってる。

「きつかり、バスケットでなんでこげんきつかとねー」

デブの折田も、見た目の割には良く動いて意外な健闘をしてくれる。得点こそ無いけど、ディフェンスで役に立ってる。これはほんとに予想外だった。

宮瀬がチームに連れてきた時は思わずブーイングしちゃったけど、こりゃ拾いものじゃないかな？

宮瀬は、ゴール下に立ってるだけでいいや、と思ってたけど、

「エビメガネさ、あんた意外に跳べるのね」

「なんで今回はエビなのかわかんないけど……まあ、ジャンプ力だけは鍛えてるから」

宮瀬は足も遅いし、動きもぎこちないけど、ジャンプ力だけは平均以上に高かった。

「ふーん……60センチくらいは跳んでるんじゃない？」

「さあ？最近測ったことないからわかんないな」

中学生なら50センチも跳べればいい方なのに宮瀬はその平均をあっさりと超えている。

「結構跳んどったやん、さっきの試合。リングに指届きそうやったし」

305センチ。

それがバスケのリングの高さ。

男子でも、全力で跳んでバックボードの一番下（275センチ）に指がつくのがほとんどで、リングにはかすりもしない中、リバウンドを取りに行く宮瀬の手は、そのリングとほとんど同じところまで到達していた。

宮瀬は左手でポリポリと後頭部をかきながら笑った。

「まあ、NBAとは比べ物にならないけどね」

「当たり前だ、バーカ」

198センチで130センチ跳ぶやつが居たり、210センチの怪物がジャンプ力100超えてたりする世界と比較しちゃだめだろ。「悲しいかなアタシ達はバスケット後進国日本人なんですから」

突き放すアタシの言葉に、

「そーだね。でも……」

宮瀬は、珍しく反論した。

「でもさ、いつか日本のバスケット……」

どこか遠くをみる横顔は、

「アメリカに追いつく日が来てほしいって、僕は思うよ」

なんだかいつもより、ちょっと違って見えた。

「語るなって、ばーか」

1試合目を終えて、

「やっぱ男子と一緒にだとスピードが違うわね」

「ほんと、いつもできるプレイが通用しないしね」

アタシときーちゃんは、この男女混合バスケットを楽しんでいた。

たとえ素人でも、男子の体力はやっぱり女子とは違う。女バスでいろんなこと試合もしてきたけど、それらとは違う、一味違った緊張感とダイナミックさがあった。

うん、楽しい。

アタシは、間違いなく、このクラスマッチを楽しんでいた。

何より、宮瀬と一緒にバスケットが出来るのが楽しかった。

アタシが落としたシュートを、宮瀬がリバウンドを取って、アタシにボールを返してくれる。

アタシがミスして抜かれた相手を、宮瀬が止めてくれる。

バスケットの話が面白いだけじゃなくて、バスケット自体でも、宮瀬が頼りになるって分かった。これは大きな発見！

宮瀬と一緒にバスケットの思い出が作れて、

宮瀬と一緒にバスケットの賞が取れる。

それが、楽しかった。

「何にやついてんの？美夏」

「あ、う、うあ、いやいや、なんでもねーよ！」

「……………最悪だわ」

対して、檜山さんは眼鏡の奥で怖い目をしていた。

「バスケって……………ここまで接触が多いなんて知らなかったわ……………」

「……………」

両腕を胸の前で交差して、溜息をつく。

「ゴール下はどうしてもねえ……………」

同じゴール下組の宮瀬が、まあまあとなだめる。

「ど、どうだった！？」

「な、なんかすっげー柔らかかった！ふよってしたぜ！ふよって！……………」

感触について、

「いや、この試合最高だよ」

「……………最悪だわ……………」

「勝つためには私がゴール下にいた方がいいんでしょう？」

「……………いいわよ、今日一日くらい我慢するわ」

クラスマッチ

男子テニス部の高崎と、女子で1番背の高い桑田さんがいる2組との2試合目はもう少し歯ごたえがあった。

「くっそ！誰か相羽を止めろお！！」

2組の高崎がイラつき気味に叫ぶのをアタシはニヤリと笑って返した。

「へへ、止めれるもんなら止めてみなー！！」

アタシを止めれる奴は、あんまりいない。

どこと練習試合をしても、大会にでても、アタシを止めれる奴は、あんまりいなかった。

バスケは身長がものを言うスポーツ。

305センチのリングの下では、194センチの鬼頭のような奴がいたらアタシみたいな140センチのチビじゃあ勝負にならない。パワーとごり押しの肉弾戦が行われるゴール下は正しく戦場。

でも、ゴール下だけがバスケのコートじゃない。

広いアウトサイドで、スピード・クイックネス・テクニクの全てを駆使して、相手を翻弄するのも、バスケの重要な戦術。

そこでは、ゴール下ほど身長の絶対的有利はない。

小さな体の低いドリブルは、相手にボールを奪われにくい。

だから、アタシは果敢に突っ込んでいく。

味方がハラハラするくらい、切り込んでいく。

コーチが無謀だというくらい、ぶつかって行く。

ダブルチームに来た。

アタシ一人を止めるために、2組のディフェンスは二人をアタシにつかせてきた。

でも

(甘いよ！)

「あ！？」

「きゃん」

二人の間を中央突破して、アタシは一気にリングへ迫る。

オオッ！！という歓声を背にアタシはリングへと飛び立ち……

あっさりと、ボールをリングに『運んで』入れた。

4 - 4

「よし、同点！！」

「ナイス！美夏ナイス！」

先行されてた分を取り戻して、ギャラリーから歓声が沸き起こる。

次の2組のオフENSEは勝負を焦った高崎が3ポイントを大外しして、あっさりアタシ達の攻撃に戻る。

檜山さんのリバウンドからアタシにボールが渡される。

アタシはすぐにフルスロットル！

目の色を変えて、アタシに殺到する2組男子（名前なんだっけ？）に

(ばっか)

と心の中で舌を出して、

「おお、スピンした！」

「みなきち〜かつこいいぞ〜!!」
スピੰムーブで置き去りにする。

「速攻!!」

中央線ど真ん中を全速力。

アタシの叫びにきーちゃんと宮瀬が続く。

きーちゃんが左、宮瀬が右。

相手のディフェンスは男子テニス部の高崎と、桑田さんの二人。
人数はこつちが有利。

（へへ、ちよつとすごいのみせちやおつかな）

アタシのイタズラ心が刺激されて、なんかみんなにスゲーと言われる事がやりたくなった。

（なに　し　よつ　か　な　）

全速力のまま、左手ドリブル、頭は楽しい事高速フル回転。

リングに近づいても、二組の二人はゴール下から動かない。

（それなら!!）

ピン、ときたプレイを実行する。

右見る。宮瀬が付いてきてる。

ボールを持って左手、右に振る。高崎、宮瀬をチェック。

（あは、まんまと騙された）

べつと舌を出して笑って、ボールを左手から右手にスイッチ。そして

「ノールック!?!」

「すつげーパス!!」

右手のボールは背中越しに左45度3ポイントラインにいるきーちゃんへ届く。

きーちゃんは完璧などフリー。

プレッシャーのない、ほれられするような、綺麗なロングシュー
ト。

シュパ、といい音を立てて3ポイントが決まった。

7 - 4

高く澄んだ笛が鳴る。

試合終了！

1組勝利！！

「相羽すっげーなー」

「さすが女バス部長だけあるなあ」

うふふふ、聞こえる聞こえるアタシへの賞賛の声が！
もっと褒めてプリーズ。
アタシは褒められて伸びる子なのだ。

女バスでのアタシのプレイスタイルは、
味方に点を取らせる司令塔であり、
切り込み隊長であり、
一番の点取り屋なのだ。

「相羽さん、ナイスプレイ」

「こ、こら、こどもじゃないんだぞ、頭なでんなあ！！」
コートから去り際、死角から髪をぐしゃぐしゃにしてきた宮瀬に
噛み付く。

「試合してて思ったんやが……………」
折田が話しかけてきた。

「お前、黒猫みたいなの」

「黒……猫？」

「ああ、黒猫。にゃー」

「にゃー？」

鸚鵡返しに、きーちゃん。

「みゃー」

続けたのは、宮瀬。

「ぶなー」

年寄り猫の真似で返す折田。

「しゃー！」

アタシは爪ひつかきのポーズを作る。

「……え、えっと？」

困惑する檜山さんのところで、バカな寸劇は中断した。

「あー、檜山さんノリ悪い〜」

「おし！もつと空気読んでコー！」

きーちゃんと折田がイジリ、野次る。

檜山さんはしばらくおろおろしてたが、

「みゃ……みゃああ……」

肩をすくめて、顔を赤らめて、精一杯の猫真似をした。

「ナイス猫」

「ナイス猫」

ぱちぱちぱちぱち、拍手。

生真面目な檜山さんの貴重な猫真似シーンはいかがでしたでしょうか？次回のイジリをご期待ください。

「てゆか、相羽さんの『シャーーー！』もどうかと思う」

「コマカイコトハキニスンナ、メカメガネ」

仕事人？宮瀬

アタシ達はトーナメントを勝ち進む。

アタシが切り崩し、

きーちゃんがロングシュートを決め、

折田が無難なつなぎ役に徹し、

檜山さんがゴール下を補佐し、

そして宮瀬は、縁の下の力持ちになっていた。

そこで生まれた、違和感。

(ん~~~~……………?)

いくつかの危ない試合、

いくつかの決定的な場面で、

ここぞという時は、必ず宮瀬が『仕事』をしていた。

例えばそれは、

2組との試合でのブロックショットだったり、

3組との試合での自分に引き付けきつてからの、檜山さんへのアシストパスだったり、

4組との試合でのパスをインターセプトだったり、

5組との試合での、2本連続でのオフエンスリバウンドだったり

……………

宮瀬の得点はここまで未だゼロ。

でも、リバウンド・ブロックは結構いい数字。

背が高いから当然とも言える数字だけ。

(う~~~~ん……………?)

宮瀬は、運動が得意ではない。

宮瀬は、バスケット部に入っていた事は無い。

でも、

負けそうになったら、

危なくなったら、

必ず宮瀬のナイスプレー

から流れが変わる。

かといって、宮瀬が常にいいプレーをしている訳じゃない。

へばいミスも多い。

全体的に言えば、宮瀬は足を引っ張ってる。

特にシュートはひど過ぎる。

なんでそんなドフリーを外せるかなあ、というくらいひどい。

でも、いざとなると、

宮瀬が『まぐれ』でいいプレーをして、チームを勝利に導いている。

(んんんんん?)

のほほんとした顔で八組の試合を見ている宮瀬の横顔をアタシは見上げる。

男の癖に長めに伸ばした髪と、無駄にでかいメガネのせいで表情の分かりづらい、宮瀬を、見上げて、

「どしたの？怖い顔して」

気づかれた！！ぱつと眼をそらす。

「な、なんでもねーよ」

ちよつとドキドキしつつ、改めて考える。

……じつはこいつ、けっこうセンスあるんじゃないか？

いつもバスケの話しかしてないけど、得点力は皆無だけど、時々ものすごく鋭い動きをしてる。

ただの『マグレ』じゃない………ような、気がする。

きとつは恐竜

8組の試合は、再び圧勝に終わった。

4分ちよいで、7 - 0の完勝。

試合は、ゴール下の支配者、鬼頭の独壇場。

「あいつは……恐竜だよ」

そうぼやく声が聞こえてくる。

前の試合で鬼頭に叩きのめされ、哀れパワープレイの犠牲になった6組Aチームの福田君のぼやきだった。

恐竜。

怪獣。

暴君。

鬼頭はこのクラスマッチでも、大人げないほど暴れまわっていた。剣道部期待の部長で、かなりがっしりした身体の福田君を、散々にぶちのめした試合は、鬼頭の凄さを改めて体育館のみんなに見せつけた。

あの巨体と怪力を止めれる奴は校内にはいない。
県全体でも何人かだろう。

「このままいったら、アイツらとの決勝ね」

ここまで全て完封、完勝の八組。

アイツらに勝つには アタシは腕に力を込めて、メンバーに激を飛ばす。

「鬼頭を止めないことには、勝利はないわ！」

「だがのお、どうやってとめるんじゃ？」

「宮瀬 気合と根性！！」

「まあ、怪我しない程度にがんばるよ」

「エエイ、根性無しめ！！」

ぽやつとした笑みを浮かべる宮瀬に幻滅する。

ここまでの感じから、もしかしたら、宮瀬が、とか、おもったりもしたけど、やっぱり気合も何もなさそうなコイツの面を見ると何も期待できやしない。

「ふっふっふっふ……あーん・しーん・しなさい美夏」

ポニーテールを揺らしてニヤリと笑うのは、きーちゃん。

「校内ナンバーワン策士のアタシに任せんしゃい！！」

「きーちゃん！？何か策があるのか！？」

「ええ！ばつちりあつてよ！必勝の秘策が！！檜山さん！」

「え！？ええ？……な、何？」

突如指名された檜山さんが、ビクッと肩をすくめる。

その肩を、ガシイイと、強く、強くきーちゃんが掴む。

「檜山さん、この試合の鍵は……貴女が握っているの！」

「わ、わたしが……？」

「そうよ、檜山さん。貴女が……貴女がああ鬼頭を止めるの！！」

「名づけて 」

みのもんたばりのタメを作る

「セクハラ・トラップ!!」

見る間に、檜山さんの顔が冷たくなっていく。

「
帰るわ」

「待てい!! 逃がさんぞう!!」

回れ右した檜山さんの腕を、きーちゃんがガツシと掴む。

「うふふふひひやまさああん。あなたのモデル並の身体、チー
ムのために使わせてもらうわよー」

「ちょ、ちよつと、その言い方親父くさい……………」

「そして負けチームのみんなー!!」

「ちょーっとお願いでいいかなー?」

「うっせー、負けチームゆうなあー!!……………で、なんだ?」

こそこそと根回し工作を始めたきーちゃんを、啞然とした顔で折
田がつぶやく。

「なんやしらんが……………何を企んどるんじゃ、あやつ」

「さあ? でもなんか面白そうだからオツケー」

呆れきった顔で笑いながら、宮瀬は呟いた。

「楽しそうだなあ、女バスは」

それから、ちよつとだけ真顔になる。

「……………じゃあ、僕も、僕なりに微力を尽くすことにするよ」

きとうのセクハラ

決勝戦。

アタシ達1組Aチームと鬼頭達8組Bチームで決勝は争われることとなった。

運動場で野球やサッカーに参加した子たちも、決勝戦ということで観戦にきて、体育館の人数は膨れ上がり、熱気が溢れかえっている。

そして、きーちゃんの秘策は成功した。

鬼頭にボールが渡る、と

「せーくはらー！せーくはらー！！」

「鬼頭のスケベー！！」

「わー、鬼頭くんやらしー」

面白がったみんなから野次が飛ぶ。

「う、うう……」

ゴールを背にボールを持った鬼頭が、動くに動けない。

194センチの鬼頭にマッチアップしているのは檜山さんだ。

知らない人の為に解説しておく、バスケットでは背中や腰を相手にぶつけるのは合法である。

なので、ゴール下でのプレイでは相手に背中を当てて、ボールを保持するポストプレイや、腰と背中であつかってディフェンスをこじ開けるパワープレイがセンターの主なプレイになる。

さて、今鬼頭さんにマッチアップしているのは檜山さんだ。

鬼頭がポストプレイをすると、マッチアップしている檜山さんは、ぴったりと鬼頭につくことになる。

その際、檜山さんの胸が、鬼頭に当たるのだ。

もう一度言おうか？

檜山さんの胸が！当たるのだ！！

効果はバツグンだ！

「鬼頭のスケベー！！」

「檜山さんがセクハラされてるー！！」

「きゃー！！オマワリサーーん！！痴漢が！チカンがいますよー！！」

ノリノリで野次を飛ばすみんなに、きーちゃんがウィンクして親指を立てる。

もちろん、みんなきーちゃんの悪巧みに乗っているのだ。

顔を紅くした檜山さんが健気に鬼頭の攻撃を防ぐ。

ここまで多くの対戦相手を吹っ飛ばしてきた鬼頭も、流石に女の子を相手に容赦の無いパワープレイをすることはできない。

鬼頭が攻めあぐねているところを

バチンと、高い音が響く。

鬼頭の手からボールが奪い取られた。

死角から近づいた宮瀬が、鬼頭の手からボールを叩き落とした。

おおお！！と観衆が沸きあがる頃には、アタシときーちゃんは逆のリングに全速力！

宮瀬の手から放たれた矢のような高速パスは、

（宮瀬、パスウマイ！？）

全速力のアタシが取りやすいところに、ドンピシャで飛んできた。

（これなら　　！！）

ボールを受け取り、リングへ。でも

（ウソ！？それでも　　！？）

全速力のアタシ達を嘲笑うかのように、更に上回る速さで後田と前橋がとくに守備を固めていた。

速攻を諦めて、味方の上がりを待つ。

悔しくて歯噛みする。

（せっかく、宮瀬がいいパスくれたのに）

鬼頭のパワープレイは無力化された。

でも、アタシときーちゃんもまた、後田と前橋に完全に押さえ込まれていた。

スピードで負けているせいで、効果的な速攻にいけない。

残り時間3分。

アタシ達は全然点が取れない。
8組は、鬼頭が止められても、後田と前橋が得点を重ねていく。

ナオキはナオキ

速攻を諦めて、宮瀬達三人が来るのを待って、仕切りなおす。

鬼頭の攻撃力は封印出来たけど、守備力はやっぱり驚異だ。

ゴール下で勝てない以上、チャンスは外になるんだけど、こんな時に限って、アタシもきーちゃんも外からのシュートが全然決まらない。

一本でも入れば、流れをこっちに引き寄せられそうだけど……

マッチアップする後田を睨みつけながら、視界内を出入りするきーちゃんの動きを見流さない。

きーちゃんも、前橋のマークを振り切れない。

(…………アタシが、自分でやるしかないか)

ぺろっと上唇をなめて、気合を入れる。

ダン！と低く鋭いドリブルで後田との距離を詰める。

「!？」

慌てて後ずさる後田の左横に右手右肩を強引に割り込ませて、後田の動きを制する。

そしてそのまま一気に 抜き去る！！

結局アタシのシュートは外れて、リバウンドは8組の手に、悠然と時間をかけて、8組の攻撃が再開する。

ダン・・ダン・・ダン・・

コートを叩くボールの音。

後田がマッチアップしたアタシと相對する。

（次は……どうくる？）

アタシは腰を落とし、後田の突破に備える。

ダン・ダン・ダン・

右、左、右、左、右、左……アタシの前で後田の手の中のボールが左右を交差する。

（次は意地でも止めてやる！）

鬼頭のパワープレイを止められた8組は、ここまで後田の突破を中心にディフェンスを崩してきた。

（アタシがここで止めないと………終わりだ）

ダ・ダダン！

（！）

後田の身体が大きく右にブレる！！

（止める！）

アタシは反射的に右に動き

「あーっ！！」

弾丸のように、後田に『左』を突破された。

きーちゃんと折田がすぐにカバーに入るが、間に合わない。

後田のイージーなレイアップが、ネットを揺らした。

0 - 6

八組は完全勝利にリーチ。

あと一点、たった1点とるか、このまま1分ちよいで逆転されない限り勝利は約束された。

アタシ達はほとんど敗北が決まった。

あと一分ちよいで7点とらない限り勝てやしない。

次決めたとしても、時間稼ぎをされたら終わりだ。

「こりゃ、終わったなー」

「相羽たちもがんばったんだけどなー」

「やっぱり8組は別格よねー」

「鬼頭くんの存在自体販促だよー」

ギャラリーの熱も冷めてきた。

試合の結果がほとんど決まって、興味を失った運動場組の奴らが体育館を後にしていく。

戻る途中に鬼頭が後田に威圧的に話しかける。

「おい、最後は俺に点取らせろよ」

「わーっ たよ、キャプテン」

八組はフィニッシュをどうするかまで決める余裕。

手も足も立たないアタシ達なんて、まるで居もしないかのように。

そしてなにより、

「まあ、ここまでよくやったかな」

平然とした顔に、そんな言葉を貼り付けたかのようなナオキに、
少しイラつく。

(~~~~~)

もやもやする。

頼りになるかと思ったけど、やっぱりナオキはナオキだ。
覇気ややる気が、ほとんど感じられない。

独眼竜 ナオキ

最後。

いや、最後になるかもしれない1組の攻撃は、

「おりゃーーーーー!!!!!!」

やけっぱちになったアタシの3ポイントが失敗して終わった。

「美夏、さすがにそれは無理だつて!!」

撃った直後にきーちゃんが無理というぐらい狙いが荒いシュートは、やっぱりリングに蹴られて、ボールは鬼頭の手には

ラスト。

いや、ラストになるかもしれない8組のオフェンス。

後田からボールは前橋に。

前橋がシュート

「この!!」

きーちゃんがブロックに跳ぼうとして、

前橋は、きーちゃんの横をドリブルで駆け抜ける。

焦ったきーちゃんが、あっさりと前橋のシュートフェイクに引っかけた。

前橋がリングへ向かう。

逆側に居た檜山さんが、前橋を止めようとカバーに入った。でも、それは

（ヤバ）

猛獣の檻を開けることになる！！

前橋の手からボールが離れ、

「おっしやあ！！」

無人のゴール下でボールを受け取った鬼頭が、ケダモノの笑みを浮かべる。

終わった！！

誰もがそう思った。

アタシもそう思った。

この位置でボールを手にした鬼頭がやることは一つだけ。

百発百中のダンクをリングにお見舞いするだけでゲームセットだ。

鬼頭がリングに向かって飛ぶ。

一瞬遅れて、宮瀬がカバーに入る。

でも、カバーに來た宮瀬ごと粉碎するかのよう^にに鬼頭は金棒のような太い腕を振り回し

「邪魔だあ！！」

「！？」

モロに、宮瀬の顔にヒジが入った。

バランスを崩した宮瀬が、背中からコートに落ちる。

床が揺れる。重苦しい音を立てて、床が揺れる。

「ナオキ!？」

アタシは数年ぶりに、宮瀬の名前を呼んで倒れた彼に走り寄った。

ピーーーーーー、と高い笛の警告音。

強引過ぎるダンクに、審判がオフエンスファウルを鬼頭に宣告する。

「ち、邪魔しやがって」

不快気に、宮瀬を見下ろして、鬼頭は唾を吐いた。

「だ、だいじょうぶ」

コートには、宮瀬のメガネ。

歪んでる、宮瀬のメガネのフレーム。
外れてる、宮瀬のメガネのレンズ。

左目の周りに、大きなアザ。

「うわ、こりゃ、ひどい」

折田が参上を見て呻く。

「ちょっと、いくらなんでも今のはひどいんじゃない!」

きーちゃんが鬼頭に噛み付く。

ワザと、殴った。それを、きーちゃんは非難しているのだ。

試合が思い道理に行かなくなると、途端にプレーがラフになる鬼頭の悪い癖がここで出てしまった。

「しらねーよ、こいつが勝手に俺の前に来るのが行けねーんだろ！？」

鬼頭はシラを切る、どころか

「大体、宮瀬の癖に俺を止めに来るのが生意気なんだよ。NBAオタクはコートにこねえで、部屋でDVDでも見てろってんだ」

宮瀬をバカにする言葉を吐く。

こういう風に人を見下す性根の悪さが、アタシがコイツを嫌う理由。

「と、ナ・ナオキ大丈夫？」

ゆらり、と宮瀬が立ち上がった。

が、ふらついて、すぐに倒れそうになる。

ふらつく宮瀬が、アタシの身体を支えにする。

「…………アイバ」
「な、何？」

さん、をつけずに、宮瀬がアタシの名を呼んでくる。

宮瀬の声のトーンが、いつもより数段低い。
流石の宮瀬も殴られたうえに、バカにされては頭に血が上ったよ
うだ。

「ここから、ボールを」

耳元でささやく声には、怒気。

「全部、俺にくれ」

独眼には、覇気が籠もる。

「これから

勝ちに行くから」

『伝説』の60秒

ボールが一組に渡され、アタシ達の攻撃から試合が再開する。

残り時間が一分を切り、電光掲示板が秒単位のカウントダウンに。

60 (ケンカ、する気?)

ボールを運びながら、アタシの胸が痛くなる。

宮瀬のあの血走った目、怒りに震えた身体を思い出して。

59 ロープストに、宮瀬が陣取る。パスを要求。
もちろん、背には鬼頭がついている。

194センチの鬼頭は、ディフェンスでも脅威。

ゴール下にその巨体がそびえるだけでも、守りは鉄壁と化す。

58 アタシはためらいながらも、要求通りにボールを宮瀬に。
宮瀬は背後に鬼頭の巨体を背負い

57 ここまでクラスマッチ全試合0点に抑えてきた難攻不落の鉄
壁の城門は

今回に限って

ドスン、と巨体が崩れる音。
トン、とイージーなバンクショットが決まる音。

単なる、自動ドアだった。

56 体育館から声が消えた。

5 5 鬼頭がコートに尻モチをついている。
みんなが、おおきく口を開けている。
アタシの目は、まんまるになっている。

5 4 「ファールじゃ……………」

5 3 「い、いや、ちゃんとしたパワープレイだ」

屈辱に顔を歪ませた鬼頭が、審判をやってる教師に噛み付くが

5 2 「ファールじゃない」

ノーファールが確認されるだけだった。

そう、宮瀬が鬼頭に勝った。

そう、178センチしかない宮瀬が、194センチの鬼頭に勝った。

「あの」宮瀬が、

「あの」鬼頭に、

パワープレイで、勝った。

2 - 6

今日初めての宮瀬のゴール。

しかも、この学校で一番得点を挙げるのが難しい奴を相手にしての、ゴール。

5 1 「あ、足がすべったんだよ。きつと……………」

5 0 「まぐれよね……………今の……………」

4 9 悠然と守備に戻る宮瀬の背中を見ながら聞こえてくるのは、マジックで化かされたかのような、みんなのざわめき。

4 8 かくいうアタシも、今見た光景が良く理解できない。

人が半減した体育館に、低く不気味なささやき声が交わされる。
誰もが、今の光景が理解できていない。

（宮瀬、あんた、一体？）

4 7 初失点に、そしてそれ以上に宮瀬の変貌に動揺の色が隠せない8組が目つきを変えて、アタシ達のコートに侵入してくる。

4 6 ドスン・ドスンと足音を立てて、鬼頭はローポストへ。

4 5 宮瀬の待ち構える、ゴール下へ陣取る。

？ 宮瀬の？

4 4 「ひ、檜山さん！？なんで!？」

檜山さんが、ゴール下から離れている。

鬼頭にマッチアップしてるのは、宮瀬だけ。

4 3 ボールは鬼頭の待つローポストへ。

すかさず、ドスつという鈍い音。

県内でも五指に入る鬼頭の破城槌のようなパワープレイは、

4 2 だが、

4 1 宮瀬は、岩のようにビクともしない。

4 0 ボールが前橋に戻される。

得体の知れないモノを見る目つきで、鬼頭が宮瀬を見ている。

3 9 前橋はきーちゃんを振り切り、

3 8 ゴール下へ、飛び込んで、

3 7 ボールをリングへとほうり

3 6 前橋の手から離れた瞬間、

バレーボールのアタックのように、宮瀬が弾き返した。

3 5 「ウワ!?!」「オオオヲヲ!?!」

宮瀬のブロックを契機に、体育館に熱狂の火がつき始める。

ルーズボールは、ここまで全くボールに絡んだ事の無い8組女子、
はるちゃんへ。

3 4 「え?えっ?」

試合初のボールタッチに戸惑ったはるちゃんは、

3 3 立ち尽くしきよろきよろして

「よこせ!?!」

無人のゴール下にいる鬼頭に怒鳴られた。

3 2 「ひゃん!?!」

はるちゃん、言われるままに鬼頭へパス。ビクつきながら。

3 1 無人のゴール下で、巨人がボールを掴む。

今度こそ終わった!

誰もがそう思った。

アタシですら、諦めた。

194センチの巨体、

長い腕の先が、

305センチのリングに

これまでの鬱憤を晴らすかのように、

豪快に叩きつけられなかった。

30

鬼頭の

ダンクは

宮瀬に

阻止された。

助走をつけた宮瀬のブロックは、

鬼頭の手に使っていたボールだけを、

正確に叩き落とした。

29 宮瀬が守ったボールは、バックボードに当たって跳ね返り、アタシの元へ、

「え

?あ

?」

はるちゃん同様に、アタシは固まってしまっている。

ボールを手にしたまま、アタシの目も心も宮瀬に全てを奪われて
いる。

柔らかく着地した宮瀬がアタシに向かってダッシュしてきて

28 「アイバー!」

宮瀬が、手でパスを要求する。

塞がってない、もう一つの目が、なんて鋭いことか。

アタシは、宮瀬の勢いにビビりながら、ボールを宮瀬に託す。

27 アタシの真横を信じられない速さで駆け抜ける宮瀬を、アタシは、見送るしか出来ない。

26 「クソ！」

陸上部を差し置いて、校内一の俊足を誇る

25 後田は、これまで尽く速攻を潰してきた。
相手の速攻より早く、守備に戻る足があるから。

でも

24 スピードで

純粋なスピード勝負で

宮瀬が、後田を、

置き去りにした。

後田がどんなに全力をだしても、
追いつくどころか、

宮瀬との距離が、
引き離される

23 そのまま、誰も守るものもないリングへ
教科書のようなレイアップ。

4 - 6

息も切らさず、悠然と戻る宮瀬を、誰もが別世界の人間を見るか
のように、見始めた。

「すげー、宮瀬！すげーよ！！」

「なんだよー！お前………なんなんだよ！すげーよ！」

22 ショックを隠しきれない後田から、前橋にボールが渡される。

21 前橋がセンターサークル付近にきて、

前に上がってきた後田にボールを返そうとして………

20 そのボールを、ハヤブサのように宮瀬が掻っ攫った！

「宮瀬！？」

「また宮瀬だ！！」

期待に、みんなが沸きあがる。

19 8組側コートに両チームの残り選手が急いで移動する。

目まぐるしい攻防の転換についていくだけでも精一杯だ。

ボールを奪われた後田と前橋が、即座に宮瀬に密着マークする。

18 前橋がゴールへの進路を塞ぐ。

後田がボールを奪おうとする。

17 アタシなら2秒と持たずにボールを奪われかねない激しく執拗なマークを、

宮瀬は鼻で笑って、軽くいなす。

身体の幅を最大限に活かした、安定したドリブル。

ボールすらも自分の身体の一部のように完全なコントロール化に置いた宮瀬。

アレは、奪えない。

1 6 宮瀬の左足が、大きく前へ。 つられて、前橋が大きく後ずさる。

宮瀬の上半身は、大きく左へ。 つられて、後田の身体は左に引きずられる。

1 5 7 宮瀬は、右へ。

一瞬で、前橋後田を抜き去る。

宮瀬のカットインで、

男子が、怒号のようになり立て、

女子が、アイドルを見た時のように黄色い悲鳴を上げる。

バックラインスレスレを宮瀬が駆け抜ける。

1 5 ゴール右下で宮瀬が跳躍する。

1 4 7 ゴール真下で待ち構えた鬼頭がブロックに飛び上がる。

1 4 4 宮瀬が空中で姿勢を変える。ボールの持ち手を変える。

1 4 3 鬼頭の横を宮瀬が通り抜ける。
まるで風のように。

鬼頭は、ファールすらできない。

1 4 2 宮瀬は滑空する。

なんて滞空時間の長い、跳躍。

1 4 1 ゴール右下で飛んだ宮瀬が、
バックボードの裏を回り、

ゴール左下で、ボールを手から離れた。回転をかけて。

14 ボードにあたったボールがリングに吸い込まれるのを確認
すらずに、着地した宮瀬はディフェンスに戻り始める。

風格すら漂う、その姿。

アタシは、もう、宮瀬から、目が離せない。

6 - 6

……………六対六？

ロクタイロク！？

「同点！！」

「マジかよ！？」

「宮瀬！！凄すぎるうー！！」

「てめー！！なんだよ！今まで隠してやがったのか！」

8組のトリオはショックを受けているのか、すぐにはボールが入らない。

試合は束の間凍結し、異常事態にギャラリーのボルテージが上がる。

本能のままに、

衝動のままに、

中学のレベルじゃない、

超高校級どころのレベルじゃない、

日本人のレベルを超えた、

宮瀬のプレイを目にして

興奮するなという方が無理な話！！

アタシは立ち尽くしたまま、

自分がプレイしている試合だという事さえ忘れて、

宮瀬を、ただ宮瀬を見ていた。

メガネが無い宮瀬の顔。

メガネの下に隠れていた宮瀬の瞳。

13 「美夏！オール！！」

現実に戻ったのは、きーちゃんの鋭い声。

いつのまにか8組が試合を再開していた。

12 「勝てるよ！！美夏！！」

あの8組に！あの男バスに！！

きーちゃんの言葉で、ようやくアタシの身体と心が勝負用に切り替わる。

折田ときーちゃんは、8組の男バストリオからボールを奪いにかかる！

11 ボール運び役の後田に、折田ときーちゃんが噛み付く。

おお、意外と連携が取れている。

うげ、と嫌そうな顔をした後田が緊急回避として前橋にボールを

10 そんなパス、通ると思うな！！

アタシは全速力で、後田と前橋のパスの間に突貫する。

この！と・ど・け~~~~！！

肩が外れそうなほど伸ばした手の先が、ボールの軌道を変える。

9 5 軌道が変わり、勢いを失ったボールは

宮瀬が、掴んだ。

9 「止める！」

鬼頭が、わめく！

「宮瀬を！止めるー！！」

もう、プライドなんてかなぐり捨てて、宮瀬を止める。

8 「！？ チッ！！」

リングに向かいかけた宮瀬の足が一瞬止まる。

後田、前橋だけじゃなく、なんと鬼頭まで加わり、三人で宮瀬を取り囲む。

7 攻めあぐねて、宮瀬は舌打ちする。

6 ボールを取られないだけでも凄いとしかいいようがない。

5 重心を低く、ボールを床からほとんど離れないくらい超低空でバウンドさせてキープする。

4 （ あ ）

目が合う。

宮瀬が、アイコンタクトをしてくる。

人間の壁の隙間から、

宮瀬がアタシに、目で訴える。

3 宮瀬の手から、

手首のスナップだけで、

三人の囲みの間から、
弾丸のようなパスが、

2 アタシに、届く。

左斜め45度。

絶好の3ポイントラインにポジションを取ったアタシに。
宮瀬からの、ラストパスが。

1 5 アタシの身体は準備万端。

ボールを取った時点で、シュート体勢は出来ている。

アタシとリングを阻むものは何も無い。

1 届け！

アタシの全身全霊を懸けた3ポイントを、う

0 8 「てやあああああああ！！」

「うきやあああああああ！？」

打つ前に、

はるちゃんがブロック、

というよりも、

後ろから

アタシに

思いつき飛びついてきた。

ブーーーーー

と、無常な電子音が流れる中、
体勢を崩されて

めちゃくちゃになったシュートは空を切り、

アタシとはるちゃんは今もみくちゃになってコートに倒れた。

「い、痛たたた……ご、ごめん、みなきち、だいジヨブ？」

アタシの上に乗ったのはるちゃんが、心配そうに聞いてくるが……アタシは安心して応えられない。

教師の笛が鳴ったのは、やや遅れてから。

宮瀬？宮瀬！宮瀬！！

フリースロー。

3ポイントのフリースローだから、3本のフリースローが撃てる。そのうち、一本でも入れば、あたし達の勝ち。全部外れれば、2分間の延長戦、オーバertimeに突入する。

フリースローラインに立つのは、このアタシ。

「よしよし、もう勝ったも同然だね！」

きーちゃんがアタシの背中をバンバン叩いてくる。

アタシのフリースロー成功率は、大体80%。

3本もあれば、1点なんて取って当然だ。

でも、みんなの注目を集めてるのはアタシじゃない。

みんな、宮瀬のさっきまでのプレイに意識を奪われてる。

60秒間、ずっと宮瀬のターンだった。

60秒間、ずっとスーパージョー宮瀬タイムだった。

フリースローを前にして、アタシは意識を集中する。

いつものように、

いつもの練習のように、

いつもの試合のように、

深呼吸をして、

ゴール下にいる宮瀬が視界に入る度に、トクン、と胸が高鳴る。

おかしい。

アタシの、

胸の

ドキドキ、

止まんない。

この60秒間の宮瀬のプレイが脳裏に閃く度に、
鼓動が、呼吸が、おかしくなる。

集中できない。

全然、集中できない。

宮瀬、アンタなんでそんなに上手いの？

宮瀬、アンタなんでそんなに速いの？

宮瀬、あんたなんでそんなに跳べるの？

「宮瀬」と「なんで」と「？」が、頭の中でぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐる。アタシの頭はいいいっぱい。

だから、一本目のフリースローは、リングに届きすらなかった。

「あ、あれ？」

指先が震えてる。

膝に力が入らない。

アタシが、アタシじゃなくなつたみたいだ。

2本目も、外れ。

ボールは全く届く気配すらない。

「おいおい、頼むぜ〜」

折田の顔が焦りだす。

視界が潤む。

せつかく、せつかく宮瀬が同点にしてくれたのに、

(…………最後の最後で、アタシが足を引っ張ってる)

寒気がする。

凍えそうになる。

あんなに熱かった身体から、熱が失われる。

「だ、大丈夫？」

檜山さんが不安げに覗き込んでくる。

でも、アタシは応えられない。

全く心の余裕がなくなってる。

ぼん、とアタシの頭に置かれる手。

「アイバ」

「…………あ」

宮瀬が、いつの間にかアタシの間近にきてた。

「思いつきり、シュートして」

声を掛けて、

笑いかけて、

宮瀬がアタシの横を通り過ぎる。

そのまま、ゴール下を離れて……………

「お、おい宮瀬!？」

リバウンドは、どうすんだ!？」

「檜山さん、俺の代わりに、リバウンド行ってくれる?」

「……………いい、けど」

ゴール下には、折田と、宮瀬の代わりに檜山さんが立つ。

宮瀬は、檜山さんと場所を交換して、アタシの左後ろ、3ポイントラインの向こうに。

(……………信じて、くれてる?)

最後はアタシが決めるって、信用してくれてるんだろうか?

だから、自分のリバウンドはいらない、と?

ほのかに、心が温かくなる。

と、思ったのも束の間

「外してもいいーから、思いっきり打ってくれー」

アタシの後ろから、

宮瀬が、そんなことを大声でのたまいおった。

……………(ビキ)

(外しても、いいーから?)

『外しても、いいーから』?

は・ず・し・て・も……………いいからああ〜〜〜!?

アタシの頭に血が昇る。

「あ、アア、アタシを誰だと思ってんのよ!?
この!バカナオキイ!!」

ダン!と大きくボールをコートにぶつけて、バウンドしたボールを強く掴む。

「タカチュー女バス史上最強のキャプテン!
相羽美夏様に向かって!
そんな素人相手向けコメントなんかすんじゃねー!」

ギン!と鋭い目つきでリングを睨む!!

「見てなよ!こんなフリースローくらい!!」

爪先から膝、腰、背中、腕へと漲らせた力をボールへと伝えて、

「スマートに!決めてやるわよー!!!!!!」

気合と共に、渾身の力を込めたフリースローを放ち…………

(あ、やっちゃった)

心の底の、冷静な自分は、大失敗に気づいた。

今度は力みすぎたせいで、ボールが高く飛びすぎた。

沸点から氷結まで急転直下しかけた身体は…………

背中

アタシの目は

背中に釘付けになった。

フリースローのボールを追いかけるように走りこんだ、

その『背中』に、アタシの視界は奪われて、

リングに蹴られたボール
空中で掴んで、

そのまま、体育館全てを揺るがすかのような衝撃で、

ボールを、リングに叩きつける。

リングに、
手をかけたまま、
空中で、浮いたままの背中に
アタシの目は 奪われて

その背中に、釘付けになつて、

荒々しい、
寧猛な、

野獣のような、

スラムダנקを
フリースローから
リバウンド・ダנקを

叩き込んだ

宮瀬の

背中が

アタシの魂に

刻みこまれる。

無音

静寂

沈默

8
-
6

宮瀬のダンクが

得点に加算される。

その後で

「みややせ」

きーちゃん、折田が狂ったように叫びながら、宮瀬に飛び掛る。

「うおおおおお！……！」

すげー

宮瀬すげー！！！！！！！！！！」

残っていた観衆達も、宮瀬に群がっていく。

体育館の中は狂乱のるつぼ。

割れんばかりの嬌声が、ビリビリと窓ガラスを震わせる。

海の向こうでしか見れないようなスーパープレイを見せ付けれたみんなが、どんどん宮瀬を取り囲んでいく。

「な、なにこの騒ぎ！どうしたのよ！？」

「な、なに興奮してんの、あんだ達……………」

「うわ！なんで8組負けてんの！？」

なんで1組が優勝してんだ！！؟؟」

騒ぎに驚いた運動場組が、体育館のカオスな状況に仰け反りびびる。

「聞いて！聞いてよ！！

私達スゴイの見たの！

宮瀬君が！宮瀬君がね！！」

「お、落ち着けよ、宮瀬がどうしたってんだ？」

体育館組が、運動場組に必死に伝えようとするが、興奮して上手く伝えられない。

アタシは、腰が抜けていた。

ぺたん、とフリースローライン上で、お尻をつき……………安心して

人の波に飲み込まれて、宮瀬の姿は、今は見えない。

でも、アタシの心臓は、ドキドキしっぱなし。

アタシのドキドキ、とまらない。

宮瀬のダンクで、

アタシの心は、奪われた。

「60秒で！」

「たった一分で！」

「0-6から！」

「宮瀬君が！」

「たった一人で！」

「逆転したの！」

へたりこんで動けないアタシの耳は、必死に運動場組に説明する
山口さんのアニメ声を拾ってくる。

「最後は！外れたフリースローをダンクで押し込んで！！」

へたりこんで動けないアタシの目は、興奮しまくった体育館組の
みんなが宮瀬をわっしょいわっしょい胴上げしているのを、みつけ
てくる。

視界の隅には、壁にもたれかかり、蒼褪めて、抜け殻のようにな
った鬼頭。

タカチューの、バスケット・ナンバーワンの座が交代した様が、視界
に映っている。

クラスマッチ全記録。

< 相羽美夏 >

得点	3	0
リバウンド	2	
アシスト	1	2
ブロック	0	
スティール	5	
< 鬼頭大樹 >			
得点	4	2
リバウンド	1	3
アシスト	1	
ブロック	9	
スティール	0	

< 宮瀬直樹 >

得点	8	
リバウンド	1	2
アシスト	4	
ブロック	5	
スティール	4	

うち、ラスト60秒の記録。

得点	8	
ブロック	2	
スティール	2	

『伝説の試合』としてタカチューの記録と記憶に残る一戦。

この60秒で、宮瀬は、目撃者全ての尊敬を勝ち取り、
対戦相手に拭い去れぬ恐怖を与えた。

宮瀬直樹は平穏な日常を送りたい。

返ってくる言葉はいつも同じ

信じられない

返す言葉もまた、いつも同じ

俺も

僕も、

私も、信じられない

相手の否定に同意を示しつつも、続く言葉に理解を求める。

けど、見たんだ。

この目で、

宮瀬の

NBAばりの

スラムダンクを

クラスマッチの後、何度、何十度、何百度、その問いと答えが繰り返されたのか。

放課後までには、”60秒の宮瀬タイム”は学年全てに知れ渡っていた。

様々な目撃証言を交えながら。

<証言1> 山口 春菜 a k a はるちゃん

「もおー、とにかくすごかったのー！」

ガーって、ギューンって、バーンってー！」

誰も宮瀬くんを止められないし、宮瀬くんは止まんないのー！」

「0対6で勝ってたのに、最後のたった60秒で逆転負けしちゃったのよー！」

そもでもって、最後はゴールに直接ガシャーンよー！」

あたしもうびっくりしちゃったのー！分かる！？アタシのこの感動！ー！」

いや、わからん。

<証言2> 前橋 結

「同じ日本人とは思えない動きだった」

「リバウンドに入ろうとした瞬間に、もう宮瀬の身体が俺の前を飛んでて……

信じられるか！？俺の目の高さの所に、アイツの腰が来てたんだぞー！」

「ダンクは鬼頭で見慣れてるつもりだったんだけど………本当のスラムダンクっていうのは、迫力が段違いなんだな」

<証言3> 折田 忠

「別に信じらんちゃ、よかよか」

「あれは、自分の目ん玉で見らんちゃ信じられんもんやけん」

<証言4> 後田 啓介

「俺より速い奴を、初めて見た………」

「全力で走っても、それでも引き離されたのは………あれが生まれて初めてだ」

「ダンク？ああ………度肝を抜かれたよー！」

<証言5> 吉川 みく a k a きーちゃん

「いやー、いいもん見せてもらったよ」

「TVでしかみれないような極上のスラムダンクをさ、おんなじコートに立って、たった数メートルの距離で見れたんだよ!!」

何万も金出して、スーパースコートサイドの席をゲットしても得られないくらいの大興奮だったね!!」

<証言6> 檜山 文子

「推定ですけども、90センチはジャンプしてました」

「リングの高さが305センチ、

宮瀬君の身長が178センチ、

腕を伸ばして、推定230〜240センチ、

リングよりもボール一個近く宮瀬君の手が高かったから、最高到達点が320センチほどと仮定します」

「とても、中学生の……いえ、日本人のバネとは思えないほどのジャンプ力でした」

<証言7> 相羽 美夏

「えっと、あの……その……なんか、すごかった」

<証言8> 猿渡 哲弥（体育教師 試合時、審判）

「俺も長年体育教師やってきたが」

「あんな凄い生徒は見たことない。

いや、日体大（日暮里体育大学）のバスケット部でも、あの身長であんなダンクが出来る奴は……いなかったな」

「ダンク以外でも、あらゆるプレイが、天才的だった」

<証言9> 鬼頭 大樹

「もう、忘れたい」

目撃者、総数55人。

各々、クラスメイトに、部活で先輩に後輩に、下校中に友達に、帰ってから親兄弟にその日の衝撃を伝え……

翌日には、もう学校全体に宮瀬 直樹の名が轟いていた。

宮瀬はクラスマッチの活躍などなかったかのように、それまで通りに、のんびりと、ぼんやりと地味ーに学校生活を送っている。

しかし、宮瀬を見る目は変わった。

しかし、宮瀬を取り巻く環境は変わった。

今まで、宮瀬に興味を持たなかった奴らが、やたらと宮瀬に絡むようになってきた。

宮瀬をアイドル視する奴らの登場である。

当下校時には、先輩後輩問わず、好奇の視線に当てられ、

「ほら！ほらほら見て！！あれよあれ！あれが宮瀬くんよ！！」

「ええ！あの子が！？」

普通にしか見えないんだけど、てゆかイケてなうい

「そこがイイんじゃない！」

ピーピーピー外野のうるさい事。

「宮瀬ー！！頼む！バスケット部に入ってくれー！！」

「お前の力で、俺たちを……全国に連れて行ってくれー！！」

休み時間毎の、前橋と後田によるバスケット部への勧誘はもはや一組の名物となった。

周囲の激変に、宮瀬は、ふう、っと溜息一つ。

「みんな、早く忘れてくれないかなあ……………」

後遺症

「男女バスケット部両キャプテンとも、後遺症を引きずっている」と、いう噂が立っているらしい。

鬼頭はあの一戦以来、完璧に自信を失くしてしまっている。強引なパワープレイが影を潜め、恐竜のようだった鬼頭は、単なるトカゲに成り下がっている。

男バスでの暴君っぷりも、あれ以来影を潜めている。

『NBAは無理だろうけど、日本のプロバスケットくらいでなら、当然プロになれる』

そう言われてすらいいた鬼頭だが、ここ数ヶ月の成績下落ぶりは、高校へのスポーツ推薦すら危うい状態だ。

変わりに、後田と前橋が主導権を握りだした。

「いつ宮瀬がバスケット部にきてもいいように!」

「宮瀬が見ても恥ずかしくなくらいのプレイをするぞお!!」

男バスのスピードは以前とは比べ物にならないほどテンポアップした。

女バスキャプテン……

つまり、アタシも、あの日以来……

あの時から……おかしくなってる。

あんなに楽しかったバスケットが、なんとなく楽しくない。つまんない。

ものたりない……

オマケに、フリースローを打とうとするたびに……

あの時の

宮瀬の背中が

目に浮かんでくる。

アタシのフリースロー成功率は急降下している。

8割あった成功率が……いまでは6割スレスレ。

これじゃあ、接戦の時に競り負ける。

アタシのフリースローのミスで負けることも、少なからず出てきた。

クラスでも、おかしい。

「相羽さん、これなんだけど」

「あーう……うん」

アタシは、宮瀬とまともにしゃべれなくなってしまった。

宮瀬の顔を見ると、ドキドキ止まんない。

宮瀬の声を聞くと、ドキドキ止まんない。

宮瀬が近づくと、ドキドキ止まんない。

前はあんなにバスケの事を、NBAの事を語りあったのに、今は、宮瀬と自然におしゃべりもできない。

「ねーねー宮瀬君、ちょっと教えて欲しいんだけど。」

私達ね、最近NBAを見るようになったんだけど、チームがいっぱいありすぎて分かんなくって……。

だから……、宮瀬君が好きなチームとか教えてくれると嬉しいな
……って」

「ああ、僕は全チーム好きだから」

そして、宮瀬が他の女の子としゃべってるだけで、胸がチクチク痛くなる。

前は、そんなこと無かったのに。

前は、こんなこと無かったのに。

「男女バスケ部両キャプテンとも、後遺症を引きずっている」

ああ、全くその通り。

どうしてこんな気持ちになるのか、どうすればこの後遺症が治るのか、誰か教えて欲しい。切実に。

茶目つ 気と悪戯心（恋心）（前書き）

長らくの連載ストップ失礼しました。

茶目っ氣と悪戯心（恋心）

2月14日。

深夜二時三十分

「眠れない……」

ベッドに飛び乗って布団に潜り込んで三十分。

アタシは夢を見ることができず、ゴロゴロし続けていた。

あの日の宮瀬を思い出して、アタシの心はドキドキ鳴りっぱなし。

このまま何もせずに、何もできずに朝を迎えてしまったら…

……絶対に、後悔する。

悔いを残す。

それなら

どうせ後悔するなら、

やらなかった後悔よりも、

やっちゃった後悔の方が、

アタシはアタシを許す事ができる。

言葉にするのは、恥ずかしい……

せめて

（……形に、しないと）

ナオキへの想いを。

ふらふらとアタシは台所へ。

甘いチヨコの香り残る、台所へ。

溶かす前の、ほんのひと欠片。

仕方ないから手作りは諦めて、コンビニにでも買いにいこうかな。

でも、どんなの買えばいいのかな？

本命チョコ渡して砕けちって、二度と顔合わせできなくなるか。
義理チョコ渡して、他の女と同じように記憶に埋もれるか。

……ダメだ。悪いイメージしか浮かばない。

アタシは財布を取りに行こうとして

テーブルの上に鎮座する

大きな

丸い

せんべいに

ぴこーんと閃くアイディア一つ。

本命とは違う。

義理とも違う。

アタシなりの、

アタシらしい、

バレンタインのやり方を。

「うつふつふつ…」

左手にせんべいを

右手にチョコの残りを

アタシのひねくれた愛情に、イタズラ心をスパイスにして。
ミスっても気まずくならない。

「待つてろよぉ〜みいやあせえ〜」

2月14日深夜3時（…………アタシのなけなしの乙女心）
完成するアタシ人生初のバレンタインチョコ！（？）

（宮瀬！あんたにぶつけてやるから覚悟しとけよ）

クーデター下剋上。

「あんだ、部長剥奪」

「……………は？」

11月末。

あたしは一方的な解雇通知を突きつけられた。

「そしてアタシの部長就任。おめでとう！！アタシ！！」

クビを宣告した副部長が自らに祝福する。

「イエーイ、きーちゃん部長イエーイ！！」

「きやー下克上！げっこくじょう！！」

「謀反よー！！ついに謀反が起こったのよー！！」

女子バスケット部部室では、呆然啞然とするアタシを置いてけぼりにして大騒ぎ。

「ちょ、ちょちょちょ、チョット待つてよ！！」

な、何！？なにになになに！嘘！？本気で！？」

あたしの声、震えてる。動転してる混乱してる。

「ホントに…………アタシを、クビにする……………の？」

消え去りそうなアタシの声に、みんなのテンションも下がって、水を打ったように静まり返る。

沈黙。気まずい、空気。

部長をやめさせられる…アタシの人生設計が崩れる。

中学で頭角表して

名門・強豪高校で名を上げて、

大学入る頃には日本代表に選出されて

実業団に入って

……ゆくゆくは、世界唯一の女子プロバスケ、WNBAに入って
……
そんな、人生設計が崩れる。

重い空気、破ったのは、きーちゃん。

「美夏、アンタが腑抜けたせいで、もう何試合負けたか分かってる
？」

「……………っあ」

言葉が胸に突き刺さる。アタシの呼吸、一瞬止まる。
五試合、負けた。五連敗だった。

今までなら肩慣らし程度のチームにアタシ達は負けまくった。

「確かに、アンタはタカチュー女バス史上最強の選手よ。

アンタがポイントガードやってくれて、

ゲームメイクしてくれて、

アウトサイドのシュートを決めてくれて、

ディフェンスを混乱させて、

チームをアシストしてくれて、

アタシ達は市でも強豪になれた」

「ほんと、美夏がいなきゃ、うちら絶対万年一回戦敗退のままだ
ったよねー」

うんうんと他の部員の子達もうなずく。

「でも、今のアンタは、かんっぺきに部長失格」
きーちゃんの声は、冷たい。

アタシの成績は落ちまくってる。

シュートは外す。

カットインは止められる。

フリースローは落とす。

3ポイントは届かない。

パスはミスる。

アシストは繋がらない。

重い・・・痛い・・・苦しい・・・

「つまんなそうに試合しないでよ。

どうせ戦力にならないなら、

どうせ役に立たないんなら、

最初っからいないほうがマシよ!!」

「ひ・・・どい・・・よ・・・みんなあ

滲む視界。

「わっかんない、アタシだって、分かんないんだよお!!」

裏プロローグ

アタシのドキドキ、止まんない。

(こんなこと、生まれて初めてだもん)

高鳥中学校2年1組、相羽美夏は人生初の試練を迎えていた。

2月14日。

本日まさしくバレンタインデー。

乙女のケジメをつける日に、

廊下の曲がり角に隠れて、

『武器』をこの手に、奴を待つ。

「宮瀬君、お願い、これ…もらってほしいの」

「あ、ありがとうございます。先輩」

「私、すぐ卒業しちゃうから、返事は早くしてね。ホワイトデーまで、待てないから」

「は、はい。先輩」

「おいおいナーオキー、モテモテじゃねーか」

「これでいったい何個めだー」

廊下に立ち尽くす直樹に、下校するクラスメイト達がはやしたてる。嫉妬と羨望の混じった声色で。

少しズレた眼鏡を直しつつ、直樹は素直に問いに答えた。

「ええつと……これで8個目」

「マジかよ！すげーなー!!」

「俺なんて、義理ですら1個ももらってねーのに……………(泣)」
クラスメイト達が驚愕の声を上げる中、アタシはまだかまだかと

待ち構えていた。

世界中から注目される男を。

伝説を越えて、『歴史』を刻み込む男を。

止まらないドキドキ。

「宮瀬くん、私もチョコ作ってきたんだけど」

「もらってくれないかなー？ 私達二人で作った自信作なんだけどー」

更に他クラスの二人の女子が、直樹の下校を待ち伏せしていた。
左右同時にチョコを渡される。

「あ、ありがとう」

多少面食らいながら、直樹がそのチョコを受け取ろうとした……
…その時！

（ええい！これ以上待てるかぁー！！）

「コラーこのエロメガネ！！にやついてんじゃねーぞお！！」

アタシの口は勝手に怒鳴り声を上げていた。
アタシの足は勝手に廊下に動き出していた。

直樹にチョコを渡しにきた女生徒、直樹を取り巻くクラスメイト
だけでなく、驚いた下校途中の生徒達までもが足を止め、アタシに
視線が集中する。

「相羽？」

「あいばさん？」

宮瀬が、アタシに、気付く。

眼鏡越しの瞳が、きょとん、とアタシを見ている。

「チヨコもらったくらいでニヤケてんじゃねーぞ、このスケベメガネ！」

「な、なに怒ってるのさ、相羽さん」

「べ、べえつに怒ってなんかいいねー！！！」

アタシの舌は口は、勝手に言葉をまくし立てる。

しどろもどろになる直樹を、多くの生徒達が様子を見守っている。

数ヶ月前の”伝説”の当事者同士のケンカ？は生徒達のいい見物になっていた。

「お前みたいな甘党メガネには！」

アタシは投球フォームを取る。

大きく振り上げた足。

ひらめくスカート。

パンツ見えるかもしれないけど、そんなこと気にしちゃいけない。

「こいつをくれてやらーーーー！！！」

（くらえこの鈍感ヤロー！アタシの…気持ちを！！）

右手に掴んでいた『武器』をサイドスローで放り投げる！

「な！？」

意味不明の行動に、直樹は呻き、そして目撃する。

空を切って飛び、風に乗って走る、謎の飛行円盤を。

廊下に立ち止まるクラスメイトの頭上を越えて、一クラス分数十メートルの距離を越えて自分目掛けて飛んでくるフライングソーサーに直樹の目は釘付けになり……………

激しい横回転でカーブの掛かったフライングソーサーは、自由を求めて開いた窓から外へと進路を変える。

「あ、外にでるぞ！！」

誰かの言葉で、直樹は反射的に動いた。

フライングソーサーの進路を予測し、最短距離を突っ走る。真横を駆け抜けられた女子が小さく悲鳴を上げる。

だが間に合わない、飛行円盤はその全体を狭い教室から大空へと移して

ドン！という鈍い音。一切減速せず、廊下の壁に腰をぶちあてながら、伸ばした右手は

「おお！？取りやがった！」

「宮瀬！超ファインプレー！！」

窓から体を半ば投げ出して、間一髪でソレを掴んだ。

「イタタタ…………こ、腰いたい……………」

少しだけ涙目になった直樹が腰をさすりながら体を戻す。勢いを殺しきれず転落しそうになったのは秘密だ。

「ほんとに…とっちゃった…」

廊下の端で、美夏が何かを呟いたけれど、間が開きすぎて、そのつぶやきは直樹の耳までは届かない。

直樹は痛めながら手にしたものに視線を落とす。
それは

「……………せんべい？」

顔より大きな巨大せんべい。ひつついた海苔も、これでもか！というくらい大きい。

そっけない透明ビニールのラッピングが、なんとなく座布団を思わせる。

バレンタインデイに、でかいせんべい。

今年から、自分の知らない間にバレンタインのルールが何か変わったのだろうか？

「なんで、せんべい？」

不思議で仕方がない、という表情を顔に張り付かせて直樹はアタシに問いかける。

そしてその質問は、この場にいる何十人というクラスメイト達も

同じ思いであつた。

なんで？

バレンタインにせんべいを？

(いよつし！これで誰も気付きやしない！)

「甘いもんばつか食つてたら飽きるだろーが」

腕を組んで横を向いて踏ん反りかえつて、ツーンとした表情を作る。

「……………まあ、そうだね」

納得できない、という言葉に顔を張り付けて、。

美夏の瞳の強い眼差しを受ける。苛立ちと、それ以外の何か強い感情に瞳を潤ませて。

「急にモテるようになったからって、イ、イイ気になってるんじゃないぞ！」

あつかんベー、と舌をだして、アタシは踵を返す。脱兎のごとく。

きよとん、としたみんなを残して。

「あつ、逃げた」

素直な気持ち

「アタシだって…訳、分かんないんだよぉ!」
力の限り、アタシは叫んだ。

「確かに…今のアタシには、女バスの、部活がつまんない!」

「美夏……」

「…先輩」

「あの試合から…あの宮瀬のプレイから、アタシはドキドキ止まない」

ぎゅっと強く目蓋を閉じて心に焼き付いた光景を言葉にする。

「日本にいる限り絶対にみる事が出来ないと思ってた、アタシの理想的なダンクが…目に焼き付いてる」

感情が止められない。

「ダンクだけじゃない。誰かにパスを出そうとすると、無意識に宮瀬のスピードに合わせちゃってる」

自嘲気味に笑う。

「ははっ、おかしいよね。女子にあんな厳しいパス取れるはずなのしさ」

「…部長」

「今はゴール下につっ込んでいくのも、怖いんだ」

ぼろぼろと言葉を漏らしながら、気持ちが落ち着いてくる。

「194センチの鬼頭を止めたみたいに、宮瀬のすごいブロックで止められるんじゃないかって思っちゃってさ」

有り得ない幻想だと分かりながら、アタシの体は部活中何度も硬直する。

「あの試合から、感覚が全部狂っちゃってるんだ」

思い描くのは、いつもアイツ。

「……………宮瀬。」

アタシの全ての基準が、宮瀬になってる」

オフENSでも、ディフェンスでもちらつく宮瀬の影に怯えてる。逆に、宮瀬のプレイに憧れて、無理なのに無茶なのに、宮瀬のプレイを真似しようとしてしまう。

「フリースローラインに立つと、宮瀬が後ろから飛んでくるんじゃないかって期待してる」

あの日の背中を、再現できるわけないのに。

沈黙は十秒近く。再び口を開く前にアタシの気持ちは決まっていた。

「ごめん、みんな。確かにアタシ、部長失格だよ」

言葉を出しきって、アタシは目蓋を開けた。

「きーちゃんの言う通り辞めた方が部の為に……って？んん？」

目を開けると、みんなの反応が思っていたのと違う。

うふふふふ、という笑いを隠しきれない顔で、みんなが、アタシを見てる。

「美夏、あんた、宮瀬のこと」

部員一同で

『好・き　　す・ぎ』

ハモる。

「そ、そんなんじゃない!!」

ぼん、と体が赤くなる。

「こ、これはその……好きとか嫌いとかそついうんじゃあ!」

「いいや、その通りさ!美夏あんだのその気持ちはLOVE以外の

何者でもないのよ!!」

きーちゃんはがっしとアタシの腕を掴んで力説する。

「ほんとに…恋、なのかな」

タジタジになるアタシに

「恋よ」

「恋ね」

「甘酸っぱい恋愛模様よね」

洗脳するかのようには部員達が恋だと囁し立てる。

「こついつのって、あれよね、あれ」

くすくす笑って一年の何人かが

「急に」

「王子様が」

「来たから」

「びつくりして恋に落ちてしまいました。そんな感じ」

「？」

そんな感じ!」

「お、王子様って宮瀬の事か!? アイツはそんなガラじゃあ…」

「と・に・か・く」

ピシッと目の前にきーちゃんの指が突きつけられる。

「美夏、アンタ宮瀬にアタックするまで部活禁止ね」

「な、なんだよそれ! ぶ、部活とは関係ないだろ!？」

「関係ありだつてば。そんなモヤモヤした気持ちのままじゃあ、戦力にならないしね」

「とにかくアタシ達女バス部一堂としてはさ、アンタに復活してもらわないと困るのよ」

「だ・か・ら、アンタの恋を、アタシ達みんなで応援してあげる」
「……………う、あ……………」

アタシは言葉を失う。

みんなは暖かい微笑みで、アタシを見てる。

「アンタが部活と恋愛を両立できるとは思ってないからさ。今だけ部の方は任せときなつて」

頬が熱くなつて、

恥ずかしくなつて、

嬉しくて、

「お、おせっかいだつてば…みんなあ」

アタシの目頭は熱くなつた。

おのれきーちゃん。アタシを毘に掛ける為に一芝居打ちおつたな。

「で、でもさあ…アタシ達つてばまだ中学生やん。れ、恋愛とか…まだ早いっちゃんいかと…」

「恋に老いも若きもないわー!!」

「ぶりいち!？」

つぱーん!とハリセンで頭を叩かれた。

「いいこと美夏!女つてもんはブラを着けたその日から誰かのLOVEを受ける義務があんのよ!」

「な、何だよその極論」

「いいゝ美夏ゝあれから宮瀬くんが何人に告白されたか知ってんのゝ」

「五人よ、五人!週一ペースで告白されてんの」

「ご、五人!ゴレンジャー!？」

「で、その全員を宮瀬は振つてる」

「うわゝ、もつたいないゝ」

「振られた子にそれとなく理由を聞いてみたらね」

「『ぼくは、バスケット出来る子以外は興味が無い』だつてさゝ」

いやゝ、ほんつと筋金入りのバスケット馬鹿だねえ。恋愛対象にまでバスケットを絡めるなんてさあ!!」

「おおつと、吉川の姐さん!そいつを言ったら此処にも『恋愛対象にまでバスケットを絡める』お馬鹿さんがもう一人いるじゃありませんか」

じと、と生ぬるゝい目と、にやりにやりと笑う顔でみんなの視線がアタシに集まる。

「ど・どうせアタシは筋金入りのバスケット馬鹿よ！」

「まあ、いきなり告るなんて高難度の事は無理だろうから、ちょっとハードルを下げてつと」

きーちゃんはマジシャンのように何かを取り出す。

「ここに魔法のチケットがある！」

「日本プロバスケットボール開幕戦のチケットよ！コイツを使うがいいわ」

「バスケット同士！バスケットで楽しいファーストデートにしてらっしゃい！」

「いいか！誘え！告れ！！ゲットしろ！！まずはその第一歩を始めるのよ！」

みんながニヤニヤしつつ、でも、真剣に、アタシを応援してくれている。

アタシはいい仲間を持った事が嬉しくて、

アタシはおせっかいな仲間を持った事が気恥ずかしくて、

アタシの想いを知られた事がたまらなく恥ずかしくて、

きーちゃんからチケットを受け取って、

「おう！絶対宮瀬を落として帰ってくるからな！！」

覚悟を、決めた。

「いよおーし！その気合いこそ美夏らしいわ！」

威勢よく飛び出すアタシに、みんながぐっとガッツポーズで送り出してくれた。

「み、み、み~~~~、宮瀬——!!」

ドアを思いつきり空けて、HR前の教室に飛び込んだ。

「な、なに!？」

珍しく目をまん丸にした宮瀬が、アタシの襲撃にビビる。
その顔に

ビシィィィ!とチケットを突きつけて、

「こ、今度の土曜日!一緒にバスケ見に行かないか!」
しばらく、口を開けたまま変な顔してた宮瀬は…

「うん。一緒に行こう」

爽やかに、笑ってチケットを受けとった。

初デートの時の待ち合わせってドキドキだよな

デート。

デート。

……………でえと。

……………えへへ。

………！

イカンイカン、しゃっきりしろおアタシ！変に意識するんじゃない！これじゃあ変な人だ！！

寒くなり始めの11月。

アタシは人の集まる体育館で宮瀬を待っている。

きーちゃんのアドバイスで、アタシなりに精一杯のオシャレをして……

日本プロバスケットリーグの一つJBA開幕戦。

福岡ー富山戦の会場『究極電力記念体育館』。

正門前。アタシはここで宮瀬を待つ。

地元福岡のフライングソーサーズ（略してFFS）……………地元チームの野球は鷹、サッカーは蜂なんで、バスケのプロチームも何か飛ぶヤツにしようとチーム名が公募され……………こんなへんてこな名前になった。

（まあ、人気も成績も低空飛行だな！）

リーグ加入から今まで三シーズンずっと最下位突っ走るチームには、ファンが定着せず、客入りも良くないそうで。
(まあ、お陰でタダ券がもらえるんだけどね)

今回対するは、富山ゴールデンナゲッツ。身長の高い選手ばかりを集めた人間山脈だそうだ。
高さに任せたプレイは堅実だが、地味過ぎて華がないらしい。

不人気チーム同士の、はっきりいつて微妙なカード。
それでもまあ、開幕戦なので五割増くらい客は来てる。満員にはほど遠いけどね。

まあ、でも…

……………でえと…かあ……………

てへへ

ああもうダメダメヤバイヤバイ！
嬉しくて、ドキドキする。

でもいつまで待たせる気よ。かれこれ三十分は待ってるんですけど待ち人一向に来る様子がございません。

乙女を寒空に待たせるなんて許せん！来たらまず文句言ってる！それから会場内の馬鹿高いジューズにお菓子をこれでもか、ええいこれでもか！！というほどおごらせてや

「おつまたせ〜！」

「ま、

待ってないよ！」

パッと顔をあげて

「……………なんだ、きーちゃんか」

「なんだとはなんだ？」

落胆するアタシのほおをきーちゃんがぐりぐり。

「まだ美夏だけ？まあまだ十分前だもんね、そんなもんか」

ギヤルっぽい服装のきーちゃんを見て、アタシは何となく恥ずかしくなつて空を見上げた。

風が枯れ葉を旅に連れていく。

秋晴れの穏やかな一日だ。

「ところで美夏……」

きーちゃんが上から下までジロジロと舐めるようにアタシをみて
「…………アタシが貸したミニスカートも履いてきてるし、努力は認めるわよ…………でも」

きーちゃんが大きく大きくおきく溜め息をつく。

「なぐんで下にスパッツなんか履いちゃうのかな？！」

「こ、こんなふりふりひらひらのミニなんて普通に履けるかー！」

見えちゃうよ！大事なものが色々！

「見えそうで見えないとか、見せないように抑えたり恥じらったりするのが

男心をくすぐるのだとなぜわからんかオマエはー！」

「アタシはきーちゃんのオヤジ心の方がわからんわー！」

……………昨日。

宮瀬の嬉しそうな顔は

「うん。一緒に行こう」

続いて、苦笑いになる。

どね」

「ただ、そのチケットもう持ってるけ

「……………ふえ？」

「言ってなかったっけ？僕、FFSのボランティアに入ってるんだよ」

「ぼらんていあ？」

「うん。ボールボーイとか雑用とか」

アタシは頭が真っ白。

「で、チケット貰ってさ。ノルマ、三十枚」

苦笑する宮瀬の手に、どっかで見たチケットが大量に。アタシはひきつり笑いを返すしかなかった。

「今、クラスのみんなに配ってたところ」

つまり、なに？

アタシってば自爆の公開羞恥プレイ？

周りの生暖かい目が、なんかヤダ。

となりの檜山さんは、何事も無かったかのように淡々と本を読んでいる。

折田はにやにやしとる。

きーちゃんは「やってもーたー！ー！」という顔をしている。

みんなと一緒。

別にこんなの、デートでもなんでもないじゃん。
だから

一足早く来て

もし宮瀬も早く来てたら

ほんの短い時間だけでも

ふたりつきりで

デート気分が味わえるかと思ってたのに……

宮瀬は、まだ来ない。

「いいじゃんいいじゃんクラス合同でもなんでもさ。偉大な第一歩じゃんか」

「ぶぎゅ!？」

きーちゃんがガバつとアタシを後ろから抱き締める。

「いいじゃんいいじゃんいいじゃんかー。ちゃーんと試合後に二人つきりにできるようにセッティングしとっちゃんけんさー」

「ふ、ふたりつきり!？」

「ほらほらー今からそんなに固くならんとー緊張しすぎだつてばー」

時間キツチリに

「みんな、こっちこっち」

ぞろぞろと集団で近づいて来る。

2ー1を中心としたタカチュー軍団だ。

「さすが檜山さん。仕事キツチリ」

「はあ、なんで休日までクラス委員の仕事をやらなきゃいけないんだか」

先頭の檜山さんがため息をつく。

……… 檜山さん、大人っぽいなあ。

チェック柄の落ち着いたデザインで、季節に合わせた上品な色使いの服装。背が高い上に出るとこ出てて羨ましい。

「……… もんでみたいわね」

……… きーちゃん……… あんたつてやつは。

最後に

「あ、みんなもう集まってたんだ」

五分遅れで到着した。

「宮瀬降臨!!」

「宮瀬キター」

変なテンションのみんなが宮瀬を取り囲む。

で、きーちゃんが

「おお!? 意外にもスポーティ」

「どう? うちのチームジャージ」

宮瀬はいつものぼんやり顔に似合わない、スポーツジャージを着込んでいた。

「よ、よお…ださメガネ」

「あ、やっぱりダサい?」

あの試合の前のアタシなら

『ぬぁーはっはっはー!! なんじゃそりや似っあわねー!!』
と爆笑しただろうけど、

「ん、うぁ…あー、いや…その、似合ってる、ぞ」

しどろもどろになりながら、宮瀬を誉めた。

「どっちやねん」

ありがと、と軽く礼をいった宮瀬が続いてアタシを見る。

…恥かしくて、なんとなく左手でさりげなくスカートを抑えた。

「相羽さんも、似合ってるよ」

「そ、そそそうか!」

そう言われると、羞恥心を捨てて恥ずかしい服を着た甲斐もある
ってもんで

「うん、でも私服だと小学校の頃を思い出すねえ」

「どうせ成長したらんわー! 悪かったなー!!」

「じえいぺぐ!?!」

あたしの怒りのハイキックに宮瀬は倒れた。

あ、なんかこんなやり取り久しぶりだ。

周りのやつらがあたし達のドツキ漫才を見て笑い声を上げる。
アタシも自然と笑顔になる。

宮瀬も、笑う。

きーちゃんが、やれやれ一安心といった感じで笑顔になる。
檜山さんは、困り眉を作ったため息をついた。

みんなと一緒によかったな。

久しぶりに宮瀬と肩の力を抜いた掛け合いができたような気がする。

なんとなく胸のモヤモヤが取れたような、爽快な気分！！

ウキウキしてアタシはみんなの先陣を切って入場口へ走り出した。

「さあ！行こうぜメガネ！！どんな試合になるか楽しみだよ！」

生まれて初めてのデート……みたいなものを、宮瀬と一緒にバス
ケが見れることが嬉しくて、アタシは跳ねるように駆け出した。

「保障するよ、今日は絶対楽しい試合になるってさ」

宮瀬が追いかけてくる。にこやかに笑いながら。

富山ゴールデンナゲッツ

なんとか、半分。

それが今日の観客数。

五千人まで入れる究極電力記念体育館は…試合直前になってもまだガラガラだった。

「開幕戦でこれじゃあ先が思いやられるわねえ」

きつと明日の試合からは更に半減して平均観客数千人ちよいになるだろう。

はてさて、いつまでチームが存続できるのやら。

「みんな〜こっちこっち」

宮瀬に先導されてアタシ達は観客席へ。

「うわ！最前列じゃない」

「ゴール裏かあ、いい場所じゃん」

かなりいい席に、アタシ達は座る。きつと選手達の迫力ある試合が見れるだろう。

と、そこで見知った顔と出会う。

「ん？」「お？」「あ？」

でつかいのと、ふつうのと、ちっこいの。きーちゃんが

「あ〜！男バス軍団！」

「うお！？なぜお前からここに！？しかも人数多いな！？」

鬼頭が席から立ち上がる。相変わらずでかい。檜山さんが、そそくさと鬼頭から離れた。

「へっへ〜ん！アタシ達は宮瀬からチケットもらったんだよ〜」

「マジかよ！」

「俺ら金払ったのに！」

後田と前橋ががつくりとუნだれる。あはははは御愁傷様。と思ったら

「いや、チームにちゃんと金落としてやらんなー！」

「特にFFSはいつ潰れるか冷や汗もんだから、俺たちが育ててやらんとな！」

な、なかなか深いチーム愛ですこと……

「ああ、将来俺様がプロになるかもしれんチームだからな。ちゃんと残っててもらわんと困るんじゃない」

鬼頭がなんだか偉そうに腕組みをして語る。

「はいはいはいはい、そうですかそらよござんしたね」

ひらひらと手を振って、アタシ達は自分たちの席に座る。ゴール裏の一角を、タカチューが独占する。

アタシは、宮瀬の、隣に座る。

宮瀬との距離が近くて、少しだけ、緊張する。

緊張を見破られ、更に隣に座ったきーちゃんがにやにやと笑う。笑つきーちゃんを睨む。きーちゃんは肩を竦めて、笑った。

試合開始時間が近づいてきて、体育館内の緊張が高まってくる。

「れでいいすえええんどじえんとるめ〜ん！」

お子さまからお爺様お婆様までみなさんよーうこそJ・B・Aへ
「！」

DJマイケル・コールの巻き舌マイクで試合開始秒読み段階に入る。
「」

まずは対戦相手、富山ゴールデンナゲッツの選手しよ〜かい〜」

富山の選手達が入ってきた。

地鳴りのような、地響きのような足音を鳴らして。
その、巨大さに。

「……………でつかー」

「……………同じ人間とは思えん……………」

体育館にどよめきが走る。

「高いはずよ、だって 平均身長207センチですもの」
檜山さんが、解説する。

「207……！？」

平均身長がジャイアント馬場クラスだ。なんと恐ろしい位置エネルギー。

びっくりして、開いた口がふさがらない。

「よく知ってるね、檜山さん」

「……私には、バスケットを見る目が無いから。せめて知識だけはつけておこうと思っただけよ」

宮瀬に褒められて、恥ずかしげに、檜山さんがメガネのツルを調整した。

「……むう。」

「ナンバー14！

シューティングガード！

201センチ！

小嶋く貴文！」

JBA最『高』のサイズを誇る『人間山脈』達。

「ナンバー72！

スモールフォワード！

203センチ！

松山く憲夫！」

レギュラー五人のうち、四人が2メートル越えの巨人達。

「ナンバー55！

パワーフォワード！

208センチ！

大岡く真！」

とにかく、身長の高い選手ばかりを集め『身長第一』をチームの柱としている。

『身長だけ』ならNBAにも負けない。

数少ない日本人の200センチオーバー選手をふんだんに使う贅沢な布陣。

「ナンバー23！」

ポイントガード！」

更に、一番背の低い選手がプレイするポジションであるポイントガードにまで

「196センチ！」

リッキー・デイビス！！」

アメリカ人の長身ポイントガードを配している。

「鬼頭さんよー、あんたでもあん中に入ったら一番小さいっちゃんかか？」

折田が鬼頭に笑い掛けるが、鬼頭は渋い顔して黙ってしまった。

「スピードとテクニックを無視して、パワーと高さだけを武器に、地味ですが堅実に勝利を重ねていく。

それが、富山ゴールデンゲッツのスタイル、ですね」

「御名答」

檜山さんの分析に、宮瀬が教師のように答える。檜山さんは、メガネのツルを直した。

「でもさあ、そんなの……」

アタシは、二人の会話に割り込む。

「高さだけなんて、そんなの面白くないじゃん」

「うん、その通りだねえ」

宮瀬が、アタシに微笑みかける。アタシは何となく恥ずかしくて目を逸らした。

「鬼頭さんよお、存在全否定されとるのお」

「うるさいわ」

折田が鬼頭に絡む。鬼頭、こめかみに血管が浮かぶ。

富山は、去年リーグ四位。もう少しでプレーオフ、という所を逃してしまった。

今年はその雪辱を期して、文字通り“大型”新人の補強を行った。

『超』大型、を。

「ナンバー99！」

その選手が入ってきた途端、会場全体からどよめきが起こる。

「センター！」

2メートル台の選手がうろろろする中に、更に頭一つ飛び抜けた巨人がいた。

「2！ 2！ 9！センチ……！」

二百二十九センチ。

数字が強調される。

どよめきが更に増す。

「ロシアの『動く氷壁』！」

手が長い。 足が長い。 胴が長い。 アゴが長い。 顔が長い。

「グレゴリ・エゴロフ……！」

何もかもが、規格外に長くて、大きい。

まさに、巨人の中の巨人たるに相応しい偉容。

「すっげー、手え伸ばしただけでリングにつくぜ」

「でっけー……」

「20センチもジャンプすればダンクできるんじゃない？」

「アタシ達とは違いーえぬえーが違っただろうな」

「あんなのにかてっこねー」

その姿を見ただけで、悲鳴が上がる。

平均身長207。

最高身長229。

『人間山脈』という二つ名は伊達じゃない、

身長だけならアメリカにも負けないチーム、

富山ゴールデンナゲッツ。

(プロ……か……)

アタシはぼんやりと宮瀬の横顔をみる。

(宮瀬も、プロになんのかな)

遠い将来…中学を卒業して、高校を卒業して、大学を卒業して…
十年くらい先に、コイツはプロバスケの世界にいるのかな。

鬼頭の身長は、まだ伸び続けてる、らしい。

宮瀬の身長は、もう止まり始めている………らしい。

バスケでもっとも大切な要素、身長が、宮瀬は、もう、ほとんど、伸びない。

FFSのチームジャージに身を包んだ宮瀬。
その横顔を見つめて、心の中で問いかける。

(宮瀬、アンタさ、どこを目指してんの？)

福岡フライングソーサース

「続いてえ、我らがあ、福岡フライング・ソーサースのお！選手う！紹介！！」

「ナンバー9！

シューティンガード！

186センチ！

一昨年のスリーポイントコンテスト・チャンピオン！」

甘いマスクに、冷静な瞳をした選手の登場に、

「南部！亮介え！！」

女性客から

「きゃあああああ！！亮様アアア！！」

黄色い歓声が飛ぶ。うざったそうに、適当に南部が手をひらひらさせた。

「吉川さん」

「ん？」

宮瀬がきーちゃんに呼び掛ける。

「シューターなら、南部さんのプレイは参考になるよ。

特にマークの外し方なんかはよく見ておいた方がいい」

「そっか。宮瀬がそういうんなら穴が空くほどガン見させてもらっさ！」

俄然身を乗り出すきーちゃん。

話しが耳に届いたのだろう。男バスの前橋も、同じ様に食い入るように南部に注目する。

「ナンバー25！

センター！

211センチ！

クラレンス・フランシス！」

おどけるようににこやかに現れた黒人センター。

試合前の緊張感なんぞ何処吹く風で、ヘンテコなダンスを踊りながら登場した。

南部が、うざそうにクラレンスを見る。

「鬼頭君」

「……………あ？」

宮瀬の呼び掛けに、鬼頭は剣呑に答える。

「本気でプロを目指すつもりなら、クラレンスのスクリーンプレイは見逃さない方がいい。」

クラレンスは、周りを活かすのが本当に上手いから」

「……………なんで、貴様ごときにそんなことを言われなきゃならんだ」

怒気を隠そうともしない声音に、男バス残り2人の顔色が変わる。

「いつぺん勝ったぐらいで、調子のつてんじゃねえぞ」

鬼頭と宮瀬の間に、一触即発の火花が散る。

「ナンバー21！」

スモールフォワード！

198センチ！

去年のスラムダンクコンテスト・チャンピオン！！

ドウドウ・ンジャメー！」

息を飲むアタシ達を置いて、会場から一際高い拍手が起こる。

単身アフリカから来日留学し、高校・大学時代から日本バスケ界を荒らし回った、驚異の身体能力を持つスラムダンカー！。

今、FFSが客を呼べる数少ない目玉の一つだ。

突然、

「あー、相羽さん」

宮瀬が、

「ちよっと、このメガネさ」

メガネを外して

「預かってて、くれないかな？」

アタシに手渡す。

「いい、けど……」

あの日以来、あの『伝説』の試合以来、初めて見る、宮瀬の素顔。

ぼんやりのんびりした印象が一変して、彫りの深い顔立ちに見とれて、思わずメガネを受け取ってしまう。

「ナンバー48！

パワーフォワード！

206センチ！

内柴！武志！」

睨みつける鬼頭に、宮瀬も目付きを険しくする。

火花散る二人、試合前に場外で乱闘が始まりそんな剣呑な雰囲気。クラスのみなどと、男バス組が息を飲む。

「ア、アタシは誰のプレイを参考にすればいいのかなあ！？」

衝突を回避する為に話題を転換する。

「教えてよ、宮瀬……」

上目遣いですがアタシに宮瀬は鋭い眼光を緩めて、（鬼頭はますます険しい顔になっていたが）

「そうだね、相羽さんは………」
笑った。

そして、

アタシにだけ

聞こえるように、

小声で、

言った。

「えっ？それ、どういう……？」

意味？と問いかける前に、

……と、

……ふっ

館内から一切の光

が消えた。

「やだ、停電？」

闇に陥った体育館にざわざわ、ざわざわと動揺が走る。

目の前に何があるかも、分からない。

目の前にいたはずの宮瀬の顔すら、確認できない。

「え……試合開始直前でっすっがっ！！こおこで、みなさんに、お知らせ、あります！」

マイケル・コールのマイクは会場に響く。

「我らがフライングソーサースは、本日一人の選手と特別契約を結びました！」

「なんだ、事故でも停電でもなく演出か。驚かせやがって、もう！きーちゃんが笑うが、アタシは反応できない。」

「会場の皆様方に！本日は『歴史』が誕生する瞬間を！目撃してください！」

真暗闇の中で、『特別契約選手』の紹介が始まる。
影も形も謎のまま。

「ナンバー214！」

三桁のナンバーに、ざわっと声上がる。

「ポイントガード！」

フライングソーサーズ、スタメンの最期のポジションが告げられる。

アタシと、同じポジションが。

「JBA最年少プロ契約！」

最年少という言葉に、会場のざわつきが増す。

「14歳！」

14歳という若すぎる数字に、更に会場のざわつきが大きくなる。

「178センチ！」

一般人と変わらな

い身長に、更に更に会場の声は大きくなる。

七色のスポットライトが、照らしだす。

コート中央。

数秒前まで着ていたジャージは脱ぎ捨てて、

福岡フライングソーサーズの四人の前に

巨人達の遊び場の小人

ざわつく会場の中、コートに立つ十人のプレイヤー。

二メートルを超える巨人達の遊び場に、一際小さく見える宮瀬。まるで、小人のように。

たった数メートル先に、宮瀬がいる。

……プロの選手として！！

「これ……夢じゃないよね……？」

「は、はは、これ、ドッキリかなんかか……？プロだってえ……うそだろ？」

アタシ達は、絶句している。

目の前でおこっていることが理解できない。

常識が邪魔をして、理解が追い付かない。

あの試合を共にして、宮瀬の活躍を、宮瀬のプレイを、宮瀬のスピードを、宮瀬の身体能力を、宮瀬の、 Dank を、見たアタシ達ですらこうなのだ、ましてや知らない人にとっては

「中坊がデビューだってえ？おいおい冗談にもほどがあるぜ」

「どうせ客寄せパンダだろ」

「宮瀬………なおき？聞いたことあるか？」

「いや、しらね」

「十四歳！？いくらなんでもこともすぎよ」

会場内、観客の間には

「人気取りにしたって、もっとやり方つてもんがあんじゃねーか？」

「おいおい、バスケなめてんじゃねーぞ福岡さんよ！」

前代未聞の事件に、期待よりも先に疑問のほうが立つ。

TGN…富山ゴールデンナゲッツの選手達は、宮瀬を小馬鹿にす

るようにニヤニヤと笑う。

TGN監督・平石修は頭の上で指をくるくる回し『本気か?』とアピールし、FFS…福岡フライングソーサース監督・スールシャルは満面の笑みで『本気だ』とアピールを返した。

平石は肩を竦める。

非難と懷疑と不審の声が重なる中、宮瀬は、

不敵に、笑っていた。

それを見たアタシの背筋が、ぞくぞくするほどに。アタシは手にした宮瀬のメガネを胸元に押さえる。不安と、期待で、いっぱいになった胸に。

ざわつきが収まらないまま、試合開始の笛が鳴る。

ジャンプボール。

中央で審判の手から放られたボールは

「うっぺい!」

ををつ、と重低音のどよめきが起こる。

ほとんどジャンプすらせずにエゴロフが叩いて富山側のボールになった。

試合が開始しても宮瀬はコートの中。

スタメンとして、巨人達の遊び場に入り込む。

ボールを持ったTGNポイントガード、デイビスはドリブルでボールを運ぶ、アタシ達の逆側のコートへ。

宮瀬は、デイビスのディフェンスにつく。遠ざかる宮瀬。

鬼頭よりも大きなデイビスの背中に隠れて、宮瀬がほとんど見えない。

デイビスが、ハリウッド映画に出てくるギャングのようになんか叫んだ。意味は分からないけど、とりあえず汚い言葉だろうなあ、

とだけは推測できる。

「こどものくるところじゃない…ですって」
鈴を転がすような声にアタシは振り向く。

「同時通訳ありがとう、檜山さん」

「え、英語聞き取れるの!？」

「さすがタカチューNo.2の成績優秀者!」

「すげー、こつちもすげー!？」

みんなの反響は予想外だったようで、檜山さんの顔がリンゴのよ
うに赤くなる。

富山の選手たちがゆつくりとそれぞれのポジションに移動し、攻
撃を組立て……………

「スリー!」

る、前に、宮瀬のディフェンスなんて無きが如く、頭越しにシュー
トを放つ。

シュパッと小気味よく音を立てて、ボールはネットをすり抜けた。

0 3

「小さすぎて視界に入らなかった…ですって」

「あいつムカつく」

「でも、あの身長差はキツイよ……………」

高さ。

富山が、自分たちの強み、高さを見せつける。

宮瀬が178。デビビスは196。

身長差は18センチ。

鬼頭よりデカイ選手が、後田並のスピードで走るのだ。

高さは、絶対。

身長差は、あらゆる面で不利になる。

いくら宮瀬がダंकができるほどのジャンプ力があっても、それ
だけでは、プロになんて……………

「通用するはず、ねーだろ！」

『身長だけならプロ並み』の鬼頭が、声を荒げた。

「この俺でさえ、高校生の兄貴達とバスケすると苦戦するんだ！プロとやって……俺達中坊に何ができるってんだよ！？」

小さかったら高く翔べ

「さあ、我らがFFSの今シーズン初攻撃」

マイケルコールのアナウンスに続いて、FFSのオフENS・テ
ーマ曲が響く中 宮瀬が、アタシ達に近づいてくる。

宮瀬が、ボールを運ぶ。

「さあ、大注目のニューカマー、宮瀬君。

どんなプレイを見せてくれるのか、期待しましょう」

デビスは長い手足を横幅いっぱいに伸ばして宮瀬にマッチアッ
プする。

それはまるでグローブのようで、宮瀬の姿は相変わらずほとんど
見えやしない。

アタシ達と宮瀬の距離はたったの十数メートル。

その間を阻むのは、平均207センチの人間山脈。

「アウトサイドに徹するか、ポイントガードとしてチームのアシ
ストに徹すれば……まだ、あるいはなんとかなるかもしれないけど」

アタシは、『自分が宮瀬の立場なら』と仮定してプレイを考える。
「中央突破みたいな自殺行為さえしなければ……」

中央は、ダメ。絶対無理。

もし、デビスをかわしたとしても、その先は200超えの巨人
達の壁に止められる。

宮瀬と小嶋の身長差は、23センチ

宮瀬と松山の身長差は、25センチ

宮瀬と大岡の身長差は、30センチ

あまつさえ、宮瀬とエゴロフにいたっては51センチもの差があ
るのだ！

ゴール下に切り込めば、潰されるのは必然。

と、なると宮瀬の活路は外からのパス・シュートしかない。

でも、そのままシュートしても、目の前のデビスの高さにプロ

ツクされるだけ。マークを上手く外さない限り、シュートは打てない。

宮瀬はボールをキープして、パスの出してを探す。

あの試合の時のような、厳しい目で。

TGNはハイポスト・ローポストにそれぞれ二人ずつ四角形に配置したゾーンディフェンス。

外からのシュートは多少決められても構わないから、ゴール下に入り込まれることだけは断固阻止する構え。

内柴・クラレンスがゴール下にポジションを取ろうとし、ドウドゥが斬り込むタイミングを測る。

ゴール下は、大混戦状態。

宮瀬はパスのタイミングを掴めず、ドリブル突破もできず、もちろんシュートも打てない。

「ほれ見る！何もできやしねえ」

鬼頭は宮瀬を笑う。鬼頭以外にも一部観客から、ボールをキープする以外、何も出来ない宮瀬を野次る声が聞こえてくる。

デビスの守備は堅く、宮瀬の行く手を遮る。

「あんなのを前にして、まともなプレイなんか…」

鬼頭のそんな言葉が終わる前に、

突如、FFSの攻撃陣四人が一斉にペイントエリアから離れた。

（オールアウト！？）

吊られて、TGNのゾーンディフェンスが、僅かに広がる。

その、瞬間、

グローブは

切り裂かれた。

バウンドしたボールがデビスの股下を

宮瀬の身体はデビスの左側を通

り抜けた。

デビスは、脚をもつらせ倒れる。

「振り切った!？」

「オオオオオ!？」

観客が総立ちになる。

宮瀬は、突っ込んでくる。アタシの方に!! もとい、リングへと!
「中央突破!？」

自殺行為としか思えない無謀なプレイに背筋が凍る。

でも、宮瀬のスピードに、本来のディフェンスゾーンから離れていたハイポストの二人、小嶋と松岡のチェックは間に合わない。

宮瀬はボールを掴み、一步。

二歩目でペイントゾーン深くに切り込んだ宮瀬はパスを内柴に:
察して大岡がパスカットに動きゴール下から離れる。パスは、出ない。フェイク!

宮瀬、大岡も振り切る!!

ここで、宮瀬が跳んだ!

リングへ、315センチのリングへと。

でも、エゴロフの背中がアタシの視界を全て隠す。

透明なバグボードの向こうに、リングより上まで伸びたエゴロフの手が見える。

229センチのブロック。それは全てを跳ね返す『最高』の盾。

宮瀬の小さな身体は全て見えなくなっ……

異常な興奮状態のせいだろうか

この時、世界の全てが

まるでコマ送りのようにゆっくり

と

全て、スロー再生のように

アタシには見えた。

くらいだろうか？

エゴロフのジャンプは30センチ

たのかもしれない。

もしかしたら全力で跳んでなかったのかもしれない。

日本人相手なら、

キ相手ならそれで十分だと。

しかも、たった178センチのガ

が30

229センチの身長に、ジャンプ

合わせて260センチ。

小学校の低いリングと同じ高さに、

エゴロフの頭がある。

でも、

更に、

その、上を

長い髪を振り乱し、

宮瀬の顔が………！！

ドクン

心臓が、破裂しそうになる。

宮瀬の左手、

ボールを掴んだ左手

エゴロフの二本の腕を躲して

リングの左に叩きつける！

がなりたてる金属音

「きゃあああ！？」

「うわあああ！？」

まず上がったのは悲鳴。

アタシ達の方に落っこちてきたものから逃げながら悲鳴が上がる。

床に倒れる音。

あたしの足元に転がる巨体。

空中戦で、

178の宮瀬が

229のエゴロフを

荒々しいスラムダンクで、
ぶっ飛ばした。

無音

静寂

沈黙

> 2 - 3 <

宮瀬のダンクが得点に加算される。

リングを掴んだままエゴロフを見下ろしていた宮瀬が、コートに着地する。

その視線が、アタシと合わさる。

「どっかな相羽さん」

ながら

爽やかに、少し照れ

は」

「…………俺の、スラムダンク

会場が、爆発する。

興奮に、

我を忘れて、

1st quarter (前書き)

試合の整合性を考えて一部改変しました。

1st quarter

宮瀬がスーパープレイで作った勢いをそのままに、FFSがTG
Nを圧倒する。

速い。

速い早いはやい。

選手も、ボールも勢いが止まらない。

身長で負けるFFSは、豊富な運動量と勢いで対抗する。そして
TG Nご自慢の人間山脈は早いテンポについていけない。

テンポを下げようとするデビス。

テンポを上げ続ける宮瀬。

宮瀬はPGとして年が十年も二十年も上の選手を統率し、フロア
リーダーとしての立派な風格を見せつける。とても今日がプロデビ
ュー初日とは思えないくらいに。

4分

再び宮瀬が、デビスのディフェンスを破る。

「おおー!!」

アタシ達の方に斬り込む宮瀬の百のスピードが

「急ブレーキ!?!」

フリースローラインでゼロになる。

今度はコケずについてきたデビスは急に止まらない。

宮瀬のダンクを恐れてゴール下に留まったエゴロフ達と、宮瀬の
間にばかりと穴が空く。

宮瀬は余裕を持って、綺麗な綺麗なフォームでジャンプシュート
を決めた。

「すげえ…なんでトップスピードを一瞬で止められるんだ？」
「足と腰に負担かかり過ぎですね、今のは……怪我、しないといいけど」

感嘆する前橋に、檜山さんが眉をひそめた。

TGNが攻撃を再会する。

会場にFFSディフェンスのテーマ曲が流れ、リズムに合わせて観客が「ディーフェンス ディーフェンス」と声をあげる。

宮瀬は、腕捲りをしてディビスの行く手を妨害する。

……ただディフェンスをするんじゃない。

『このディフェンスで、叩きのめしてやる』

そんな気合いを込めて、待ち構える。

コートの反対側からでも、鷲のような鋭い目が射抜く。

宮瀬はディビスを破る。でも、ディビスは、宮瀬を破れない。しつかりとマークについた宮瀬は、ディビスを抜かせない。

毎秒ボールキープに手こずるディビスのプレイは逃げ腰になり、その弱気はTGN全体の流れを悪くする。

FFSディフェンスを崩せないまま、『撃たされる』シュートが多くなるTGNのゴール成功率は五割を切って四割スレスレ。

「……………それって、低いんか？」

疑問を口にした折田に、きーちゃんとアタシが答える。

「アンタの好きな野球に例えるなら、チーム打率が二割チヨイしかないって感じがしらね」

「その上、ホームランも無いような感じがな」

「なるほど、そりゃヤバイ。つまりはオフェンス壊滅ってことか」
「クラスの男子も納得したよう頷いた。野球が分からない女子はそれでも「？」という表情をしてるけど。」

対して、宮瀬にいいようにディフェンスを斬り刻まれ、ワイドオープン（周りにディフェンダーがいない）で楽々とミドルシュート、3Pを決められる南部、飛び込みさえすれば絶妙のタイミングでア

シストパスを宮瀬から配給されるドウドウはストレスなく得点を量産していく。

「これが…ほんとにFFSなのかよ」

「去年まで、あんなにちぐはぐなオフェンスで自滅を続けていたのと同じチームとは思えなねえ……………」

今までのFFSを見てきた男バスの二人が、棒立ちで宮瀬を見る。

試合開始前には罵声を上げていた観客も今ではすっかりそのプレイに魅了されていた。

「ああ…宮瀬君。かつこいい……………」

ついでに、クラスの女子の目のほとんどがハート型になっていた。(……………まずったかな?)

ライバルを増やしてしまったようで、アタシはちよつと焦る。

宮瀬にボールが渡るだけで、会場の温度が白熱する。

9分 宮瀬が、魅せた。

攻めあぐねたエゴロフから右のウィングにいる小嶋へのリターンパスを

「読んだ!？」

一秒前までハイポスト付近でデИБイスに密着マークしていた宮瀬が奪った。

攻守が切り替わる。

真っ先に反応したドウドウが一目散にリングを目指す。

次に反応したのはデИБイスと松山。スピードでドウドウに追いつけない二人は、ドウドウへのパスをシャットアウトする。

……………それでも、宮瀬はスルーパスを通した。

コートの端から端へのロングパスは
ディフェンス二人の間の所、ギリギリ手と足が届かない空間で床

にバウンドし、

トップスピードで走るドウドウの手元には、ちょうどいい高さに浮き上がるパスを。

そして最高のパスを受けたとフリーのドウドウが、ボードが破壊されそうなほど豪快なスラムダンクをぶちかました。

会場に歓声が響き渡る。

17111

その直後、

「あ、あれ……？なんで？」

宮瀬はベンチに座り、代わりにベテランPG……今までのレギュラー、田宮がコートに入場する。

どよどよと館内に不満の重低音が響く。

もっと見たい、もっと見せろ、と………宮瀬を、宮瀬のプレイを。だけど、そんな観客の需要を無視して、宮瀬抜きでプレイは再開した。

「え？え？あれ？？宮瀬君の出番もう終わり？？」

「えー…宮瀬君のすごいところもっとみたいよー」

クラスの女子達からも非難の声があがる。

はあ、とアタシはため息をついた。

「バスケット、交代が何度でも自由なのよ。サッカーとか野球みたいに交代したらもう試合に戻れないのとは違ってね」

「そーなのかー」

「そーなのよ」

基本的なルールが通じないってところで、つくづくバスケットってマイナーなんだなっと思う。

「まだ、フルに出場できる体じゃないんでしょう、きつと」

檜山さんが、メガネのツルに手をかける。

「七・八分過ぎた辺りから急激に運動量が落ちていましたし……ミスが増えていましたから」

「……よく見てるね、檜山さん」

今度は、バスケ素人とは思えない檜山さんの答えに舌をまく。

確かに、低身長のハンディを運動量とスピード、ジャンプ力で克服する……その分、体力は猛烈に消耗する。アタシ自身が女バスの試合でそうだから、よくわかる。

巨人達の4分の1くらいの体積しかない小さな宮瀬の身体……その分、ガス欠が早いということだろう。

「宮瀬は上手い、ジャンプ力もすごい……でも一番の不安は……」

「スタミナ不足、か」

前橋が腕を組んだ。

そもそもアタシ達中学生は1クォーター8分、1試合32分が公式の試合時間だ。

1クォーター10分、1試合40分になるのは高校からなのに、宮瀬の戦うJBAは1クォーター12分、1試合48分と、なんと試合時間が1・5倍も長い。

その長丁場を戦い切る体力が……

「まだ、宮瀬にはないってことか……」

「なんか逆に安心したぞ。多少欠点がないと宮瀬を同じ歳、同じ日本人とみれなくなっちゃうからの」

ぼやきながら、折田が苦笑する。

「今のとこ目立った欠点がそこしかないってのがすごすぎるけどな……」

宮瀬がいなくなつてやりやすくなったデビスが、田宮を押し込んで堅実なミドルシュートを決めた。

田宮はデイスとの身長差に苦しみながらも、三分間を走り回り、必死になってデイスを止めて点差を縮めることなくこのクォーターを乗り切った。

24 - 17

点差は7。

大差じゃないけど、そう簡単には逆転されないリード。
その立役者が……宮瀬。

2nd quarter (前書き)

試合の臨場感を高める為に改編しております。

2nd quarter

2nd quarter開始で、宮瀬がコートに戻ってきた。
黄色い歓声が響く。

2Q早々、デビスが今日二本目の3Pを決めて、追い上げムードを作る。

「やっぱり高さでこられるとツライわね」

24 20

その六秒後、ボールを運んだ宮瀬、味方がオフェンスを組み立てる前に……

「やり返した!？」

突然の、3ポイント。

高い放物線を描いたシュートは綺麗にリングを通過して、宮瀬の八点目が加算される。

27 20

「スリーまで撃てるのか!？」

「完璧じゃないか……!」

前橋と後田が二人して天を仰ぐ。

追い付こうとした矢先の3P。

「これほど嫌なものはないわよねー」

「美夏が大好きなプレーよね。追い付いてきた相手を突き放すの」

「……………なんだよー人聞きの悪いこと言うなよー好感度下がるだろー」

茶化されるが、結構勇気があるプレイなのだ。

決まれば、突き放せる。決まれば、相手の追い上げムードに水をさせる。

でも、外したら相手の追い上げが更に加速する…一か八かの賭け。気楽に打てるもんじゃない。でも、何の気負いも無しに宮瀬は撃った。

その気の強さが、恐ろしい。

「プロを相手に、真っ向勝負…か」

デイビスのボール運びを妨害する宮瀬が、あまりにも普段の宮瀬と違いすぎて、怖くなる。

2nd quarterに入って、TGNは宮瀬への対策を打ってきた。

デイビスがリングに背中を向け、宮瀬にぶつかる。

「うわ、ゴリ押し」

「えげつねえ……」

デイビスが、パワープレイで宮瀬を押し込み始めた。

PGに似合わない巨体を活かしてしっかりとポジションを取り、そこからプレイの起点になる。

1Qには通らなかつたデイビスのパスがTGNに周り始め、2Q中盤はTGNの時間になる。

「あー！また入った！！」

デイビスからエゴロフへ、米露ホットラインが繋がりに二点差に追い上げられる。

38136

TGNがじわじわと追い上げてくる。

ボールが入る前の一瞬だけ息を抜く瞬間、宮瀬が汗を拭った。

ものすごい汗。きつと、とてつもなく消耗してるのだろう。デイビスのパワープレイを止めるのは大変だろう。

（がんばれ……！がんばれナオキ……！）

メガネを手に、アタシは祈る。

………突き放すか、追い付かれるか。

ボールを持つ宮瀬を究極電力体育館の全員が固唾を飲んで見守る。

TGN監督平石は立ち上がり選手達に指示を出す。

FFS監督スールシャルはコートに片膝をつき、ただ無言で宮瀬に目配せした。

宮瀬 ゴール下の内柴にパス。

内柴から逆ウイングのドウドウにパス。

ドウドウ、ドリブル突破 でも、ゴール下をエゴロフに固められてボールをフォローに来た宮瀬にリターン。

宮瀬、逆ウイングの南部に即パス。（直後、走り出す）

南部、シュート 小嶋がブロックに飛ぶ 南部、実はシュートはフェイク、小嶋をかわして走り込んだ宮瀬にパス。

宮瀬が跳び、エゴロフのブロックをかわしてのレイアップ…は「フアーックー!!」

追隨したデビスに後ろから叩き落とされた。

バシーーン!!という嫌な音が響く。着地につんのめった宮瀬がアタシの目の前で膝をつく。手を伸ばせば、届く距離に。

「だ!?!だいじょうぶ!」

アタシの声に宮瀬が顔を上げる。その顔には悔しさが溢れている。「やり返して、くる!」

宮瀬はすぐに走り去った。でも、返事が返事が帰ってきたのは嬉しかった。ああ、あれは本当に、ちゃんと『宮瀬』なんだって思えて。当然のことかもしれないけど。

宮瀬がブロックされたボールはTGN松山が確保。

速攻に移ろうとしたが南部が松山をディフェンス、内柴がパスコ

ースを塞ぐ。

その間にドウドウ、クラレンスが防衛体制を整え、速攻を断念した。

デИБスがパワープレイで押し込み、攻撃の隙を窺う。

「また、あのデカイのでくるかな……」

エゴロフはここまで12点。

高いだけでなく、得意技のフックシュートが曲者だった。

ディフェンスがいるいない関係なしに決めてくる。

そして、エゴロフを止めるのに人数を割いた所にディビスが的確にパスを入れてくる。

ゴリゴリと押し込んでくるディビスを、宮瀬は18センチも小さな体で受け止め続ける。

（やり返してくる、か……）

悔しげに吐き捨てたシーンを思い出す。そう言えるアンタは、すごいよ。

ディビスからエゴロフにボールが渡る。エゴロフのディフェンスにクラレンスだけでなく内柴がカバーに着く。

でも……

「やられたアー！？」

エゴロフから、内柴が離れてノーマークの松山に渡る。

ゴール下、外しような無い松山の同点弾は……

後ろから、

バレーの、

アタック、

見たいに、

飛んできた、

宮瀬が、

弾き、飛ばした。

「うつそだろー!？」

悲鳴の様な歓声の轟音が鳴り響くなか、ボールを取った内柴から走り込む南部に、南部からドウドウに、追いつがるデビスをコケにするようにドウドウからまた南部に。そして南部がイージーレイアップで悠々と決めた。

40136

TGNがタイムアウトを取る。
同点を掴み損ねたTGNが項垂れて戻る。
FFSは全員で宮瀬をもみくちゃにしながらはしゃぎまわっている。

完璧に明と暗に分かれていた。

「やり返し……」

「……やがった」

男バスの二人が呆然としている。
ブロック。

宮瀬が、松山をブロック。

31センチの身長差をもともせず、TGNの日本人で最高身長
の松山をブロック。

「すっごい……. どんだけ跳んでんのよ、アイツ」

「100センチは……. 超えてるでしょうね……. 信じ、られ、ないけど」

口あんぐり状態のきーちゃんに、なんとか冷静さを保とうとしている檜山さんが分析する。

「俺、ジャンプ力51しかないぞ……. 宮瀬の半分しかとべないんかい!？」

前橋が何か落ち込んでいる。ほっとこつ。

前橋のジャンプ力が劣ってるんじゃない…宮瀬が凄すぎて、比較にならないだけだ。

この後、勢いはFFSに戻る。

宮瀬自身はフリースローでの一点をプラスしたただだが（一本外した）宮瀬がディフェンスを切り崩した穴を、ドウドウとクラレンスが容赦なく攻め立てて、一気に突き放した。

2nd quarter終了

51143

宮瀬の前半の成績

得点9

アシスト4

ブロック1

スティール2

ダンク一回

休み時間

試合は休憩時間に入ったけど、究極電力体育館の興奮は全く冷めやしない。

「天才だ…天才だよ、あのガキ」

宮瀬！

「俺、バスケ始めたの中二からだぞ……なのに中二でプロ入りって……. どんだけすげーんだよ!？」

宮瀬！

「あの身長で、たった178センチで、二メートルの選手に負けな
いって……. あの子、一体何なの?!」

宮瀬！

客席のどこかしこも、謎の新入団選手の事を話している。もち
ろん、アタシ達も…

「ダンクはともかくとして……」

折田がバスケ経験者に聞いてくる。

「宮瀬の前半の成績って、すごいんか？」

「すごいよ!」

失礼な質問に即答してやる。

「平均二十点とったらチームのエースよ。んで、もう9得点」

「JBAだと平均六アシストすればアシスト王になれるわね。で、
もうアシストが4つ」

「ブロックって、ほとんどの場合センターくらいにしかできないん
だよ。身長が重要だから。なのに、ポイントガードなのにブロック
1。それも30センチはデカイ奴を相手にしてだぞ!？」

「ステイールも一試合一回あればすごいのに、もう2だよ。」

アタシに続いてきーちゃん前橋後田とバスケ部員から返ってくる

答えに折田はタジタジになる。

「あゝ、結論すれば、宮瀬はすごいって事でOK?」

「わかればよろしい」

「乱暴に野球に例えさせてもらうがの……

とりあえず得点は、打点。

シュート成功率は、打率。

ダנקは…ホームラン、か?

アシストは、盗塁とかか。

ブロックとスティールは……な、ナイスディフェンス?

ほんで、三割打者で、ホームラン打てて、盗塁王も狙えつつ、守備もスゴいって……どここの化けもんだ?」

「アタシは野球の方がよく分かんないけど……ニュアンスとしては、そんなもんじゃない?」

他のバスケ素人のクラスメイトも、折田に続いてふんふんと頷く。

「うゝんゝんゝ?」

野球がよく分からない女子はまだ首を傾げていたが、

「そういう細かい事は分かんないけど、とにかく宮瀬ツチはカッコイイって事は間違いないわね!」

檜山さんの水泳部仲間、天田さんがまとめた。できれば、凄さの細かい所もわかってほしいなあ。と、思っていた所、

「グッズ!グッズ売ってる!」

お手洗いから帰ってきた演劇部の森下さんが超興奮して捲し立てた。

「宮瀬君のグッズ!もの凄い勢いで売れてる!」

「なにい!!!?」

「行かねば!!!」

反応は、きーちゃんの方が早かった。「行くぞ美夏!」

「わ!わわわ!?」 きーちゃんに手を掴まれ、売店に引きずられる。

『宮瀬直樹選手の関連グッズは売り切れました』

飛び去るUFOの絵が書かれた謝罪文だけが乗ったテーブルの上には、もうグッズの欠片も残っていない。

「瞬殺、みたいね……」

「ごめんねーお嬢ちゃん。ここまで売れるとは思ってなかったんだ」
頂垂れるアタシ達に店員が声をかける。

「球団ホームページからも総額五千円以上からは配送料無料でお受けしておりますから、そちらからもよろしくお願いしまーす」

ちくしょう>orz

宮瀬のレプリカユニフォームとか欲しかったのに。

「宮瀬売り切れか……残念ねえ。アタシは南部サマのグッズ見てくるけど、美夏、あんたはどうする？」

「ん……なんか飲み物と食べ物とお菓子買ってくる」

『南部サマ』という表現にちよつと突っ込みたかったが、スルーしてアタシはきーちゃんやクラスのみんなと別れた。

一人、ふらふらと体育館の廊下を歩く。

ちよつとだけ、一人になりたかった。

………一人になって、シタい事があった。

檜山さん

他に誰もいないのを確認して…

アタシはそれを手にとった。

うわ、なんだか、イケナイことをしてるみたいでドキドキする。

（男子が好きな子のリコーダーを取る、ような、感じ…かな）

そんな、イケない事を思いながら、

宮瀬の、

メガネを

かけてみた。

トイレの鏡の前で。

うわ、度がキツイ。

地味なメガネ。

あの試合で一度壊れて、直して、前橋と後田が修理代を弁償したメガネ。

鏡に写る、宮瀬のメガネを掛けたアタシを、宮瀬のメガネ越しにアタシは観察する。

……不思議。

メガネ一個で、すごく印象が変わった。

ツリ目気味のアタシの眼光が、メガネを掛けることで少し和らい

だ様に見える。

宮瀬が時々見せるような、ほんわかした笑顔を真似してみる。

…あ、なんかちょっと新鮮。

これで肌が白かったら文学少女に見える、かな？

「うわ、似合わね」

たはは、と苦笑して…

「いえ、結構似合ってますよ」

不意打ちに、全身が硬直した。

御手洗いの入り口に、ヒールも履いてないのに高い人影一つ。

「ひ、ひひひひひ、ひやゝまさん！！？」

モデルのような高い身長、クラス委員長が笑っていた。

「可愛い事、するんですね」

「ひやややや！！」 慌てふためいてメガネを外す。恥ずかしいト

コ見られた。良かった、肌が黒くて…顔が赤くなってるのをごまかせるから。

「そんなに真つ赤になって恥ずかしがらなくても……」

バレとるがな！！

「相羽さんも…宮瀬君の事が好きなんですね」

「い、いやそんな！この行動には好きとか嫌いとかそんな感情は丸つきし含まれておりませんです、ハイ！」

テンパるアタシに、檜山さんは何もかも見透かしたかのように微笑む。

ハタと、気付いた。檜山さんの言葉に含まれた意味に。

「……『も』ってことは………」

檜山さんの顔が凜々しく引き締まった。

「私も、宮瀬君が、好きです」

さーど

休憩は終わり、試合が再開する。

TGNの大男達が殺伐とした表情で会場入りした。

TGN監督、平石も太った顔を憤怒の形相にして、後半開始を待つ。

「うわ、ありや絶対ハーフタイム中に監督に絞られたね」

「このまま何も出来ずに帰る気はないってツラだな」

きーちゃんと折田が

「こわいこわい」と身を縮めた。

前半とコートが変わって、FFSのオフェンスが向こう、ディフェンスがこっちになり、宮瀬はアタシ達に背を向けてプレイするようになる。

デビスの壁に阻まれて宮瀬の姿がほとんど隠れてた前半よりは宮瀬を見やすくなったけど……

（顔見えないのが、残念だなあ……）

宮瀬はどんな顔をしてプレイしているんだろうか？すごく気になる。

小さな宮瀬のユニフォームに、214の背番号が踊る。

小さな背中……178センチだから小さくはないはずなのに、周りが大きすぎて、相対的に小さく見えてしまう、宮瀬の背中。

細い手足……一般的な太さはあるはずなのに、周りが丸太のようにプロレスラーのようにゴツイ手足をしてるせいで、宮瀬の手足が今にも折れそうな小枝に見えてしまう。

前半は宮瀬のスーパープレイに興奮して気付かなかった所が、ハーフタイム明けで一度気持ちをリセットしたことで見えるようになってくる。

………見えるようになると、途端に怖くなる。

（絶対、無理してるよ）

そして、アタシの不安は的中した。

でも、このquarterは宮瀬にとって苦難の始まりとなってしまった。

TGNの平石監督は、宮瀬潰しに、仁義無き戦法を取った。

……プロの洗礼を浴びた、といってもいい。

開始三十秒。

宮瀬がスピードに乗る前に、体に腕が巻き付けられる。

…せっかくの速攻のチャンスが、ファウルで潰された。

1分12秒。

抜かれそうになった所で、足を引っ掛ける。

宮瀬の体がコートに打ち付けられる。ファウルの笛が鳴るよりも速く、ブーイングが館内を響かせた。

2分3秒。

フリーに成りかけた宮瀬のユニフォームを掴んで、強引に止める。

2分54秒。

デビスの速攻を止めようとした宮瀬に、肩からぶつかって宮瀬を吹っ飛ばした。転倒はしなかったけど、スピードを削がれた。ファウルの笛は鳴らなかった。

攻防、局面を構わず、TGNの各選手が宮瀬にぶちかましていく。

ダンパーのようなゴツイ身体が宮瀬にぶつかってくる。宮瀬が跳ぶ前に、シュート体勢を取る前に、徹底的に潰す。結果、宮瀬の身体が傷ついていく。

宮瀬のリズムが崩れて、FFSのあらゆるプレイが狂いだす。

パスが繋がらなくなつて、無理なオフエンスを仕掛けたドウドウがボールを失う。

ボールが回つてこない内柴が立ち尽くす。

繋ぐべきか撃つべきか迷つて南部のプレイが鈍る。

ゾーンディフェンスが崩れないせいでクラレンスがゴール下で動けなくなる。

FFSの得点が止まり、TGNが連続で決めて、点差が縮まってきた。

「卑怯だな、あいつら」

ベンチからファウル専門の選手が宮瀬にぶちかましては交代していく。

汚いファールの連続に、会場全体がブーイングに包まれる。

「……………えげつねえ」

折田がうめく。

「バスケってぬるいスポーツだと思ってたんだよ……………今まではな」
サッカー部の有田が、うめく。

一発レッド 退場もあり得るサッカーと違い、バスケの場合ファウルが五つまでカウントされないと退場はない。（超悪質な場合は除く）

それは裏を返すと、『退場さえしなければ、ファウルしてもいい』ということにもなる。

「考え直すわ、こりゃ、サッカーよりひでえ」

そう言い捨てるのと、松山の肘が宮瀬の顔を直撃したのは同時だった。

こんなところで（前書き）

bリーグのライジング福岡、参入初年度なのにプレイオフ進出おめでとございます。

こんなところで

ズダアアン

という重苦しい音が響いた。

それは、ジャンプ中にデイビスのエルボーを喰らった宮瀬が、背中から固いコートに叩きつけられた音。

「ナオキイ!？」

アタシはたまらず声を上げた。

あの落ち方はヤバい。背中と、後頭部もぶつけたはずだ。 宮瀬は、コートに倒れたまま、ピクリとも動かない。

審判の笛が鳴り、試合が止まる。

もうブーイングどころの騒ぎじゃない。宮瀬を心配するとよめきと、TGNの暴行に対する怒声がステレオで体育館を震わせる。

ドウドウが猛然と抗議：というよりもTGNに猛烈に罵声を浴びせる。（何語で言ってるかわかんないけど）

TGN側は、殺気を消そうともせずドウドウにメンチを切り返す。喧嘩上等って態度だ。

内芝とクラレンスがドウドウを羽交い絞めにして動きを止めてはいるが、一触即発の不穏な空気は拭い去れない。

審判が、退場でもなんでもなく、単なるデイフェンスファウル一つしかデイビスに課さなかった事が、雰囲気悪化に拍車を掛けた。今度はクラレンスが審判に詰めよって抗議する。内柴は二人をなだめようと必死だ。

「わざとだろ、あの肘!……………」と、言ってるわ」

檜山さんがクラレンスの言葉を通訳してくれる。

「…………間違いないわね。明らかに、ボールとは狙いがちがってたわ」前橋ときーちゃんが眉間にシワを作った。

「審判ぬるすぎだぜ」

今にも乱闘が開始されそうな緊迫感が漂う。

誰かが『カーン』とゴングを鳴らしたら途端に殴り合いが始まるだろう。

「……………ナオキ……………」

交通事故のような衝撃で、倒れた宮瀬は十秒以上経つのに、未だピクリとも動かない。脳震盪になってるのかもしれない。

倒れた宮瀬を見下して、介抱するでもなく助け起こすでもなく、ただ見下ろしていた南部が口を開く。

「ナオ、いつまで寝てんだよ」

「……………」

「こんなところでつまずいてる場合じゃねーんだろ？
なら、さっさと起きろ」

突き放した口調の南部の声が届いたのか、

「……………っ、クウ……………」

うめきながらも、ようやく宮瀬が上体を起こした。

会場全体に安堵の溜め息が響く。

乱闘寸前にヒートアップしていたドウドウも審判に詰め寄っていたクラレンスも、宮瀬の介抱に向かったお陰で、なんとか乱闘は回避された。あーやれやれ、と内柴が肩を揉む。

「……………立てるか？」

「……………立、て…ます、よ……………」

ヒジを食らった時に口の中を切ったのだろうか、口の端から流れる血を拭いつつ、宮瀬は立ち上がろうとして……

「ク……………っ！？」

ふらついて、倒れかけた。明らかに無理をしているのがバレバレで、「ダメだ。」

休め。

血を止めてこい」

南部は、ベンチを指差した。

「多すぎる血の気が抜けて、ちょうど良かったらう。」

…頭冷やしてこい」

3Q開始五分、宮瀬がベンチに下げられる。

「ただし、怒りと悔しさまでは捨てるなよ」

唾でも吐き捨てんばかりに表情を悔しさで歪めて。

「試合に戻ったら必ず復讐しろ。お前のやり方で」

安く買って高く売れ！！

ベンチでは治療中の宮瀬に肩を組んで、スールシャル監督が何か耳打ちしている。

(……………何語で話してるんだろ?)

素朴な疑問は解消されることなく、試合は進んでいく。

宮瀬と交代して、田宮のおっちゃんが入ってきた。監督からの指示を伝える。

「ケンカ売られたんだ…買えってさ」

ドウドウが口笛を吹き、クラレンスはにんまり笑い、内柴は

「血圧あげたくないんだけどなあ」と頭をかいた。

南部は相手コートに顔を向け

「富山さんよ、うちの悪魔王子を傷つけてくれたんだ……………タダで帰れるとは思ってないでしょうね？」

怒気を、露にした。

「こっちは、優勝の二文字抱えてきてんだ。……………開幕からつまずくわけには行かねえんだよ」

松山が、メンチを切りつつふんぞり返る。デビスその他人間山脈も威圧的に見下す。

「ましてや最下位チームなんかに…ましてや中坊のガキなんかにコケにされたままで、いらねえんだよ!!」

はあっと溜め息をついて、南部がチームに向き直り

「富山さんはお国にかえりやあお薬がいっぱいあるそうだ」 ケン力を、買った。

「遠慮なく、潰してやろうぜ。傷だらけにしてな」

『オオウ!!』

FFSの選手達が高々と拳を振り上げた。

試合は、更に荒れた。ラグビーやアメフトのように巨体のぶつかり合う音が絶え間無く響く。

審判が笛を吹く回数が激増し、両チームのファウル数が跳ね上がる。声を荒げ罵りあう。お互いまだ手はでていないものの、ルール違反すれすれのぶつかり合いが止まらない。

(……えーっと、これバスケの試合だよねえ)

冷や汗が流れてくる。いつ乱闘になってもおかしくない緊張感に。

HHH（前書き）

ところで皆様、どんなルートを通ってこの小説に到達しました？このサイトのシステムだとそれが分からなくて（^^；もしよろしければお答えいただけると参考になります。

HHH

じわじわと追い上げられる…TGNがゴリ押しで得点を積み重ねていく。

でも、一つ一つのプレーに激しく食らいつくFFSのディフェンスはそう易々とは崩れない。

「いやー、こんなに激しい試合が見れるとは思わなかったよー」
きーちゃんは楽しげにコロコロと笑う。

「だって、それが監督のモットーだからな」

ふふん、と前橋が通ぶった笑い方をする。意味がわからず首を傾げるアタシに後田が体育館の一点を指差した。

一枚の横断幕。書かれているのは…『HHH』のアルファベット三文字だけ。

「えっちエッチえっち？」

「と、トリプルHって読むんだよ！」

なぜ赤くなる後田？

「Hispeed

Hiscore

Hardcore

この三語のイニシャルを取って、HHHというふうですね」

昨日予習してきた檜山さんが解説してくれる。

「今年のチームスローガンだそうです」

「高速・高得点・過激に喧嘩上等ってか」

折田が訳す。

「何よそのマガンのヤンキーマンガみたいなモットーは」きーちゃんがぷつと吹き出した。

「笑うなよ、スールシャル監督は名将なんだからな」

惘然として、前橋が力説した。

スールシャル監督：元ノルウェー代表選手だそうだ。

現役引退後、アメリカの大学バスケット界で十年ほどアシスタントコーチを務め、今回、FFSが初の監督業となる。

「……………それで名将と言われても……………」

「いいから聞けって、福岡にとってはほんとに救世主なんだよ」

去年、シーズン50戦のうち前代未聞の22連敗を含む38敗したチームを、シーズン終盤で監督に就任し、見事に立て直した。

「最後の十試合は、なんと七勝したんだからな！リーグのお荷物だ、さつさと潰せって言われてたチームがだぜ」

……………そういや、今年の春先くらいに男バスで、

『イヤッホオ！スールシャル監督最高！！』とか言っとなあコイツら。

サッカー部の有田が何かにピンと来たらしい。

「なるほど、Jリーグでいえば千葉のオシム、名古屋のベンゲル、大分のシャムス力みたいなもんか」

「……………サッカーでいわれてもアタシには分かんないんだけど」

続いて野球好きの折田が、

「野球で言えば、北海道の、千葉のみたいなもんだな」

「野球で言われてもねー」

有田と折田がアタシを見て、同時に溜め息をつく。

「おまえって、ほんとにバスケットに興味ねーのな」

「そうよ、なんか悪い？」

アタシは胸を張った。

すなればーなんぶ

「ああ、もう！」

田宮のおっちゃんではデビスを止められない。好調のエゴロフと並んで、デビスが得点を重ねていく。

6 4 6 0

そしてFFSは、攻撃の一角、ドウドウが全くダメだった。

身体能力は高いものの、運動能力に頼ってばかりのドウドウは、基本的なテクニクができてない。TGNのゾーンディフェンスに捕まっては、ミスを連発する。

でも、もう一人が、ドウドウのミスを挽回するほどゴールを連発した。

攻めあぐねたドウドウから、ハイポストでボールをもらった内柴が、

「あっ」

直後に、ノールックで真後ろにボールを流した。

ゴール下で受け取ったのは右ウィングから走り込んだ南部。

でも、エゴロフと高松が固めたゴール下に隙は無く、

「ああ、もったいない」

南部はそのまま左ウィングにドリブルで抜け出して、高松は南部についていき……

「お？」

仕切り直し、かと思ったら

「おお？」

南部、伸ばした右足、左コーナーの3Pラインを越え、
「おおお？」

ボール持つ、
構える、

狙いをつける

その一連の動作を 右足を軸に南部が回転中に終わらせて、
「おー……？」

高松が慌てて南部に飛び付いた時には既に遅く、

ボールは放物線を描いていた。

シュートを打った直後、南部はリングを見もせずにディフェンス
に戻った。

67 60

「オオオオオオオ！！」

スリーポイントは、当然の様にリングを通過する。シュパッと衣
擦れに似た音に続いて、黄色い声が上がった。

「……キレーなシュートだねえ……惚れ惚れするくらい……」 きー
ちゃんと前橋が揃って、ほう……と溜め息をついた。

一分を切って、電工掲示板が秒間表示にカウントダウン。

72 70

ラストの一本、

目一杯時間を使いきって放たれたデビスのシュートは

「あああゝ！？」

リングを、通過してしまった。

同点！

遂に、同点！

7 2 7 2

TGNベンチの選手・コーチ・監督が勢い良く立ち上がり狂喜乱舞する。

残り、1・4秒。

遂に、TGNが試合を振り出しに戻した。

アタシ達の目の前で田宮のおっちゃんがボールを入れる相手を探す。時計はパスを受けたところでカウントダウン再開する。

残り1・4秒。

狙いをつける暇なんかない。

FFSの最後のプレイを妨害するべく、TGNがべったりとオールコートディフェンスでつく。

ドウドウは相手リングにまっしぐら。

……の、動きにつられた隙に、

南部が、

アタシ達側、

自陣の3Pラインから、

田宮から渡されたボールを即座に、

デビースとエゴロフのブロックを掻い潜って、

コート3/4離れたリングへ放つ。

ぶーー！！

と3rd quarter終了のブザーが鼓膜を振るわせる中、

ネットが
シュパッと
快音を立てた。

「……喜ぶのが」

喜んでいた大男どもが、がっくりと膝をつく。エゴロフが天を仰ぎ、デイビスが倒れたままバンバンとコートを叩いた。

「早すぎんだよ、富山さんよお」

7 5 7 2

ブザービーター。
奇跡のシュート。

歓声上がる。

宮瀬がエゴロフの上からダンクをした時に負けず劣らずの歓声が響き渡る。

F F Sのメンバーが、南部に飛び付いた。

「ああもうザイウざい。これくらいでぎゃーぎゃー抜かすなお前から」

抱きついてくるクラレンスの顔を押し退けながら、迷惑そうに言い放つ。

7 5 7 2

点差は縮まったものの、勢いの差はむしろ突き放して、3rd quarterが終了した。

「ええつと、なんつうか……………」

アタシは震えながら、南部を指差す。

「すごいね、この人」

「まあ、元日本代表のシューターだからなあ……………」

前橋が、答えた。

「もう、日本代表にはなれないけど……………」

反乱軍

「日本代表に、なれない……？」

前橋のぼやきに、サッカー部の有田が反応した。

「なんだ？あの人なんかやらかしたのか？」

南部を指差して、問いかける。

「南部さんがやらかした……っつーか」

ふーっつと、大きく大きく溜め息をつく後田と前橋。

「やらかしたのは、この日本のバスケット界そのものなんだけどな」

有田が渋面になる。きつと頭の中が

「……」なんだろう。　ブザービートの余韻に浸る、クォーター

間の休憩の中、

「サッカーと野球はいいよな、ちゃんとしたプロリーグがあつてさ。

正直、羨ましいぜ。」

有田と折田を見る前橋の口からため息が漏れる。

言われた二人の方は更に頭の中の

「？」が増えたようで、互いに目を合わせ、目をしばたたかせたあと、

「何いつてんのお前？」

「今やりよつとが、プロのバスケットやなかとか？」

二人して、巨人達と宮瀬がいるコートを指差した。

「ああ、確かにJBAはプロリーグだよ」

溜め息は大きく、重く……

「ただし、非公認のプロリーグだけどな」

前橋はそれつきり口を閉ざしてしまった。

「……」

「……どゆこと？」

説明投げっぱなしにされてしまった二人が、困った顔をアタシに向けた。

「アタシはアメリカのバスケにしか興味ないから、国内のゴタゴタは詳しくは知らないけどさ」

そう前置きして、アタシが説明を引き継ぐ。

「日本のバスケ界は分裂してるんだよ」

「……………すっごく、悪いほうにさ」

そのメガネは伊達じゃない

「いや、だからちゃんと説明してもらわんとわからんがな」折田はまだ不満げだ。まあ当然だけど。

「うーん、何から話せばいいのやら何を話せばいいのやら……」

きーちゃんとアタシは揃ってこめかみに人差し指を当てて唸った。実際この問題は『大人の事情』が複雑に入り交じっていて、アタシ達にはよく分からない。バスケット誌を毎月買ってるアタシも、問題の全体像がまるつきり理解できてないのよ。

「このJBAの他に、もう一つバスケットのリーグがあるんですよ」一向に頭の中の

「？」の数が減る様子のない有田と折田に助け船を出したのは

「……檜山さん？」

クラス一番の知的なメガネさんだった。檜山さんが、メガネを白く細い指で直しながら尋ねる。

「昨晚得た付け焼き刃の知識でよろしければ、代わりに説明致しますうか？」

「頼む」

「コイツらアテにならん」

田のつく二人が檜山さんに頼み込んだ。あらまあいやだわ全く。アタクシたちバスケット部面目丸つぶれでなくって？

「では、僭越ながら……」

最終ラウンド、4th quarterが始まる中、並行して檜山さんの説明会も始まった。

4th quarter開始早々に、
「チヨイア　！！」

さっきの南部のブザービートの真似がしたかったのか、ドウドウがスリーポイントラインのはるか後ろからシュートをぶん投げた。
「……………」

（ ）？ な感じでキョトンとした顔のエゴロフの手にボールが渡る。

「アホー！？」

「真面目にやれー！！」

体育館から総突っ込みが入る中、エゴロフからデビスへパスが渡り、返す刀で、TGNのスリーポイントが決まった。

75 - 75

チツと、南部の舌打ちが聞こえる。あ、青筋すげー。

「ああ、またドウドウの悪い癖が…」

「誰かが目立つプレイをすると、出来もしないくせにすぐに真似しだす悪い癖が……………」

「……………なんてはた迷惑な」

予断を許さない試合に並行して、学年一の知性派が説明を続ける。

「スターリーグという、日本籠球協会が主宰するバスケットボールリーグがあるんです」

「スターリーグと、JBA……………」

「名前だけ聞いたらスターリーグの方がスゴそうね」

「クラスの子が素直な感想を述べる。」

「それってよお、野球でいえバ・リーグとパ・リーグみたいなもんかの？」

「サッカーで言えば、J1とJ2みたいなもんだろ？」

いつものようにいつものごとく、折田は野球に例え、有田はサッカーに例える。

「どちらも、間違いです」

檜山さんは、事も無げに切って捨てた。

「セ・パ両リーグもJ1・2リーグもJBAとスターリーグの関係とは間違っていますね」

真実は多面体

75 - 77

ドウドウの無責任なプレーからリズムの悪くなったFFSは、あつさりと逆転された。

75 - 79

「スターリーグの方が、このJBAよりも実力的には上、とみられているようです。」

直接対決が存在しないので、あくまでそう分析されているだけです。」

「ほお」

「はあ」

檜山さんの説明に相づちが打たれる。

後半の勝負どころにデイベイスとエゴロフを温存するTGN。

代わって入った二人の黒人選手はレギュラーに匹敵する実力者でチーム力ダウンはほとんど感じない。

対して、選手層の薄いFFS側は宮瀬以外のレギュラー陣がで続けている。疲れが出てきたようで、足が止まり気味になっている。

コートでは南部がイライラしていた。3クォーターの活躍に対抗してTGNの守備職人、亀山が南部へのマンツーマンディフェンスについているからだ。

「あー、やだ。あんなマークされたらシュートなんて打てないわよ」南部とポジションの被るきーちゃんがそういうくらいぴったりぴっちりの密着マークだ。

かなりドリブルが上手くないと、あのマークを振りほどけないだ

ろう。そして、南部のドリブルテクニクは平均程度。

ボールを渡されてもシュートを打てない南部の全身からイライラの気配が漂ってくる。

攻め手を欠くFFSの得点が止まる。

「なぜならバスケットボール日本代表の選手は、全てスターリーグに所属しているからです」

「なんだ、ここの人達は全部代表じゃないのか」

有田の見る目がちよつと変わる。なんというか、こう、ちよつとばかり見下した感じに。

78 - 79

南部が猛スピードで巨漢の密集するゴール下に突入する。肉の壁の中で方向を変え、もみくちゃにされながら肉の森を突破した瞬間に、田宮からボールが渡る、即、放たれるシュート。

体勢は不安定、フォームもめちゃくちゃなのに、

「……………パーフェクト」

きーちゃんが呟いて、ボールは金属の輪をぐり抜ける。

第4 quarter開始から二分四秒後、ようやく決まったFFSの得点に、福岡のファンが多いに沸いた。

ゴール下でクラレンスに足を止められていた亀山は忌々しげに南部にガン飛ばす。南部も負けじと険しい目で見返しながらディフェンスに戻る。

「きーちゃん、前橋：あんなシュート決められる？」

「むりむりむりむり」

「真似したくてもできんわ」

男女バスケット部の両シューターが首を降った。

「なあ、スターリーグにいる日本代表ってあの人以上にもすごいのか？」

「……あまり変わりないと思いますよ」

代表にこだわる有田の質問に、檜山さんはうつむき気味に答えた。
「スターリーグの方は、試合に出られる外国籍選手が一度に一人だけなので、外国籍選手の出場制限の無いJBAよりも試合がゆるいので」

「……？それなのに、スターリーグの方が実力上なのか？」
納得できないと有田の顔に書かれている。

「ええ、スターリーグが代表選手を独占してますから。
事情を知らない人が見れば、スターリーグの方が実力があるように感じるでしょうね」

檜山さんの口調が、変わった。説明する声にトゲが含まれる。

「本当は、JBAの選手が日本代表の枠から締め出されているだけなんですけどね……」

我慢の時間

二メートルを越える日本人トリオがしっかりとゴール下を固め、背は低いが運動能力は抜群のベンチから出てきた二人の黒人選手がアウトサイドの選手にしっかりとマンツーマンで警戒する…TGNは守備を強化してきた。

残り時間が十分を切る。

79 - 81

ラスト五分の勝負どころへ向けてデビスとエゴロフという戦力を温存するTGN。

二枚看板がいない…それでも体格差を活かし、単純明快にして王道なパワープレイで着実に追いついてくるTGN。

逆転されたFFSはイライラが増していく。

試合全体を通してゴール下を支配され続けたFFSの攻撃は、今のところ南部のロングシュート頼み。

81 - 83

残り時間が減ることにピリピリと高まる緊張感。

一つのミスが即敗北に繋がるかもしれない…そんな緊張感が、みなぎる。

84 - 86

残り時間七分。

予断を許さない状況で、アタシの視線はコート外に向けられていた。

ゆっくりとストレッチをしながら、鷹の目で十人の動きを観察する…その横顔を見ていた。

きーちゃんも、見ている。その横顔を。

前橋も、後田も、クラスのみんなも。

この究極電力記念体育館のみんなが、待ち望んでいる。

いつ投入されるか。

全身の震えが止まらないまま、アタシは待ち続ける。

並行して、檜山さんの説明は続く。

「スターリーグはサッカーでいえばJFL、野球でいえば社会人野球連盟です」

「……………ん？」

「……………あ？」

試合に魅入っていた二人が、檜山さんに眉根を顰める。

「スターリーグはプロではなくアマチュアリーグなんですよ」

「はあ!？」

度肝を抜かれたように、二人が声を上げた。

「サッカーでいうならJリーグを無視してJFLの選手を日本代表にするようなものですね。」

そんなことでは、W杯出場なんて夢のまた夢でしょう」

「そらそうだ、W杯に行くために、Jリーグが創設されたんだからな」

有田が困惑しつつも答える。

「なんでプロを差し置いてアマチュアが代表になつとや?」

「大人の事情ですよ。お金と、利権という」

折田の問いに、檜山さんのメガネが曇った。

落ちた時の砂は帰らない

「……さつきからなーんか、陰険な話しだね」

水泳部仲間の天田さんに後ろからお下げ髪を弄られつつ、檜山さんの説明が続く。

「……日本のバスケットを支えていたのは学校と企業です」

まあ、これはバスケットに限らず日本のスポーツほぼ全てに当てはまりますが、と付け加える。

「ですが、九十年代の不況のせいで、名門や強豪を含む多くの実業団チームが解散し、優秀な選手たちが居場所を無くし……日本のバスケット界は衰退を迎えてしまいました」

「リストラだねリストラ」

「不況ねえ……」

不景気とか不況とか言われても、生まれてこのかたずっと不景気の平成育ちのアタシにやあよくわかんないんだけどねえ。バブルなんて生まれる前だってば。

「不景気をものともしない大企業などは消滅した他チームから有力選手を吸収して強くなりましたが……そもそもリーグを形成するだけのチーム数さえ揃えることが困難なほど、日本バスケット界は斜陽を迎えてしまいます」

「まさに末期……」

「野球もサッカーも問題山積みだけど、バスケットほどじゃないってことか」

有田が腕を組んで唸る。

「解決策として親企業の都合に振り回されない、プロのクラブチームを作ること。そして、プロのバスケットリーグを作ることが提案されました」

『ゴアアアアア……!』

TGNの日本人トリオの山の中に突っ込んで、ドウドウがオフエンスリバウンドをもぎ取る。

オオ！とどめきが起きるが結局すぐにため息に変わった。奪つてすぐにシュートを打とうとして、あっさりと大松にブロックされたのだ。

ルーズボールを確保したのは富山。

「惜しい！」

「実に惜しい。もう一度攻撃を組み立て直せばよかったものを……」
頭を抱えるきーちゃん。前橋は舌打ちした。

「後押ししたのは当時の、空前のバスケットブームでした」

「ああ、昔は凄かったらしいねえ」

「バスケット漫画の金字塔『スラムダンク』の大ヒットとアメリカ代表チーム、NBAのスターを集めたドリームチームがバルセロナオリンピックで圧倒的な実力差を見せつけ……」

「日本でのバスケット人気は急上昇し、マイナースポーツからメジャースポーツの仲間入りをします」

「その頃の男バスな、入部希望者が百人も来たらしいぜ」

「ひゃ、ひゃくう！？」

にやつく後田に、天田さんが目を丸くする。

「まあ、一週間もしたら十人くらいしか残らなかったらしいけどな」
それだけ、大ブームではあったのだ。

「協会はプロリーグ構想を立て、有力選手はプロ契約を結び…プロ化は秒読みと思われました」

説明を続ける檜山さんの口調は重い。

「そこから十年間、一步の進展も無いまま、時が過ぎてしまったんですけれどね」

偉大なる言い出しっぺの功績

「……………十年？」

「はい」

「……………一步も？」

「はい」

「……………進展なし？」

「はい」

あんどりと目と口をあけたクラスメイトに、檜山さんが答える。

「『準備』が整っていない、とプロ化への移行は年々見送られました」

「なんでまたそんなに遅れるのかねえ」 呆れに呆れた折田は呟く。

「一番の問題はお金ですね。」

野球でもサッカーでもほとんどのプロチームが赤字という中で、バスケットで黒字になるビジネスモデルを描く事ができなかった。

それで更に金銭的負担を負うのをスポンサーが嫌がったのでしょう」

「一応Jリーグには黒字のチームあるぞ、浦和とか」

「野球に黒字チームってあったっちゃが？」

有田は自慢気に、折田は首を捻る。

「何にしる大半は赤字やん」

きーちゃんが笑った。

……………消滅したチームもあつたしな…と、有田が小さく小さく呟いた。

「次に、各都道府県の体育協会の抵抗です」

「なんでそんなもんが抵抗すつとや？」 折田が首を捻る。

「興業権のないアマチュアリーグの試合では、チケット収入は各体育協会の懐に入ります」

「へー、そうなんだ」

ブームの残り火、とはいえアマチュアリーグの試合にしてはかなりの多い観客動員をしていた。

「費用負担ゼロなのに興業収入をもたらすバスケットは、各体育協会は手放すにはあまりに惜しい存在なのです」

今この体育館にいるのが2000人くらいか。チケットの値段が二千円くらい。掛けると四百万か。リーグで何十試合かやるから…『億』に届くなあ。

「プロ化する事で貴重な収入源が減る事を嫌った各地方体育協会の強い抵抗、プロ化する事で宣伝塔としての役割が薄れる事を拒んだ各企業などの反対…

プロ化しないまま、そのまま十年以上の時が過ぎて…

その間にチームは続々と解散し、多くの有力選手達が行き場を無くし…」

「もたもたしてるうちにロシア・リトアニア・ギリシャ・フランス・オーストラリア・アルゼンチン・中国・韓国など世界各地ではバスケットのプロリーグができて、実力急成長」 前橋が自嘲気味に笑

い、
「こないだ日本でやった世界バスケットじゃギリシャがアメリカを倒しちゃった。たった十年でアメリカと世界の差は縮まった」

後田が続ける。

「なのに、日本と世界の差は開く一方」 きーちゃんがこれみよがしに大きなため息をついた。

「そこで、声を上げたのが、新潟でした」

「新潟？なんで新潟なんか…」

「……………もしかして、アルビレックスのあの人か？」

首を捻るクラスメイトの中で、サッカー部の有田が何かに気付いた。

「『偉大なる言い出しっぺ』、みかわみつのり美川光徳か！？」

「その通りです」

檜山さんが微笑み、流石サッカー部と呟いた。

「えーっと、誰それ？」

「Ｊリーグの新潟チームを作った人だよ。作っただけじゃなくて、新潟でサッカー人気を爆発させて、おまけに根付かせた人でもある」

「一向にプロ化を進めない協会に業を煮やした新潟の美川氏が協会を公然と批判。

埼玉と協同して日本リーグを離反・独立。

完全プロ化を目的に新リーグを設立しました」

「なるほど美川さんバスケットでもやらかしたわけか……」

「なんだか有田がやたらと納得している。

「協会が十年以上かかってでも終わらなかった『準備』をたったの半年で完了させて出来上がったのが……」

「それが、このＪＢＡです」

「……………よく、調べたなあ」

「アタシは感心しまくる。

「そんな歴史があつたとはなあ」

「だからお前らもチケット買ってくれよ。このチーム、だけじゃなくって、どのチームもいつ経営破綻してもおかしくないんだからよ」

「なんだ。やっぱり経営は苦しいのか」

「ええ、嫌がらせされてますから」

不特定多々々々多数ライバル

「ええ、嫌がらせされてますから」

両チーム必死の奮戦の最中に檜山さんの冷たい声が響く。

「離反され、面目を潰された側の協会も、これまでのリーグをセミプロ化して対抗しました」

「セミプロ？」

「ほとんどのチームは前のアマチュアのままで、少数のチームだけ興行権を持つプロチームを作り、プロアマ混合のチームとしました。スターリーグと名付けられ、これで前々から準備していたプロ化の公約は果たされた、と宣言します。」

「なんとまあ中途半端な」

折田ほか、クラスメイト一堂が苦笑する。

が、続く檜山さんの一言に完全に言葉を失った。

「その上で、JBAをスターリーグの完全プロ化を妨害した『裏切者』扱いします」

「……………はあ？」

一瞬の沈黙、絶句。

コトの顛末を知っているアタシ達でさえも、一瞬息を呑むほどの理不尽さに、みんな言葉もない。

「また日本代表に選出されるのはスターリーグの選手だけ…」

檜山さんは淀みなくスラスラと、アナウンサーの様に言葉をつむいでいく。

「つまりサッカーで言うなら、Jリーグ等に在籍している選手は代表選手になる資格を剥奪されている、という事です」

Jリーグを目指す有田は特に納得がいかないようで、目つきがスゲー怖くなってる。

「そもそも取り上げられる事自体稀な日本バスケットの中で、一番の注

目株になるはずの日本代表チームを相手に奪われている… JBAにとってはかなりの手度です」

元日本代表の南部が大松からのパスをカットし、速攻に持ち込み二点を奪う。

南部の固定ファンの女性客が声を張り上げた。

「代表の独占、話題の独占。」

正統性を主張するスターリーグの協会…数々の逆風の中で、細々とJBAは年月を重ねて来ました」

ここで一転、檜山さんが、にこりと笑う。

「そして、今日、完璧に立場が逆転したのではないのでしょうか」

ここまで淡々と説明していた檜山さんの顔が、ほわほわとほころんだ。

「日本人の平均身長とさほど変わらない少年が、二メートルを超える外国人達を圧倒するその姿……」

メディアに、国民に愛されるスター性が充分にあります」

乙女の瞳になっちゃった檜山さん。

体育館には、二つ、TVカメラがある。

開幕戦ということもあり新聞社、スポーツライター、カメラマンらプレス陣……そのレンズは、試合中の選手よりも、ほとんどがベンチで休んでいる一人の少年に向けられている。

「……今夜中には、宮瀬君のダンクシーンは全国報道されるでしょうね」

クラスマッチでアタシの目に焼き付いた宮瀬の背中。

今日の試合で、カメラを通して、一体どんな人か、178センチの日本人が229センチのロシア人をぶっ飛ばす映像を見るんだろう。

そして、どれだけの人が、宮瀬にアタシと同じような、檜山さんと同じような感情を抱くんだろう。

「そうすると、高鳥中学校での人気とは比べ物にならないほどの…大混乱になるのではないのでしょうか？」

アタシの手の中には、宮瀬の眼鏡。
修復したはずなのに、傷痕が微かに残る宮瀬の眼鏡。
檜山さんの膝の上に、綺麗に畳まれた宮瀬のジャージが乗っ
ている。

不特定多々々々多数ライバル（後書き）

この物語はフィクションであり、実在の団体・人物名・組織名とは一切係わりがございません。

真実については各自、wikiったりgoogleったりしていただけると幸いです。

そして、できればBJリーグ（作中のJBAのモデル）のチケットを買ってください。日本のバスケの火を消さないようにするために。

カリスマ

残り時間五分。

85ー88。

得点差は3。

ボールがコートを出て笛が吹かれる。

富山のベンチが動く。選手が入れ替わる。

TGNはデビスとエゴロフがコートに入る。

獰猛な獵犬のように激しくしつこいディフェンスをする黒人ガードのヒューストンはコートに残る。

この外国人三人に富山の倉石監督は試合を託したのだろう。

スールシャル監督も、試合を託せる選手を投入する。

「――来た！」

ベンチから動き出ただけで、会場が震えた。

「来た、来た、来た！やつと来やがった！！」

ベンチからコートに向かうだけで客席が総立ちになる。

（ヤダ……）

熱狂、としか言い様の無い雰囲気

（やだよ……）

頭がクラクラする。

胸が締め付けられる。

全身に電流が走る。

（宮瀬が……遠くなっちゃうよ……）

「み、みんなそんなに俺の事を……！？」

いつの間にか医務室から帰ってきた鬼頭が涙を流さんばかりに感

無量で立ち尽くしていた。

が、

「お前じゃねえよすつこんでろ!!」

「空気読めやトカゲ!」

有田その他に叱られて、しゅん、とうつぶいて鬼頭は静かに自分の席に着いた。

そこで初めて気付いたように男バスの二人が声を掛ける。

「あれ? キャプテンいつの間に戻ってきたんですか?」

「あ、すみませんキャプテン。来てたの忘れてたから席に荷物置いちまってた」

「お前ら…俺の事嫌いだろ」

「あつはっはいやだなあそんなわけないじゃないですか」(棒読み)
……………男バスの話しは放つといて……

待ちに待った時が来た。

宮瀬が、コートに足を踏み入れた。

客席と、報道陣の数百のカメラからフラッシュの光が浴びせられる中、宮瀬がゲームに戻ってきた。

富山からの刺客・ヒューストン

サイドラインから宮瀬がインバウンズプレイ（サッカーのスローインみたいなもん）で試合再開。

宮瀬から南部へボールが渡る。南部にはデИБイスがつく。

南部、無理せずにボールを宮瀬ヘリターン。

ビタ、と鼻先がくつつきそうなほど密着マークするヒューストン。宮瀬が面喰らった。

「あのデIFェンスはキツイよ」

アタシも、思わず口に出した。

「デИБイスは直線のスピードは速いけど、横のゆさぶりには弱かった。」

多分膝が悪いんだろうな。左に体重が乗った時の反応が遅いんだよ。それに、あんまりデIFェンスが上手く無かったから宮瀬に抜かれまくった。

でもあのヒューストンってのは違う。宮瀬とほとんど同じ身長だけど、デIFェンスの気合いの入りが違うし、反応が超速い。デIFェンス力だけならデИБイスより遥かに上だ。あんなのついてたらキツイぞ、宮瀬」

アタシは言い終えて、男バスの野郎どもがポカーンとアタシを見てるのに気づく。

「……………何さ？」

「……いや、お前……よう見とるな」

「………こんくらい普通じゃない？」

「いや、普通じゃあないな」

男バスどもが今さら感心したようにアタシを見てくる。散々試合見ときながら、なんで気づかないかなコヤツら。

宮瀬がドリブルをつく度に、アタシの胸が高鳴る。期待と不安が

ごっちゃになって。

宮瀬はヒューストンに背を向けて、相手の届かない所でドリブルをつきながら肩越しに戦局を見極める。

ゴール下ではゾーンを崩そうと内柴とクラレンスがちよっかいをかけるが、エゴロフはどつしりと構えて動かない。

南部はデイビスのマークを外そうと走り回るが、スピードで負けている為降りきれない。

左ウイングに突っ立ったドウドウが

「おい、ボールちょうだい」と大きく手を振るが、

「いや、アンタ3ポイント撃てねえくせにそんなとこいるなよ」
てな感じで宮瀬はスルー。

パスの出してが無いまま、シュートクロックはカウントダウン。

「あ、あんなに固められたらもう無理だ」
後田がチツと舌打ちした。

うは、ディフェンス涙目www

後田がチツと舌打ちした。

「猫の子一匹通れやしねえ」

うん、確かにヒューストンのディフェンスは固い。ヒューストン1人で、クラスマッチの時の男バス三人組に囲まれた時並のウザさがあるだろう。

白熱する宮瀬とヒューストンの1on1。

ドリブルで果敢に抜き去りにかかる宮瀬を、

「そこ！ イツちゃえ！……ああ！？」

ヒューストンが先周りにして阻止し続ける。

アウトサイドで繰り広げられる攻防。剣道の鰐迫り合いのようにヒシヒシと高まる緊張感。

スピੰムーブも先回りされて止められた宮瀬が、

楽しそうに

笑った。

「ナオキ！」

自然と、声が出た。

張り上げてた。

「みぎ！」

反応は即。

宮瀬の死角からボールを盗もうとしたデイビスに気付く。

右手のドリブルから左手にチェンジ。

そのまま右手で突っ込んできたデイビスを抑える。

ボールは宮瀬の左手から離れて、ヒューストンの真下を潜る。

「あ」

っというまに、

「ぶち破った!？」

デビスとヒューストンがお見合いをした僅かな僅かな、ほんのわずかな隙間を、宮瀬がぶち抜く。

息を飲んでいた観客が歓声をあげるより早く人間山脈へと飛び込んだ。

宮瀬が跳ぶ、

フリースローライン手前で、

リングより遙か遠くから、

必死にブロックに跳ぶ大岡と小嶋を馬鹿にするかのようにレイアップの体勢から高く高く、ボールを放り投げた。

「う・上手い！」

「これは止められねえ……」

前橋と鬼頭が揃ってうめいた。

「ループシュート？」

サッカー部の有田が言うように、ボールはループを描いて、リングの間をすり抜けた。

87ー88

宮瀬、十一得点。

点差が1に縮まる。

「今の、アンタの得意技じゃない？」

きーちゃんがアタシをヒジでウリウリしつつ聞いてきた。

「う、うん。ティアドロップ……だね」

「は？今のフロッターって言わねえ？」 後田が突っ込んでくる。

「ハイループレイアップじゃねえの？」

富山の全選手ががっくりと肩を落とす中、アタシ達の「さっきのシュートの名

前は何か」議論が始まるうとして

「き・め・ましたー！宮瀬君のティアドロップウー！」

DJマイケル・コールのアナウンスに、中断された。

「ブロックすら出来ない、ファールすらできない、ディフェンス涙目の宮瀬君のと・く・い・技」

アナウンスに、アタシ達はポカン、と口を開けてしまう。 シュートを決めて

あたしに近づいて来る…もとい、ディフェンスに戻る宮瀬がさりげなくアタシに

向けて、ウィンクしてきた。

あつ、やば、なんか身体ビリビリする。

（宮瀬…あん時の事、まだ…覚えてるんだ……）

体が震えて、手の中のメガネを落としそうになる。

このプレイを皮切りに……宮瀬の3Qにやられた分のお返しが始まった。

うは、ディフェンス涙目www（後書き）

このティアドロップとかハイループレイアップとかフロッターとかいうものは正式名称が決まっておりません。

ほんとにサッカーのループシュートみたいなものです。

ビハインドバック……………？

このプレイを皮切りに……………宮瀬の3Qにやられた分のお返しが始まった。

FFSに立ち塞がる高い高い人間山脈に…トンネル工事を開始する。

ヒューストンのお株を奪う密着マークで、宮瀬がヒューストンの動きを封じる。

まともに進めないヒューストンはサポートにきたデイビスにバックビハインドパス（ボールを持つている手を背中に回して、そこからパスを出す。相手の意表をつけるが、パス精度・パススピードは落ちる）でボールを託した。

デイビスからエゴロフへの米露ホットライン。

巨体とは思えぬ器用さでクラレンスのディフェンスをずらし、エゴロフはシュートを放つが、外れ。

クラレンスがディフェンスリバウンドをもぎ取って、宮瀬にパス。

速攻だ！

宮瀬が中央を走り、それに少し先行して南部が左を走る。

リバウンド争いに加わっていて遅れたドウドウも速攻に参加しようとして爆走する。

TGNディフェンスはデイビスが南部に着き、ヒューストンが宮瀬を待ち構える。

巨漢三人は間に合わない。

宮瀬が左右へのフェイクを織り混ぜるけどヒューストンの軸はブレない。

全速力だった南部が急ブレーキ、3ポイントライン左45度で。デビスは急に止まらない。二人の距離が開く。南部フリー。

宮瀬、右手を背中に回して左の南部へビハインドバックパス！

（そこダメ！？）

ヒューストン、宮瀬の動きを読んで、パスコースに手が伸びる。

（盗られる！）

そう思った、瞬間。

「おうわああおうわんわいえー！」

破壊音が、怒号が、体育館全体に轟いた。

……………ドウドウが、リングに腕を突っ込んだ。

ボールはテン…テン…とコートを転がっていた。

「……………へ？」

ドウドウのダンクが決まっていた。

89ー88

デビスとヒューストンがあごが外れるほど口を開けて立ち尽くしていた。

その表情は「理解できない」と物語っている。

キツネにつままれたように、会場が変なテンションでざわつく中、ディフェンスに戻るドウドウが大はしゃぎで宮瀬にハイタッチした。

「じゅるじゅふ・ミヤーセ！」

「ん、によこぼつく」

それをウザそうに横目に見ながら、南部も帰ってくる。

「あ、今のはセネガル語ですね。意味は『ありがとう』と『どういたしまして』ですね」

「……………なぜ分かるの!？」

「昨夜、チームにセネガルの人が居ると分かりましたので、ついでにセネガル語を……………」

「……………調べすぎやろ」

檜山さんの解説に天田さん他がビビる中、アタシ達バスケ部員は揃って唸っていた。

「さっきのプレイ…分かった？」

「さっぱり」

「分からん」

「見当すら……………」

きーちゃんの間に、男バスが次々と首を振る。

「美夏は？アンタでも分かんない？」

「んつと……………速すぎて良く見えなかったけど……………」

数秒前の視界を巻き戻して分析する。

ボールを持った右手が背中越しに回って……………うん、多分間違いない。

「バックビハインドを一周させてたように見えた」

「……………どゆこと？」

首を傾げるきーちゃんに実演してみせる。

「右手をこう後ろに回して…普通、どっかで離してパスするやん？」

「うん、普通はね」

「離さなかったんだよ、宮瀬は」

きーちゃんが、更に首を傾げる。

「右手に持ったまま更に腕を回して、……………イタタ、アタシの手の長さじゃ無理ね。」

とにかく、宮瀬は左のわき腹…腋の下辺りから、右のドウドウにパスしたんだよ」

「超光速で？」

「おまけにノールックで」

バスケット部員全員が一斉に溜息をついた。

「そんな魅せ技としか思えんようなトリックプレーを、実戦で、ここ一番で、やりやがったのか……………あいつは」

まるでゴールキーパーのような守備

追われる側から再び追う側に戻ったTGNが、気を取り直してオフエンスを組み立て始める。

デビリスからエゴロフへ…試合中何度も見られた米露ホットライ
ン。

身長差を活かして、今回も宮瀬の頭上からパスが放られ……

「！！？？」

……無かった。

「なんちゅー反射神経だ！？」

タカ中サッカー部歴代No.1キーパー（自称）の有田が仰天する。

それほどの、超反応。パスモーションに入った瞬間にパスコースを完全に読んで、身長差を覆して、宮瀬が、パスの出だしを掴みとった。パスに合わせて跳んだ宮瀬が、片手でデビリスのパスを奪った。

宮瀬、着地。

愕然とするデビリスの横から、即、無人の向こうのコートにゆるいパスを投げる。

ヒューストンが必死に戻るのを馬鹿にするかのように、後ろから抜き去ったドウドウが、宮瀬のパスに追い付いた。

「……………絶妙すぎる」

敵と味方の運動力を計算しつくした上で、ドウドウの最速でのみギリギリ間に合うという所にボールを放っていた。

アタシと同じように、後田も舌を巻くなか……………

「オオルザワシャワンカーイ!!!」

奇声を上げて、飛び上がったドウドウが片手でボールをリングに豪快かつバイオレンスに叩きつけた。

二連続でドウドウのダンクが決まる。

91ー88

それはTGNの戦意ごと叩き潰そうかというほどの強烈な一撃。ガッツポーズを作りライオンのように吠えるドウドウに、TGNの全員が歯噛みする。

その裏で、

宮瀬が、

デイベイスに、

一言。

「もう見飽きたよ」

「あんなつまらないパス」

……………TGNが、タイムアウトを取った。少しでも流れを変える為に。

セツトオフエンス

次のプレイでは、デイビスも意地を見せた。

プロの先輩としての意地を、

バスケ母国アメリカ人としての意地を、

大人としての意地を。

強引なパワードリブルで中に切れこみ、ディフェンスを引き付けてヒューストンへアシスト。

ヒューストンの3ポイントが、輪を通過して同点！

91191

TGN陣営が沸き立つ。まだ勝負を諦めていない、と。

「……うぜえ」

聞こえてきたのは、南部の声。

エンドラインからボールを入れる前に、南部が宮瀬に話しかけていた。

アタシ達の席からすぐソコだから、大観衆のざわめきの中でも声が通る。

「なかなかしぶといですね」

汗を拭う宮瀬に、南部が器用に片眉だけ吊り上げて言い捨てた。

「……とつとと決着つけるぞ」

「うん、次のプレイで……」

宮瀬と南部が声を合わせた。

『息の根、止めよう』

……心臓を鷲掴みされたかと思うほど、身体が震えた。

いつものぼんやりとした風情からは思いもよらない、宮瀬の静か

な激しさ。

(……ばか)

それを今まで気付けなかった、見抜けなかった、ぶつけてもらえなかった自分が……悲しくて、悔しくて。

富山監督が叫び、TGNの選手達がゴール下をぎゅうぎゅうに固める。

静かに戦況を見つめるノルウェー人監督から、指示は無い。

214のユニフォームがアタシから離れていく。

宮瀬が右手を高く掲げる。右手は親指と小指を伸ばし、他三本を曲げて。耳に当てたらケータイのジェスチャーになりそうだ。

それを見て、FFSメンバーが動く。

1イン4アウトのセットオフENS、クラレンス以外の四人が3Pポジションに広がる。

「これは……」

「……3P狙い……かな？」

きーちゃんと後田が分析する。

「それでも富山は、ゾーンを外さない、か」

「今日は南部がキまわってるから、南部に撃たせるんじゃないか？」

「でも、宮瀬もスリー上手いからなあ」

「そう見せかけて、ドウドウに合わせてくるんじゃないか？」

「内柴は……スクリーン要員かな」

「多分な」

決着

攻める宮瀬、護るヒューストン、二人の鏖迫り合いが繰り広げられる。

スリーポイントを打たせまいと、デビスが南部への警戒を高める。

それを…

「んごふ!？」

内柴がスクリーンアウトで、合法的に守備妨害。

内柴の肉の壁にデビスの足が止められる間に、南部がフリーになる。

絶好の機。

宮瀬が、見逃す筈がない!

左45度の宮瀬から右エンドラインの南部へ、ボールが渡る!

内柴の妨害から抜けたデビスとゴール下から出た松岡が南部へ飛びつき…

「はい、ごくらうさん」

……南部は、おちよくるようにボールをリターン。

松岡が抜けて手薄になったペイントゾーンへ走り込んだ…宮瀬に!

宮瀬スピードに乗ったまま右から来たボールを、手首の返しだけで、パスの勢いを更に速めて、後ろに流す。

宮瀬はそのまま、自分より遥かに大きな大岡にスクリーンを仕掛ける。

「!？」

追いつがるヒューストンがボールの方に顔を向けて……

「アアレズアシエール!!」

フリースローラインから一步分踏み込んだ所から飛び込んできたセネガルの悪魔に、頭上を越えられた。

「…と!？」

『飛び越えたー!?!』

175センチのヒューストンを跳び箱のように飛び越えて、リングがへし折れそうなほどのダンクが、三連続で富山を叩き潰した。

93191

『スラムダンク王ドウドウの人越えダンクー!』

まさか、まさかまさか実戦で見られるとは、思ってもいませんでしたあ!!」

マイケル・コールが発狂しそうな勢いでアナウンスする。

「おいおい…ダンクっていうレベルじゃねーぞ!？」

観客も、興奮が限界突破。叫び声がこだまし続けて止まらない。

「ダンク以外に能のないドウドウが…こんなに試合中で活躍できるとは!!」

「そのポテンシャルを引き出せる宮瀬のパスがすげえよ…」

宮瀬を起点とした、ドウドウの三連続ダンクは富山ゴールデンナゲッツの戦意そのものを完全に挫いた。

残り時間エゴロフだけは淡々と点を積み重ねたものの、他のメンバー全てがミスし続けて、一気に突き放される。

大して福岡は宮瀬のパスを中心に、楽々と点を増やし、そして、止めに…

残り三秒、宮瀬の手から離れたボールはリングを通過して、3点

が加算された。

「だめ押しだー！」

103195

『宮瀬、十四点ー！』

声が囁れてきたマイケル・コールが、それでも声を張り上げた。
得点が宮瀬の…アタシ達の年齢に到達する。

そして…試合、終了の、ブザーが、鳴った。

超新星

48分の激闘は終わり…男達は互いの健闘を称え合う。

「すげーなおまえ、前世はカンガルーか何か？」

「完敗だよ、俺たちの…ところでお前、ホントに日本人か？」

「どこであんなイヤらしいプレイを覚えるんだよこのガキは」

宮瀬が富山のデカイ人達に取り囲まれて姿が全く見えなくなる。
改めて、身長差を感じさせる。そして改めて、宮瀬がその身長差をもものともせずに結果を出したことに驚かされる。

「どうだい富山さんよ、うちの王子様は」

南部がニヤリと笑い、富山監督平石に問いかける。

「いや、登場してきた時は…何の冗談だと頭にきたもんだがね。
人気取りにも他にやりようがあるだろう、と」

平石はたるんだ頬肉をぷるぷるさせながら笑った。

「いやはやしかし…日本バスケ界の至宝というべき存在だな。」

すっかり育ててやってくれ。これからを楽しみにしているよ」

ブルドックのような強面を満面の笑みにして、南部に語りかける。

「もちろん、アイツにはもっともっとデッカクなってもらいますよ
…最高峰までね」

日本人山脈トリオからもみくちやにされた宮瀬がやっとこさ解放されたら、今度はデイベス、ヒューストン、あともう一人のアメリ
カ人トリオに捕まっていた。

なんか言われてるけど、宮瀬は答えられなくてまごついてる。

（あ…なんかいつもの宮瀬だ）

クラスでぼんやりしてる時の宮瀬の一面がのぞく。

につこにこのクラレンスとドウドウが富山のアメリカ人トリオと一緒にになって宮瀬をもみくちやにする。

おろおろする宮瀬が、なんか可愛い。

開幕につまずかされた優勝候補の一角、富山ゴールデンナゲッツの選手達が、自らの敗戦を悔いるより先に…敵選手の鮮烈なデビューを祝福している。

拍手。

万雷の拍手。

両軍の健闘を称える拍手、そして歓声。

「すごいね…美夏……」

「うん………うん………」

激戦が終わって、見ていただけだったのに全身から力が抜けてしまったアタシは、ただただ…見つめていた。

『さあ、みなさんもう覚えていただきましたでしょうか』
叫びすぎてしゃがれたマイケル・コールのアナウンスが響き、煽る。

『あなたの瞳に焼きついたでしようか！』

…焼きついたよ、もう一生、忘れない。

『あなたの記憶に刻まれたでしょうか！』

…刻まれたよ。もう、忘れられない。

『今日の試合の主演……そして、これからの日本バスケット界の主演を！』

観客全員が怒涛の喚声を上げる。

『本日のマン・オブ・ザ・マッチを発表します！！』
プレイタイムたった25分の短さで！

14得点！

両チーム一位、7アシスト！

同じく両チーム一位の3スティール！

1ブロック！

1スラムダンク！

日本バスケット界の超新星！風雲児！！

ミヤセエエエ！ ナオキイイイ！」

コート中央センターサークル。

チームDJが宮瀬にマイクを向ける。

輝かしいスポットライト、

「宮瀬くん！！

文句なしの、本日のマンオブザマッチ、でえす！！！」

鳴り響くシャッター音、写メを撮る電子音、フラッシュの光、スポットライトの光、

「あ、ありがとうございます」

「見てえみんな！この子、僕よりちっちゃいよー」

おどけた拍子で宮瀬の背と比べて、体育館に笑い声が起こった。

落ち着くのを待ってから、宮瀬はゆっくりと話し始めた。

「僕のような若輩者を、チームの一員として認めてくれたことに感謝します」

「開始直後のスラムダンク！度肝をぬかれましたあ。

狙って！ましたか！？」

ズズズイッと押しつけられるマイクに少し仰け反りつつ、

「相手が警戒する前に、チャンスがあればやろうと思っていました。

無理ならパスしようと思ってたんですが、エゴロフさんがほとんど跳ばなかったんで…」

「ガツンと？」

「ガツンと、行かせていただきました」

カッコヨカッタゾーと、二階席から聞こえてくる。

宮瀬がそっちを向いて手を振ると、大きな歓声が上がった。

「日本人でも、翔ぶことは、ダンクをする事は可能です。」

ダンクは特別な才能じゃないんです」

「ダンクやジャンプ力だけじゃありません、ポイントガードという難しいポジションを、まるでベテラン選手のようにこなしました」

「何よりも、チームの勝利に貢献したいと思っていました」

「小学校の卒業時点でフライングソーサースの練習には参加させていたでいていました。」

紅白戦なんかでは僕も混ざっていた

「

「シユートのコツは南部さんから」

「監督からも多くの事を教わっています」

「十年以内に、NBAへ行きたい」

「その為の最短手段として、今プロになる事が必要だと思いました」

「今日見てくださったお客様は、どうか家族に、親戚に、友人に、

同僚に、部下に、上司の方に伝えてください、日本でも面白いバス
ケをやってる所があるんだって」

「追いつきたい人がいるんです。」

今のままなら、僕は一生その人に追いつけない。だから、追いつく
ことができるようにこの道を選びました」

宮瀬が客席に手を振って、喚声に応えた。

洪水のようなカメラのフラッシュに目を細めて。

「すげえ……凄すぎるよ……」

遂に、鬼頭が認めた。

「勝てるわけねえ……あんなのに」

「……………負けたく、ない」

あたしは口の中で、呟いた。

「アタシは、アンタに、負けたくない!!」

モノオモフ秋

夕暮れ、赤い空。カラスの鳴き声…黄昏時。

物悲しいトロイメライが鳴り響いて、校庭から少しずつつこども達の姿が消えていく。

二人、何も話さず…話せず、ただトロイメライを聞きながら…日が落ちるのを眺めていた。

「なんか……………すごいことになっちゃったね」

先に口を開いたのはきーちゃんの方から。

「……………うん」

半ば放心したままのアタシは生返事。また沈黙。

きーちゃんが何かを言おうとして、ためらって、アタシから目線を外す。

アタシは宮瀬のメガネを胸元で手のひらに包む。

昨日……………試合が終わって、きーちゃんの当初の予定ではみんなでカラオケに行くつもりだった。

もちろん、宮瀬も含めて。

でも、試合が終わっても取材だかなんだかで、宮瀬はアタシ達のところに戻ってこなかった。

究極電力記念体育館の出口で何分待っても、何時間待っても……………出てこない宮瀬。

クラスメイトはそれぞれ別行動になって…アタシときーちゃんだけが待ち続けて……………結局、諦めた。

家に帰ると夕方のニュースで宮瀬のダンクシーンが放送されていた。229センチのエゴロフを吹っ飛ばすダンクシーンに、ニュースキヤスターが言葉を失っていた。

福岡フライングソーサーズは宮瀬直樹（十四歳）と日本バスケット

ト界最年少のプロ契約（B契約、推定年棒200万円）を結んだと発表された。

夜のスポーツニュースで、ダンクだけでなく宮瀬のハイライトシーンが特集された。元日本代表ポイントガードが解説に来て、宮瀬の凄さを力説しまくっていた。

朝のニュースでも宮瀬のハイライトシーンが放送されまくった。新聞の一面、左側に、ダンクした瞬間の宮瀬のカラー写真がどにかく掲載されていた。

母がにこにこ笑って写真を指差した。

「あらあら、みっちゃんも此処に写ってるじゃないの」

「え？ あ！ ホント！？」

驚いてる観客の所にアタシも写っていた。

その写真は切り抜いて、部屋に飾ることにした。

昼には宮瀬をおうえ……試合を見に行こうと究極電力記念体育館に行ってみた。

「あ、美夏？ あんたも」

「お、みなきち、おまえもか」

体育館に行く途中、特に約束した訳じゃないのに、昨日のメンバーの何人かと合流した。みんな気持ちは一緒だった。

でも、試合は見られなかった。

「ちょ……超満員……？」

開幕戦で半分も空席が出ていた試合が、今日は当日券完売、ダフ屋が横行するほどで……アタシ達のお小遣いじゃ、会場に入ること出来なかった。

「かえろ……美夏。ここにいてもしょうがないって」

「……………」

「メガネなら明日学校で返せばいいじゃん。

……………だから、さ」

「……………うん」

会場の外まで響く大歓声に後ろ髪を引かれながら、アタシ達は…
…帰るしかなかった。

家に帰る途中、ふと立ち寄った母校、高鳥小学校のバスケットのポールに、二人で寄りかかって…

「アタシたちが手を伸ばしても届かないくらい……………遙か遠くの人に
なっちゃったあ……………」

返せなかった。

返そうと思っただけど、届かなかった。宮瀬には、近づく事も出来
なかった。

「……………美夏……………」

そっぽ向いて目をゴシゴシこするアタシの背中に、きーちゃんがおずおずと声をかけてくる。

「ここ、なんだ。

アタシが、

初めて、

宮瀬と、

話したのは」

ボールに背中を預けて、アタシはきーちゃんに打ち明ける。

五年前、小学四年生の時……………

第一種接近遭遇

アタシが小学四年の時、タカシヨーナンバーワンを決めるワン・オン・ワン対決をいつも昼休みにやってたんだ。

ほとんどが男子の中で、ミニバスやってたアタシはそこそ上位の方にいた。

でもトップに行くには、デカイ壁があつたんだ。

その頃のアタシには、どうしても倒せない奴がいたから。

二つ上の六年生。野球やってる堀口周作ってヤツ。今は大御濠高校に行つて甲子園目指してるはずだけど。

その時点で身長180センチ。

アタシはまだ140あるかないか……なんだよ。小学校からあんまり育ってないとか言うなよ、バカ。

相手は技術は大したことないけど、持ち前の運動神経活かして全勝してやがった。

ダンク出来たしな、堀口のヤツ。この小学生用の、高さ275センチのリングでだけどな。

とにかく、小学生としては反則的な強さだったんだ。今思えば、鬼頭ほどじゃないけどな。

そいつに勝つためにアタシは色々工夫してたけど、なっかなか勝てなくてさ。

その日も、勝てなかった。惜しいところまではいったんだけどさ。「勝てるわけないのに……」

教室に帰って席に着いたら、ボソツとした声が聞こえた。

「あん？」

「どうして、そんなに必死にやるの？」

転校してきたばかりのヤツが、話しかけてきた。昼休み、クラス
の窓から校庭のアタシ達を見てたらしい。

根暗で、やな感じだなんて思った。

嫌いなタイプだった。

宮瀬はNHKだった

第二種接近遭遇

ちよつとムツとしたけど、ほらアタシってば心がひろいやん？だから笑顔でこう言っただけだよ。

「なんじゃいこのヘタレメガネ！ケンカ売ってんの！？」

びつくりしてクラス中の目が集まる中で、

「…事実をいつてるだけだよ」

暗い顔して、目線をそらして、メガネは呟いた。

「……バスケなんか、一生懸命やっても仕方ないよ。」

身長も、ジャンプ力もない日本人には……バスケは不向きなんだよ」

メガネはなんかを諦めるように、言っただ。

「………何より、全くお金にならない」

「宮瀬のヤツ、ホントにそげなことゆうたと？」

「うん、あのころの宮瀬は…なんかバスケを嫌ってた」

きーちゃんのびつくりまん丸な目がおかしくて、プツと吹き出しつつ答える。

「ただのスポーツ嫌いの運動音痴だと思ってたのになあ……」

腰に手を当てて、そのいけすかない奴にイヤミをいってやったの

さ。

「なんだお前、NHKか」

「え…えねえち、けえ…なんで？」

なんで国营放送？と目を丸くして、初めて戸惑いを見せた宮瀬に、アタシは笑い飛ばしてみせる。

「N にほん

H へなちよこ

K きょうかい

の略でNHKだよ。

日本人はへなちよこだからスポーツで〇〇に勝てないって通ぶって言いまくるヤツだよ」

ぼかん、と口を開けた奴の鼻先に指を突きつける。

「お前みたいに、さ」

むぐ…と言葉に詰まった。

目ン玉洗ってよく見てみる！

「身長で負けてるから？…はんっ！それがどうした！」

腰に手をあて、

「スピードでも負けてるから？関係ないやいそんなもん！」 ふん
ぞりかえって、

「柔道と同じだよ、柔よく剛を征すってさ」
胸を張る。

「いいかあへなちよこメガネ」

「へ…へな…メガネ？」

「背が低くても、スピードが遅くても…テクニクで勝てるんだよ」
「…30センチ以上の身長差でも…？」

「小さいのがデカイのに勝ったら、気持ちいいじゃん！」
アタシはにっこり笑ってみせる。

「それこそが、バスケの醍醐味なんだよ」

宮瀬は一度言葉につまり、目線を逸らした、アタシから。

「…勝てるんなら、ね」

「おー、勝ってやろうじゃないのさ。一ヶ月以内にさ！あのノツポ
の堀口を倒してやるよ！」

トン、と胸を叩いて見栄を切る。

「チビでスピードもなく、おまけに女のアタシが、あのキリンモ
ドキをぶったおしてみせるよ！」

「見てろよこのヘタレメガネ！お前の目が節穴だって思い知らせて
やる！」

ドーンと指を突きつけて、

「……………え？」

ここまでで一番驚いた顔をする。あんぐりと口を開けて、信じら
れないという文字を顔に張りつけて。

「女の子……………だったんだ？」

「目ン玉腐つとるんかー!」

言われ慣れてたので、反応も慣れている。とりあえず、ソッコで教科書で頭を叩いた。

「こ、こここの健康美少女美夏様を見てな・に・が・男だとお! 死ね! 死にさせ!」

「おーいオマエラー、そろそろ五限の授業始めていいかー?」
「制裁が済むまで待つてよ先生!」

「まあ、そんな感じの初対面だったわけよ」
「あんたらしいわー」

なぜ呆れ顔になるのか、きーちゃんよ?

第二種接近遭遇

放課後、

「てなわけで特訓すつから、手伝えもやしメガネ！」

「も、もや……？じゃなくて、なんで僕が……ぐえ！？」

まあ、転校してきたばかりでクラスに馴染んでない感じもしたからさ、強引に連れ出したんだよ。

「あんたケツコ―背高いから、ちようどいい練習相手になるんだよ。突っ立つてるだけでもいいから、来い！」

襟首つかんで、引っ張ってさ。

この、リングの、とこまでね。

「いいかー、ふにゃふにゃメガネ。まず最初にいっとくけどお……」

早く帰りたいなーってツラしたメガネに

「バスケは、身長じゃない！」

ありがたーいお言葉を聞かせてやる。

「ハートだ！！ハートのデカさが大事なんだよ！」

「そのぺったんこな胸でよく言うわねアンタ」

「うっさいきーちゃん、回想に茶々いれんな」

「……………まるで、アレン・アイバーソンみたいな事を」

「……………あれ、ん……………？誰それ？」

「知らないの？NBA見ないの？NBA史上一番小さな得点王なんだけどさ」

「知らん、見らん」

「NBAのスターの一人だよ。」

「なんだメガネ、えぬびーえーマニアか。そりや世界さいこーほーと日本のバスケットを比べちゃつまんねーよな」

だから通ぶってんだな、っていうとメガネが微妙な顔してた。

「で、バスケットはやるより見る専門なん？知識だけの頭でつかちか？」

「……………まあ、そんなもんだよ」

だいぶ間があつてから、宮瀬が口を開く。今思えば、何かを考えるには充分な時間だったと思う。

「ま、いいや。練習ついでに、アタシがバスケット教えてやるよ」

「いや、別にバスケットをやりたいなんて一言も……………」

「見るのもいいけど、バスケットはやるのも楽しーぞ！」

有無を言わず、アタシは『特訓』を開始した。

「で、アタシが教えてたんだ？」

「うん、宮瀬のヤツバスケットがホント下手でさ。ドリブルもまともにできねーでやんの。シュートも全然入んなかったし」

「……………今では考えられないわねえ」

「だからまあ、ほんとに基礎の基礎から教えてたのよ」

「その時にさ、なんかこう……今の宮瀬を匂わせる、天才的なものとかは感じなかったの？」

「全く全然これっぽっちも」

メガネレスメガネ

昼休みと放課後、宮瀬を相手に1on1で練習しまくった。

「ああ、でもアイツ、ディフェンスはうまかったな」

何日かすると、1on1で宮瀬に止められるようになったんだ。

「なーん—with!?」

それがもう悔しくて悔しくてOh! Goddam! ってな感じだったよ。

「…………ストレートすぎると思うんだ」

オーバーリアクションで悔しがるアタシに汗を拭いながら宮瀬は語る。

「攻撃のパターンが少ないから、読みやすい。

強引に突っ込むだけじゃなくて、かわすこと、タイミングをずらすこと…………そういうパターンを増やしたらいい、と思う」

「なんだよ、下手なくせに偉そうな事言うなお前」

野外コートに仰向けに寝転びつつ、宮瀬にムスツとした顔を見せた。

「体格差があるんだから、距離を空ける工夫をしないと」

転がってるボールを左手に抱えて、宮瀬がアタシのそばで右手をさしだした。

「ん…………あ…………あー、ありがと…………」

ちよつとためらってから、宮瀬の手に捕まって、起こされる。男の子の、手に。

(…………ちよ、ちよつとくらい…恥ずかしがってもいいじゃんかよ、宮瀬。仮にも女の子の手にぎってんだぞ!)

そーんなアタシの乙女心なんて気付きもせずに、

「まあ、無難なところではサイドステップとステップバックかな」

宮瀬が、メガネを外した。

(……………あれ?)

宮瀬のイメージが変わる。

メガネをかけている時の、のんびりとして、ぼんやりしたイメージがなくなる。

メガネを外した宮瀬は、アタシを鋭い目つきで、射抜くように鋭い目つきで、

「じゃあ、ヒントをあげようかな」

タン、と一つドリブルをついた。

才能の片鱗

相変わらず宮瀬のドリブルは変に高くて危なっかしいし、動きはぎこちなくて素人丸出し。

ここまでの1オン1では簡単に止めてきた宮瀬のオフENS。

でも、

メガネを外した宮瀬に、アタシの体は警戒心を強める。

なんか違う。

さっきまでと、なんか違う！

メガネの下に隠れていた瞳は鋭い。

何かを狙っている目付きに…アタシは緊張を高めた。

シュン、と宮瀬の顔が近づく。

宮瀬の瞳の中に、焦ったアタシの顔が映るほど。

（はわ、あわわ！？）

びつくりして下がるアタシに宮瀬が追走する。

気を取り直して、これまで以上に真剣にディフェンスにかかる。

宮瀬は左手でアタシの動きを抑えつつ、右手でドリブル。

狙いは、アタシの左側を抜いて、外回りにリングを目指すコースか！？。

宮瀬が、グン、と圧力を増して、

（来る！）

と思って大きく下がったら

「あら？」

来なかった。

Ｌ字。

ズバリ直角９０度。

宮瀬が真横にワンドリブル。
リングから遠ざかるように。

二人の距離が開く。

そのままジャンプシュート。

「この…！」

ブロックに飛びついて、もう遅い。宮瀬のシュートは弧を描き

……

バックボードの上に当たって、バコンと音を鳴らした。

（外してやーんの） という思いを込めてジト目を向けると、宮瀬
がすました顔で、弁解した。

「ハズレてもいいんだ。

まあ、入った方がいいに決まってるけどさ」

といいながら頭をかきつつ宮瀬は語る。

「そんな技があるって、相手が警戒しさえすればいいんだ。そうす
れば、相手が迷う」

「迷う…ねえ」

「今みたいに離れて距離をとって…」

宮瀬がさつきと同じように横にスライドして、更にリングから遠
ざかる。

「で、シュートを警戒してディフェンスが近づいてきたら…」

宮瀬が手招きするからテテと早足で近づいたら

「焦るディフェンスを、今度はドリブルで抜けばいい」

ボールを持たないまま、宮瀬がアタシの左横を走り抜けた。リン
グにレイアップの真似をして、アタシに振り返り解説を続ける。

「迷わせるにはパスもだね。いいパスが出せれば、更にディフェンスは迷う。……まあ今回は1 on 1 だから必要ないけど」

宮瀬は近くを転がっていたボールを拾う。

「迷わせたなら、迷って、相手が中途半端なディフェンスをしたら、相羽さんが勝つ確率は高くなると思う」

夕日を背にして、微笑む宮瀬。

「ここ数日一緒に練習してみて分かったから」

「分かったって……な、何がさ」

宮瀬の笑顔が……もとい、夕焼けが眩しくて、アタシは視線を逸らして…

「相羽さんは、バスケのセンスがいいってこと」

恥ずかしげもなく、
惜しみなく、

アタシを誉める宮瀬の声に、アタシの身体が奮えた。

スポーツニュース（前書き）

相変わらず間を空けてしまい申し訳ありません。

スポーツニュース

「美夏ちゃん、宮瀬君がテレビにでるわよ」

家に帰ると、ただいまを言うより早く、ママが声をかけてきた。

「わ、わわ、見る！」

大急ぎで靴を脱いでリビングへ。

「おかえりなさい」

「ただいま！」

あいさつもそこそこにテレビ前のソファーに飛び乗る。

「ぐえ!？」

ソファーで寝てた弟を踏んじやったけど、気にしない。

画面には宮瀬が……

「映ってないよ!？」

「みかちゃんったらあーわーてーすーぎ CM明けらしいわよ」

う、あ、な、なーんだそーか。一瞬すぐガツカリしちゃった……

だから母、そんなニヤニヤと含みのある笑顔でこっちみんな。全くもう、学校だけじゃなくて家でまでこんな……

「家庭内ばーりよくはんたーい……安眠の権利を妨害するなあ……」

ふわぁ……ぐう……」

もぞもぞとアタシのおしりの下から抜け出した弟がソファーの隅っこで丸まって再び昼寝を再開した。我が弟がなかなかタフだなあ……

CMが明けて……

『暗い話題の次は、明るいスポーツです。』

いやー、日本人でもあんな凄いダンクができるもんなんですねぇ。おじちゃんびつくりしちゃったよ!』

カッラ疑惑の晴れない人気キャスターの雑談に、お付きの女子ア

ナがにっこり笑う。

『カッコ良かったですねー。まだ中学生の、ちょっとかわいい感じがする子なんですけど』

『そのギャップがいいのよねえ。もうたべちゃいたいわ!？』

ご意見番の中年ニューハーフコメンテーターがくねくねと身体を悶えさせて、スタジオに笑い声が響く。こいつキモいんだけどなんでいつもいるんだろう？

キャスターが原稿に目を向ける。

『昨日、50センチもの身長差を覆し、229センチのエゴロフ選手を撥ね飛ばしてダンクを決め、鮮烈なデビューをした宮瀬君ですが、今日はどうだったのでしょうか？

元バスケットボール日本代表、土谷さんに取材に行ってもらっていますので呼んでみましょう……土谷さん？』

『はい。福岡は究電記念体育館から土谷がお送り致します』

画面が東京のスタジオから切り替わる。

昨日、現実とは思えないような光景を見せつけられた、今日は、入ることもできなかったあの体育館に。

…ぎゅう、と胸を締めつける想い。

この目で見れなかった宮瀬を、テレビのモニター越しに見られる喜びと、嬉しさと…おんなじ街にいるのに、まるでまるで遠い国にいるような…『距離』を感じて。

『正式なプロ契約…A契約ではなく、年収二百万円以下のセミプロ契約となるB契約ではありますが、宮瀬君は日本プロバスケット界では最年少デビューとなります。』

世界のバスケットボール界では同じく十四歳でプロ入りしたスペインのリッキー・ルビオ、フランスのオルレアン公子に続く三番目に若いプロバスケット選手となります』

髭の凄いおっちゃん…元日本代表らしいけど、知らない…が、手にしたカンペとカメラの間を視点をうつろさせながら、解説する。

画面はそのままに、東京から音声だけの質問が入る。

『そんなに若いプロデビューが多いものなんですか？バスケットって？』

返答は、すらすらと。

『大学生の体育授業の為に考案された、という歴史のある本場アメリカでは、大卒の選手が主流ですが、アメリカ以外の国では才能を伸ばす為に積極的に若手をプロデビューさせるところが少なくありません。』

現在NBAに所属する選手にもドイツで十五歳でデビューしたダーク・ノビツキー選手や中国で17歳でデビューしたヤオミン選手などがいます。

非常に稀にはありますが、天才と呼んでいい素質をもった選手が現れた時に、若いうちにどれだけ高いレベルに揉ませるかが素質を発揮するのに重要だと思われます。

宮瀬くん自身は中学の公式戦に出場したことは無いようですが、もし出場していたとしても、全国大会決勝まで行ったとしても彼のライバルとなりえる選手が一人でもいるかどうか……そんな状況で、彼の才能を伸ばすためには、プロデビューというのが一番の選択だったようです』

ヒゲのおっちゃん言葉に、ちよつと目がくらむ。

（すごい……宮瀬って、元日本代表にまでここまで評価されてるんだ）

『では、そんな期待を一身に背負った宮瀬君のプロデビュー二戦目をお伝えいたします』

リアルで見れなかった試合のハイライトが、ニュースに流れる。

不吉な言葉

試合前の客席の映像が映る。

『会場は今までにない超満員！去年の平均観客数1014人を遥かに上回る5188人が入場しました！』

昨日、開幕戦だというのにガラガラだった客席は立ち見までで大盛況だ。宮瀬効果で。

「今日は美夏ちゃんはどこに映ってるのかしら？ん？」
ママもアタシの隣に座る。

「あー…今日は…入れなかった。チケット持ってなかったし、当日券もとづくに売り切れてたし……」

この画面の中の人達みたいに客席に居れたらどんなによかったとか。

「あらあら～残念ね～」

シユンとするアタシの頭を、ママのあったかい手で撫でられる。ママはあやすように

「まあ美夏ちゃんはこのお客さん達とは違って、明日には学校で会えるからいいじゃないの。」

だからその分譲って上げたと思えばいいんじゃないのかしら？」
「べ、べつに宮瀬が目当てなわけじゃないもん！」

ヘッドスリップで撫で撫でを回避！

「あらあらそうなの？」

含み笑いをするママに

「そうなの！」

と牙（八重歯）を見せて唸った。

「ぐうぐう、ただの寝言だけど、姉～ムキになんなよ～余計あやしいぜえ～」

「寝てろ！しゃべんな！」

左足で不穏な寝言をいう弟の顔を踏んづけた。

「ぎゃゝ暴力はんたゝいゝ……………ぐうぐう」

あくまで寝言と言い張るように、空々しい寝息を立てる弟……………血が繋がっているとはいえ、ノリとテンポと感性の違う家族にいじられるのは、疲れる。

そうこうしているうちに、試合のダイジェストが始まった。

昨日、アタシ達がいたところとは違う、斜め上からのアングルで撮られる試合。違う視点からみる宮瀬。相変わらず、大男達の中に混じって、実際の身長よりすごく小さく見える。

映像で見る試合は、日頃部活で聞きあきるほど聞くボールが床を叩く音、バッシュが立てる鋭い金切り音が欠けていて、少しだけ現実感に乏しい……………けど、昨日の興奮がよみがえる。

(……………がんばれ、宮瀬)

と思ったのもつかの間、画面の右上に現れたテロップに、不吉な文字。

《 Dank王子、 Dank不発 》

前半戦

《 Dank王子、 Dank不発 》

不吉な言葉に、胸の奥がギュツと詰まる。

……… ついでに、 Dank王子なんぞというテンプレすぎるネーミングセンスにも、目が眩む。

『 黒人ガード二人に常に強固なマークをされる宮瀬くん。』

ノーマークだった昨日の試合と違い、仕事をさせてもらえませんか
初っ端から、宮瀬のミスのシーンが連続して映される。

『 富山ゴールデンナゲッツは、頻繁にトラップディフェンスを仕掛けてきます。』

トラップディフェンスとは、あえてディフェンス網に隙を作っておいて、そこに宮瀬君ほか福岡の選手を誘い込み、複数のディフェンスで囲んでしまうというものです。

福岡攻撃陣、追い込まれた先で囲まれ、ボールを上手く回せません
『

巨人達の罠に嵌まった宮瀬。

ディビスとヒューストンに囲まれて、ボールを保持するのでいっぱいっぱいな宮瀬。

ドリブルをカットされる所、パスのタイミングが合わずに誰もいない所をボールが空を切るところ…宮瀬のミスからカウンターで得点される。

ドキドキハラハラ、心臓に悪い映像。フラストレーションのたまなる展開。

（ 負けたのかな…まさか、負けちゃったのかな… ）

心の中は不安でいっぱい。

『インサイド、ゴール下が強いチームのディフェンスを広げるにはアウトサイドのシュートが重要なのですが、そのアウトサイドが決まりません。』

福岡は苦しい展開が続きます』

宮瀬の３Ｐが外れる映像に続いて、昨日は苦しいところで必ずシュートを決めていた南部さんのシュートが外れるところが挟まれる。

（どうみても負けパターンよね……）

ロングシュートっていうのは入らない時は本当に入らない。どうしようもないくらい。

アタシ達タカチュー女バスが負けるときも、ほとんどがアタシとキーちゃんの３ポイントが入らない時だ。

アタシ達女バスと同じように、福岡はゴール下で頼りになる選手が足りない分、攻撃は外からが中心になる…なのに、その外からのシュートが決まらない。

その上、宮瀬と、獰猛なオフェンス力を持ったドウドウ選手の突破力もトラップディフェンスに捕まえられて…

（八方塞がりじゃない！）

観客も、ひどく大人しい。ぐだぐだな試合内容に、盛り上がる要素が見つけられないのか。

半分しかいなかった昨日のアタシ達の方が、盛り上がっていたんじゃないかと思うくらい。宮瀬の衝撃的なデビューやとてつもないダンクがあつたからだけど。

『２ndクォーター３分、宮瀬君、流れを変えようとダンクにチャレンジしますが……』

コメントと共に、映像はデビスを抜き去った瞬間から表示される。

北海の氷壁

『試合の流れを変えるべく』

カメラが切り替わり、ゴール下からの、昨日アタシ達が見ていたようなアングルに変わる。

画面外から2つの影が超高速で飛び込んできて、昨日の衝撃を思いだし、ぞわっと身体が震える。

宮瀬の身体が躍動する。

もう一人は宮瀬に追走するデイビス。

追走してくるデイビスを左手で制しながら、宮瀬は飛び上がり右手でつかんだボールをリングに！！

『ダンクにチャレンジしますが………』

画面端、

伸びてくる、

不気味に、

青白く、

細長い手が、

「ああ！？もう！」

悔しさに、思わずアタシは画面に嘆いた。

その長い指の、ほんの爪先が宮瀬のボールを掠めて、ずらした。

『昨日の借りを返さんと、エゴロフ選手に、綺麗にボールだけを弾かれてしまいます』

宮瀬はボールを失った右手だけを、フープに叩きつける。カメラに映る宮瀬の驚愕！虚しく響く、金属音。

コートに着陸した宮瀬に、『北海の氷壁』が昨日のお返しとばかりに余裕たつぷりと微笑んだ。

「あーもう！」

身長差をまざまざと見せつけられて、アタシは頭を抱えた。
アタシもよくやられるけど、ムカつくのよねアレは。

「あらあら残念ねえ」

ママが頬に手を当ててため息をつく。

「でも、こんなおつきな人達に混じって試合できるなんて、この子すごいわ」。

まるで、美夏ちゃんみたいねえ」

「……………あの、ママ？そんなこと言われてもアタシが恥ずかしいだけなんですけど。」

「それにしても美夏ちゃん、まるで自分が試合に出てるみたいないな、感情移入っぷりねえ」

参考にしてるだけ……だよ？

「べ、別に変な意味はないよ！？た、ただ、単におんなじクラスの子がプロで試合してるから凄いな〜って思っただけだよ！？」
ママの不意打ちに、あわわと答えるアタシ。

「あらあら、そうなの〜？」

「アタシは、バスケの、参考になると思っ！み、て、る、だ、け
！！」

満面笑顔のママをほっという、アタシは試合に集中し直す。

（そうよ、アタシは参考にしてるだけ）

宮瀬のプレイスタイルを、アタシのバスケの参考にしてるから、
見てるだけなの。

そう思いながら、胸ポケットに入れた、預かったままの
宮瀬の眼鏡に、服越しにそっと手を添えた。

うなだれて戻る宮瀬の横顔を映す画像に、ナレーションがかぶる。
『宮瀬君がテンポを挙げていった昨日の試合と違い、ずるずると富
山の得意なスローペースに引き込まれて、前半戦を24対30とい
うロースコアで折り返します』

不満がアリアリと表れた、宮瀬の顔をアップにして。

あんまりおもしろくなさそうな、観客達の顔をバックにして。

『宮瀬君自身も三点しかとれない一方、パスのミスからのターンオ
ーバーを三回もしてしまうという失態をしています』

（疲れが残ってるのかな…昨日の宮瀬はこんなもんじゃなかったの
に！）

むっとしかけたアタシの耳に、ナレーションが飛び込んでくる。
『しかし、後半、バスケ界の超新星が真価を発揮しはじめました』

アタシの目に飛び込んでくる、変わった画面右上のテロップが。
《 Dank王子、 Dankだけじゃない! 》

壁パス？

画面の表示は3Q、4分ほど。

『リバウンドから、攻撃に移ろうとした大松の不用意なパスを宮瀬がステイル！』

まだ敵陣近くに残っていた内柴が、リングへ強襲します』

殺到する富山の巨人達。エゴロフと小嶋が待ち構え、ゴール下の内柴へのパスコースは大松に潰される。

『ゴール前の超密集状態に宮瀬くん、フリースローラインから果敢に飛び込みます』

（強引過ぎるよ！？パスもシュートもまともにできないやん！）

滑空する宮瀬のレイアップシュート…はフェイクで、巨人たちの壁の中、腕と身体を大きくひねって背中回しのビハインド・バックパスを強行する。

（あ、それは無理）

パコン、と間の抜けた音。

ボールはパスに反応していなかった内柴の背中に当たる。

やっちゃったー、という顔で内柴が振り返り、跳ね返り宙にふわりと浮かぶルーズボールにカメラが切り替わり、ブロックに飛んでいた富山の大男たちが着地して足が止まった…その時に！

黒豹のごとき、

漆黒の風が、

革のボールを掴みとり、

《ぎゃおおおおおおおん！！！！！！》

野獣のごとく、高く高く声を響かせて、画面には映っていないかつ

たスラムダンク王が、走りこんでいた。

瞬時に、宮瀬と内柴がゴール下の大松たちをスクリーンアウトで遮り、密集地帯に、ゴールへの隙間を作る。

『ドウドウ選手の一！』

金属の輪をへし折らんばかりの勢いで、

『とてつもないスラムダンクが炸裂！！』

剛腕を叩き込んだ。

静かだった満員の究極電力記念体育館が、割れんばかりの歓声に包まれた。

「…………… かつけ……………」

足蹴にしたまま寝てると思っていた弟が、ぽつりと一言。

「…………… は、はは」

アタシの方はというと、空いた口が塞がらない。

（…うつそでしょー、まさか…あの強引なカットインはこれを狙って……………？）

ノールックパスで、味方が反応できないことまで利用して？そんな発想ふつつできないってば）

考えれば考えるほどわけがわからなくパスに、なんだか頭がクラクラしてきた。

理解の範疇を超えていたのか、ナレーターの声も震えている。

『狙ったのか、たまたまなのか、好プレーなのか、珍プレーなのかは分かりませんが、この1プレーをきっかけにして、』

三人で顔を見合わせた後、苦笑する内柴は宮瀬の髪をぐしゃぐしゃにしながら撫でて、大笑いするドウドウは宮瀬の背中をバンバン叩く。

『＜ショータイム＞が、始まり

ます
『

認定 お墨付き

PVのように音楽に合わせて、宮瀬のハイライトが続々と切り替わり映される。

走る宮瀬、

疾る宮瀬、

かわす宮瀬、

空中でリアットとしか思えないブロックをかわして不安定な体勢からシュートを決める宮瀬、

ジャンプ中に三度もボールを切り返して内柴にアシストパスを通す宮瀬、

ノールックでパスを渡す宮瀬、

オフエンスリバウンドを取ったエゴロフが着地した瞬間にこっそり近づいてボールを

叩き落とす宮瀬、

空中で弾き飛ばされながらも放ったボールがリングを通過させる宮瀬。

わざとドリブルを空振りしてディフェンスを惑わして、裏拳でボールを叩いて、ドウドウにパスをする宮瀬。

画面に映るスコアボードが、ドウドウの二度目のダンクで逆転を示した。

「う……………わぁ……………」

宮瀬の動きに、アタシの目が奪われる。

震えるほどに、すごい。

でも悲しくもなる。この試合をどうしてアタシは見れなかったんだろう。テレビの画面越しにしか見れなかったんだろう。テレビのスピーカー越しにしか聞けないんだろう。ギュっと胸がつまる。

そうこうしているうちに、あっという間に試合終了のブザーが鳴った。

福岡 69 - 66 富山

試合終了の時間にはベンチに下がっていた宮瀬が、コートでプレイしていた味方選手を迎えに行く所で、試合の映像は終わった。

『宮瀬くん、終わってみれば9得点14アシストの大活躍！去年最下位のフライングソーサーズを開幕二連勝に導きました！』

ナレーシヨンの声が震えている。元日本代表のおっちゃんからみてもすごいと感じるプレーだったんだろう。

『いやいやいやいや、すごいね、この子はあ。』

あんな同じ人間とは思えないような巨漢を相手に堂々とプレイしちゃって……………」

東京のキャスターの声が割り込んでくる。

『土屋さん、どうでしたか噂の宮瀬君は？』

『いや、想像以上に凄かったですね。基礎技術の完成度の高さと…特に奇抜なパスセンスには驚きました。最初は、正直ダンクだけの選手かとも思ってたんですけど……………』

少し言葉を選んだのか、やや間があって、声が少し硬くなった。

『ちよつとだけ問題だと思ったのは、ターンオーバーの多さですね…野球で言うところのエラーみたいなものですが。』

ポイントガードというボールを奪われる危険度が一番高いポジションで、どんな一流選手でも平均で2から3ぐらいはやってしまうものなんです、宮瀬君、これを一試合で5回もしてしまったのはいただけません。

バスケットはどれだけミスをしないか、が問われるスポーツです、この辺りは経験不足を露呈してしまいました』

いったん問題点を示しつつも、すぐに声が明るくなる。

『とはいってものアシストが非常に多いので充分もとは取れていま

すが。

細かい数字になりますが、正確性を示すデータとしてアシスト数をターンオーバー数で割る、というものがあります。

この比率でいくと5分の14で、2・8となりまして、合格点レベルに落ち着きます』

震える声に、熱が籠もる。

『若さ故のミスをしたかと思えば、十年來のベテランのようなクレバーなプレイも見せる、技術や運動能力だけでなく、メンタル面でも底知れぬモノを見せてくれました』

最後に、元日本代表選手 土谷は、こう締めくくった。
『プロでまだ二戦しかしていませんが、断言してしまっていていいでしょう。』

この少年は、本物の天才です』

インタビュー 1

アナウンサーの言葉で、画面が切り替わる。またどこか別の体育館。

『宮瀬くんの登場によって注目を増した日本のバスケット界ですが、デイフェンディングチャンピオンである大阪デストロイヤーズの選手達は面白くないようです』

たこ焼き顔あんちゃんが、カメラに写っていた。

テロップには、大阪キャプテン・本吉選手の文字。

『なんやっちゅーねん！』

どっいっつもこっいっつも宮瀬宮瀬ミヤセみやせ！

オマイラ宮瀬以外はバスケットちやうつちゅーんか！？』

コテコテの関西人は怒り心頭というか怒髪天をつくというか、のっけから凄い剣幕だった。

『ワシラはリーグ開幕からこれまですつとの三連覇を！』

これ見よがしにビシッと人さし指を突き立てて、叫ぶ。

『三連覇を！！』

続けて、二本目の指、中指を立ててビシッと突き出される。

『三！ 連！ 覇！ を！！！！』

更に三本目の指、薬指を突き立てて、顔を真っ赤にして腕をプルプルさせて主張する。

（あー、もうわかったから。はいはい三連覇ね）

聞いているこっちが笑うしかないほど、くどい。サスガハカンサイ。優勝を三連続でしとるデイフェンディングチャンピオンやで！

わしらの報道は全くなしに流れるのは宮瀬ばー！っか！わしら存在全否定かい！？こんな偏報道やん！？

たかが Dank の一本二本でぎゃーぎゃー騒ぎすぎやって！みんな！』

ひとしきり文句を言った後、カメラを通して宮瀬に宣戦布告。

『ええかあ宮瀬よお！！オマエなんてなー全然大したことないっちゅーねん！！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8538c/>

フライングソーサー 2 1 4

2010年10月11日17時00分発行